三家庭

菊池寛著

始

特214
393

大衆文學選

三家庭

菊池寛著

鎌倉文庫版

欠

タクシー夜話

新宿まで客を送つて、チラツと見た驛の時計が、丁度十時だつた。こゝはまだ、火の海、人の海、騒音の渦巻。十一月末の夜空は青暗く、星を散らして、この二三日、寒さがさえて、ハンドルを握る指先に、しんと冷たさがしみ込んでゐた。

露店の並ぶ街に、やたらに續く燈の數。紅に、黄に、緑に、薄紫にと、色とり〴〵のネオンのスカイサイン。後や先に、ギツシリつまつた自動車、五六間先にお客らしい影を見出しても、警笛を鳴らしつゞけて、先の車の動きを促すだけで、なれた稼業とはいへ、いら〳〵して——これだから夜の新宿は、厭さあ——間がわるいと、四谷見附まで空車で流してしまふ——と、徐行で、雑沓を押し分けながら、大木戸あたり迄くると、——もう内から幕を引いた硝子戸、お客のまばらになつた屋臺店。犬が、さも用ありげに通りを横ぎる。その歩道の際に、客ありやと目を配りながら、鹽町の交叉點を越すと、向う側の洋品店の飾り窓、その横の小さな煙草屋の明るい灯影の中に、洋服と、鼻の先までショールに埋めた束髪の二人連の姿が、一つに塊まつて、

欠

どうやら自動車を求めてゐるらしいのを、すばやく見つけて、急カーヴを切つて、車を寄せると、ありがたし、互の話に笑ひ興じながら、行方も値も定めず、無雜作に乘つてくれた鷹揚な客。そのまゝ十間ばかり走りだすと、

「權田原を通つて、麻布市兵衛町よ。」と若い艶のある聲。信濃町あたりでまた思ひだしたやうに、

「それからまた、引き返して鹽町迄歸つてもらふの。」と、つけ加へた。

「いくらだい？」と寂のある男の聲が、始めて訊いた。

思ひ切つて一圓といひたい所を、「八十錢で參りませう。」といふと、

「丁度にしてあげるわね。」と、樂しさうな女の聲だつた。

信濃町から、六本木に拔ける權田原、新坂町あたりは、晝間でも人通りの少い、大きないかめしい建物ばかりの通、まして十時を過ぎては、電車停留場の赤い灯ばかりきはやかな寂寞たる暗い街だつた。暗い街を通るときは、座席の客の姿が、あざやかに前の硝子に映るものだつた。

整然としたオーバーコートに、ぴたりと寄せた棒縞お召の膝。あごを引いて、唇元に微笑を浮べ、始終上眼使ひに、物をいつてゐる女は、美しい人だつた。

無人の境を行くが如く、何の障害物もなく、運轉に氣を取られないだけに、二人の會話は、切

切ながら、ハツキリと耳にはいつてくるのだが、二人の關係は夫婦とは思へず、妾とすれば女の態度があまり明るく品があり、素人か商賣人かさへ見當が、つかなかつた。

六本木へ出ると、また明るい街、前の硝子窓の影は、消えてしまつた。

麻布の區役所を左に折れて、後は客の命ずるまゝ、右へ折れるとやゝ下り勾配の、打ち續く邸小路。中でも、相當廣げな邸宅のコンクリート塀にさしかゝつて、

「そこだよ。」と、男の客の聲がした。

門の前で車を停めると、主人の歸りをかねて知つたか、門扉は開かれ、その邊に佇ずんでゐた女中らしい小女の影が、前燈の光に照しだされ、パツと前栽の植込の中に、飛び退さつたやうに見えたのを、男は氣がつかなかつたやうに、

「ぢや、氣をつけて！」と、ものやさしい別れの言葉を殘して、門の内に消えて行つた。

門前の廣場を利用して、ハンドルを二度に切つて、方向を變へて、一、二間走りださうとすると、今男がはいつたばかりの門から、ひらりと降つてわいたやうに、走りだした、夜目に美しい女性が、

「その車待つて下さい！」と、低いながら、鋭い叫び聲で車を追ひかけて來た。何か用事かと、

すぐブレーキを踏まうとしたが、間髪をいれず、ほとんど同じ瞬間に、車中の女は、
「あつ！」と、叫びざま、素早く身體を片隅に避けると、「止めちやダメ！　早く、早くスピードをだして！」と、いふ必死な叫びだつた。
呼び止めた女の聲音に、歴々と不正なものに對する憤を感じて、正義感に訴へられるものを感じはしたが、運轉手としては商賣大事、乘せてゐるお客本位に動く方がと思つたので、思ひ切つてアクセルを踏むと、車は忽ち速力を増して、二三度叫びつゞける聲を後に、飯倉片町の通りに出てしまつた。
明暗直に變る夜の町を、女はまだ不安げに、後からも横からも、のぞけないほど隅つこに身體を小さくして、物思はしげな唇元は、むすばれ通しであつた。鹽町で降りるとき、
「どうもありがたう！」
初めて、禮をいつて、お禮心に、一圓五十錢くれて、街路に降り立つと、ほつそりした後姿を、寒さうに運んだ。
それから、四谷見附、市ヶ谷、牛込へ、空車のまゝ流して――やつぱり、お妾だつたのか、あの旦那、今頃はたいへんだらう――女中にちやんと立番をさせて置いて、飛びだしてくるなんて、

なか〳〵、ちやつかりしてゐる奥さんだな――などと、人のわるい一人笑ひがこみあげて來た。
看町から、少し築土の方へ寄つた所で、一寸車を止めてゐると、その時、遠くハツキリと、消防自動車のうなりが、きこえて來た。
本郷か小石川方面の空が、うすら赤い。
と、神樂坂の方から、小走りに走つて來た二人連れが、手をあげて、車に合圖しながら近寄つて來た。
二人乘るかと思へば、洋服の女だけ身もかるく、走り込んで、青年はドアに手をかけながら、殘つた。
「だいぢやうぶ、春日町か指ヶ谷かですよ。だから落着いてお歸りなさい。あまり、お急ぎになつて、事故なんか起す方が、よつぽどわるいですよ。ね、君あの火事は、小石川だらう？」
と、いきなり話しかけられて、運轉手は、
「さあ！」と、あいまいに返事をした。
少しでも、引き止めたいらしい青年にかまはず、車中の女性は、
「駄目よ。宅は、とても心配性なんだもの。彌生町まで急いでね。サヨナラ。」と、運轉手を促し

た。

ひどく焦りだした女に、青年は、一寸あきれたやうな、おこつたやうな表情を見せながら、輕く頭をさげるとバタンと、ドアを閉ぢた。

砲兵工廠傍を通つて、水道橋に出ると、左手はるか高く低く、空を彩つて、火の手は鮮やかだつたが、方向はまさしく白山の方だつた。

「やつぱり、本郷ぢやないわねえ。安心したわ。」

さばけた物いひをしなければ、二十一、二と思はれる黒づくめの洋裝の、しつくりと似合ふ愛らしい女。帝大と一高の間を入つて、しばらく行くと、二つ太鼓で夜廻りが、

「火事は、白山御殿町、火事は白山御殿町！」

その夜廻りが、出て來た細い小路に、車をいれると、そこはしづかな屋敷町だつた。

石柱に、鐵の扉のはいつた家の前へ、車を停めて、火事を見に出てゐたらしい女中へ、無言で意味ありげな瞬きを送ると、女中はニツコリしながら、首を振つた。すぐ憚りのない明るい聲で、

「御苦勞さま。六十錢あげればいゝでせう。」と、話の分つた料金のくれ方だつた。身輕に降りて、女中と並んで耳門から中へはいると、ハイヒールの小砂利を踏む音が、しばらくきこえた。

先刻から、後のバンパーが、ギイ〳〵と少し氣になる音をだしてゐたので、降りて調べた序に、門の標札を仰ぎ見ると、瀧山新二と、街燈の光りで、ハツキリよまれた。新聞か雜誌で見たことのある名前だと思ひながら、誰だつたか思ひだせなかつた。

バツクで、出るのには距離が遠いし、そのまゝ半丁ばかり徐行して、丁字路のところで、車を回してから、本通りへ引き返した。

池の端から、上野山下を流して見る氣になつて、藍染町の方へ降りながら（世の中には、美しい女も澤山ゐるものだが、をかしな事も澤山あるものだ。今の女は、あの家の奥さんに相違ないが、とすればあの青年は、何だらう。だがあゝいふ連中に限つて、料金をケチ〳〵値切らないからいゝや）ボンヤリ、そんな事を考へてゐると交叉點に來たのに氣がつかず、危く突き切らうとして、左から來た三十二年のシボレーと、ぶつかりさうになつて、あわてゝハンドルを切つたが及ばず、後のフエンダーにぶつゝけてしまつた。

交番は近いし、こつちの失策を辯解するに由なく、到頭相手の運轉手に、二圓の損害賠償を取られて、二人の女性からもらつた料金は、フイになつてしまつた。

（やつぱり、あんな連中を乘せるのぢやなかつた）

と、後悔しながら、上野の方へ向つたのは、十二時近くだつた。

お友達

宮川房子夫人が、向ケ丘の見晴しのよい坂の上にある、靜かな瀧山博士の邸に、自動車を乘りつけたのは、夫人にして見れば早い外出の、しかしかれこれ、十二時に近い頃だつた。

取次ぎの女中の姿が消えると、忽ち、

「いらつしやい！　どうぞ。」と、いつもながら、娘のやうにあどけない甘つたるいその人が、手を取らんばかりの欣びで、

「散らかしてあるけれど、私のお部屋が落着けるわ。」と、通されたのは、グルリ庭に面した、そこだけすつかり日本間のこしらへになつてゐる八疊の座敷。朱塗の銅火鉢をはさんで、すゝめもすゝめられもせぬ緞子の座蒲團の上に收まつたものゝそこは女同士、學校時代からの仲善しで、互に誘つたり誘はれたり、今日も三四日前に會つたばかりの、珍しくもない訪問だのに、初めは氣候の挨拶から、家族の安否を尋ねるなど、一くだりすむのを待ちかねて、

「いゝもの見せませうか、芝犬の子が五匹生れたのよ。とても可愛いのよ。」と、さもたのしさうな博士夫人の笑顔を、ぢつと見詰めて、

「いゝわねえ。貴女は！」と、いたく感に堪へぬ有樣に、美禰子は、子供つぽい瞳を、クルリと見張つて、

「何よ。何が羨ましいの。」と、訊くと、房子は視點のない眼を、見据ゑたまゝ、しばらく間を隔いて、

「わたしなんか生きてる甲斐がないわ。」と、いふと同時に、見る〳〵涙が一杯。涙をクスンとすりあげると、瞼に持ち切れない大粒が、ぽたりとお召の膝に落ちて來た。

「まあ。どうなさつたの。」驚きあきれて、ぼんやり不安さうに聲を落して、美禰子が訊ねた。

袂から、やう〳〵ハンケチを取りだして、涙を押しとゞめ、

「御免なさい！　私、昨夜ちつとも眠つてないもんだから——どうか、しちやつてるの。」

「どうなすつたの？　聞かして頂戴。」と、あたゝかい慰撫をこめた言葉に、涙腺が更に、ゆるけでもしたやうに、あとから〳〵涙が、一時にこみあげて來て、物もいへなくなつてしまつた。

涙をせつせと、ふきとりながら、

「わたし、また宅にだまされちやつたのよ。」と、子供のやうに、泣き笑ひを浮べて、やつと兩手を火鉢の縁に並べながら、

「私だつて、隨分修養してゐるつもりなのよ。何時か話したでせう。洋一ができた頃、新橋から落籍した女の話ね、あの後も三四人あるのよ。でも、素人はいやよつて、いつてゐるのに、今度は素人らしいのよ。しかも、圖々しく時々、家の前まで、送つてくるので、私、昨夜女中に張番をさせて、正體を見てやつたの。そしたら、誰だと思ふ、一寸……」と、房子夫人は、ヂツと相手の顏を見つめた。一時に涙をだした後の、夕立の後の明月。目元がさえ、顏色もほの赤く——

障子には、陽が一杯に明るかつた。

美禰子とは、同じ年のたゞ早生れだけの違ひで、學校のクラスも同じだけれど、かう並べて見ると、房子の方が五つ位は、年かさに見えた。

美禰子の實家は學者の家で、兄達二人も一人は博士、一人は教授で、姉は結婚はしてゐるが、C英學塾の教頭で、一家眷族學者なるを誇りとするためかどうか、美禰子も女學校を出たばかりの、うら若くやさしくあでやかな年頃に、帝大醫科の少壯教授瀧山博士に嫁いだのである。

房子夫人は、華美な容色そのまゝの性格で、昔からワイ〳〵もてはやされるのが、大好きだつ

た。美しく着飾つて會合や、音樂會に目立つ麗容を現してゐる内に、富裕の實業家で政治家である宮川氏の長男で、職業は辯護士であるが、遊んでゐても生活に困らない宮川孝三と、何の障害もなく結婚した。

坊ちやん育ちの良人の性格を、騰揚だとか話がよく分つてゐるとか、お友達にカナリヤのやうにやかましく、のろけてゐたのは、ホンの一年半ばかり、その後は、藝者を妾にしたとか、ダンサーと、どうしたとか、その都度美禰子の所へ愚痴をいひに來た。

だから、美禰子の方でも、さう〳〵は驚かないで、合槌を打つ事になれてゐたが——

「ねえ、一寸、今度の女誰だと思ふ？　私とても口惜しいのよ。ホラ、堀田の娘よ。家にゐた堀田の、貴女知つてゐるでせう？」

さすがに美禰子も眼をみはらずにはゐられなかつた。宮川家に、一、二年前までゐた食客で、土地や家屋の管理をしてゐた堀田といふ老人の、母のない娘で、房子夫人も何くれとなく面倒を見て、たしか實科女學校か何かを卒業させてやつたはずの娘だつた。

「素人はいやといつてゐるのに、人もあらうに、私の知つてゐる、しかも家にゐた事のある娘に手をだすなんて、あんまりでせう。しかも、相手が圖々しく、家の前まで、送つてくるなんて、

……こんなに二重にも三重にも、良人にだまされてゐる自分を思ふと、自分の生活といふものが、どこにあるのか残念で〳〵、何て自分はあほらしくおめでたく出來てゐるのかしらと、情なくなつて、やりきれなくつて、もういつそ、洋一と、耶奈子を連れて、實家へ歸つてしまはうかと、思つてゐるのよ。」と、そこまでいふと、まだ恨み深い涙が、じんはり浮んでくるのだつた。

「送つてくるのは、一寸癪ね。よつぽど、圓々しい女ね。……でも、お實家へ歸るなんて、つまり貴方が、相手に負けることに、なりやしないこと。——男なんて、チラ〳〵好きになる女が、外に出來つたつて、貴女には氣持の上で、特別なものを殘してゐらつしやるんだわ。別れるのなんのつて……」

「それならば、もつと打ち開けてくれゝばいゝのに、そりや見えすいた嘘をついて、ごまかすのよ。昨夜だつて、堀田の娘に相違ないのに、そりやお前の僻目だなんて、ごまかしてしまふのよ。」

話してゐるうちに、だん〳〵胸のもや〳〵が薄れて行く氣配に、美禰子夫人は、微かに助かつたといふ氣持で、笑ひを浮べながら、危くじようになりかけた火鉢に、切炭をついだ。

その美禰子の微笑の意味を見のがさず、

「でも、こゝへ來ていつてしまふと、いくらか氣がまぎれるわ。でも貴女はいゝわ。私と違つて、

まるで瀧山さんのすべてゞせう。」といふと、

「凡てか無かといふ言葉があるでせう。あれよ。」と、無雜作にいつて立ち上るのを、追ひかけて、

「なぜ？」

「だつて、安心されて、放りぱなしにされてゐるんですもの。大事なのか大事でないか分らないぢやないの。」奥へ行くふすまに手をかけたまゝ、一寸ふり返つていつた。

美禰子は、お勝手へ、食事の用意をいひつけに行つたらしく、すぐ引返してくると、裾前を正して、坐りながら、

「私にも、子供でもあればいゝと、しみ〴〵思ふわ。」といつた。

「贅澤だわ。子供さんなんか無くつても、貴女位、御主人に愛されてゐらつしやれば、幸福ぢやないの。」

「えゝ。」と、案外素直にうなづいて、「そんな意味ぢや有難すぎるの。でも、妻にとつて、あんまり善良すぎる良人は、罪惡の種よ。」

美禰子は、二十五だつた。瀧山とは、十二違ひだつた。女學校時代からのやさしい文學少女で、

子供もない有閑な結婚生活に、身體をもて餘し氣味の、書籍もよく讀むし、道樂といへば音樂で、レコードを澤山買ひあつめる位。動物が好きで、仔犬や小鳥の面倒を見てゐるのが、主な生活だつた。

華美な集合や、ダンスなぞは、意地になつて排撃してゐるやうなところがあつて、學者の妻としては、申分なかつた。

瀧山との結婚は、親友の房子にさへもらさないで、アツといふ間にしてしまひ、結婚後も、良人のことも、家庭生活の事も、立入つては誰にも話さない——自分の幸不幸を口にしない——見かけによらぬしつかりもので、そのくせ人交際は、圓轉すぎて、厭味なほど巧であつた。

仲善しなれば、何でもあけすけに、底の底まで、さらけ出して見せなければ、氣のすまない房子が、たまに、

「貴女つて人は、いつも聽き役で。自分の事は、チョツピリもいはないのね。私、いつも一人でしやべりすぎて氣がさすのよ。」と、嘆ずることがあつた。

いつもむつゝりしてゐるが、しかし好感のもてる瀧山の傍で、小柄で愛らしい利口な夫人が、舌たるい調子で、物をいつてゐるのは、二人の間に互の愛情と信頼とが、にじみ出てゐるやうに、

側からも見よかつたし、行住坐臥衣食住には、一切意を用ゐない博士の家庭に、夫人が來てからは、文學趣味の裝飾が、音樂が、繪畫が巧に取りいれられて外目には若い夫婦が、この上もなく愉快な家庭を持つてゐるものと、誰でも羨望してゐた。

だが、美禰子には——。美しい花にも、蝕んだ花瓣が、二三片交つてゐるやうに、彼女の心にも深いかげがあつた。

女學校を卒業した年に、知り合になつた久滋といふ青年と、一生忘れがたいほどの、初戀をしたのだが、自分の家庭が嚴し過ぎて、深入り出來るほどの往來も出來ず、先方にも緣談があり、美禰子も兩親に、どう願つても、許されさうもなかつたので、清くあきらめて、瀧山と結婚してしまつたのだが、一、二年も經てば、うすれて行くはずの心の傷が、結婚後六年の今もなほ、永久に陽の當らぬ陰か何かのやうに殘つてゐた。しかも、その陰が、この頃ではだん〳〵大きくなつて行くやうな氣さへする時、彼女は久滋と逢つたのだつた。

美禰子夫人が、昔の愛人である久滋と逢つたのは、全く思ひがけない邂逅だつた。

九月の初め頃の木曜日に、久滋は瀧山の知人の紹介で、彼の自宅へ診察を受けに來たのである。

彼は、肺尖を病んではゐまいかといふ疑ひで、やつて來たのであつたが、瀧山は胃カタルから

の神經衰弱だと診斷した。

その次ぎの宅診日の木曜日に、久滋は大分元氣でやつて來た。

そして、その時美禰子と逢つたのである。別れて以來、五六年ブツツリとお互の消息を耳にしなかつた二人は、思ひがけぬ場所で、思ひがけぬお互を見出して、ハツとした瞬間に、極く平靜な微笑を浮べ合つてゐた。年月がお互の感情を更へてゐた上に、美禰子には人妻といふ障壁が設けられて居ては、そのまゝ別れる外なかつた。

久滋は、淡々と現在の生活を語つた。今年の春、關西から歸つて來て、今は、某劇場の文藝部に働いてゐて、仕事が多いので、身體を壞したといつてゐた。それぎり、彼は瀧山の自宅に姿を現さなかつた。

彼が、それ以來、來なくなつたことは、美禰子には、かへつてわび住居の雪の夜に、ほと〳〵と扉をたゝいたまゝで、歸り去られたやうな思ひを殘した。

が、その偶然が、諺通り三度續いた。半月ばかりして、美禰子が銀座の蓄音器屋で試聽室から出たとき、フラリと入つて來たのが、久滋だつた。

三度目が、昨夜の新響の音樂會だつた。聞いたショパンの協奏曲が、急にほしくなつたので、

牛込へ歸るといふ久滋と一しよに神樂坂へ行つて、ミドリ屋に立ち寄り（今日は歸らないかも知れない）と、月に二三度は、研究室で夜を徹してしまふ、いつもの瀧山の言葉に安心して、つひぞ自分の事は語らぬ美禰子の唇が滑らかに動きだして、紅屋の二階で、一時間近く久滋と話しこんだ。

すると本郷方面の火事！

心配性の瀧山が火事に驚いて、家に歸つて來て、十一時過ぎになつてゐるのに自分が居なかつたなら——さう思ふと、ひどく良人が氣の毒な氣がして、自分でも可笑しい程あわてゝ歸つて來た。

だが、良人は到頭歸つて來なかつた。久滋は自分の振舞を、笑止に思つたであらう。

久滋は、まだ結婚してゐなかつた。あの時の緣談は、九分ほどまとまりかけて駄目になり、その後二三機會はあつたが、貴女への意地も手傳つたのか、まだ獨身でゐるのです——と久滋は笑ひながらいつた。その言葉を、昨夜は輕く聞き流したが、今日はもう一度會つて、しみ〳〵と話しがして見たいやうな、おだやかならぬ物思ひの矢先に、房子夫人がやつて來たのである。

自分の事があるので、房子夫人の愚痴をいつものやうには、身を入れて聽いてやれなかつた。

一々氣の毒さうに、聞いてゐれば、昔からの氣隨氣儘、何時間でも自分の事ばかり、こと〴〵しく話し立てる房子夫人が、今日は少しくすぐつたい――、といつて久滋の事など、いひだすべき筋でもないので、

「貴方のやうな旦那さまを持つても、悲しいし、私のやうな旦那さまを持つても、何だか物足りないものよ。女に生れて來たのが、そも〳〵間違ひらしいわね。」と、いふと、

「私は、この次ぎには、男に生れて來て、さん〴〵浮氣をして、この敵打ちがしたいわ。」と、房子夫人が、いきり立つと、美禰子は、

「私は、草花か何かに生れて來て、そよ〳〵風に吹かれてゐたいわ。」巧に、話を換へてしまつた。

晝食後、夕方まで坐り込んで、病的に頬が上氣してしまふまで、房子夫人は話しこんでしまつた。

美禰子は、夫人の話し振では、旦那樣への面當に、今晩は家に歸らず、こゝに宿るといひだすかも知れないと思つたので、ともあれ夕食の用意と腰を浮かせかけると、廊下に女中と誰かとの賑やかな足音がしたと思ふと、すぐ障子に影が映つて、

「叔母さま。一寸――」と、若々しい聲が呼んだ。

「まあ。惠美子、何しに。」と、立ち上つて廊下へ出ると、

「御免なさい！　お客樣だのに、いきなりお邪魔して。でも、惠美子、いそいで居るんだもの、今夜ね。」と、美禰子の頭を抱き寄せるやうに、耳に唇を寄せて、

「お母さまに、こゝに來てゐる事にして下さいね。私自分で電話をかけますから。」

どうでも、否とはいはせまい甘えた涼しい目元、白粉つ氣のない、叔母よりは一、二寸高い洋服の潑剌とした十八の娘だつた。

「そりやいゝけれど、一體どこへ行くの。あんまりヘンな嘘ぢや、後で私がお母さんから恨まれるから。」

「大丈夫よ。お友達と『青衣の夫人』を見たいだけなのよ。それだつて、お母樣いけないといふんでせう。私叔母さまの子だとよかつたわね。ね、お願ひよ。お友達と一しよよ。お友達はお玄關にあげてあるの。電話をかけたら、すぐ出かけるの。ね、ね。」笑ひながら、合掌して見せた。

「何時頃、歸るの。」

「十時頃、それまでに、お宅から電話がかゝつたら、うまくやつてね。」

「そんな事、惠美子、請合れない……」

いひかけるのを、皆迄聞かず行きかけるのを、冗談にも「いけません！」といつたら、泣きだしさうな無邪氣さだつた。

が、さすがに美禰子は責任を感じて、玄關にあげてあるといふ友達を、一寸見に行くと、見るからに、善良さうな氣の弱さうな少女が、ドギマギ顏を赤くして挨拶するのだつた。

新政策

元の部屋へ歸つて見ると、房子夫人は、他に客來と見て歸りかけてゐる容子だつた。

「ゆつくりしていゝしつてよ。姉の娘なんですの。ホラいつかお逢ひになつたことがあるでせう。姉と私と二十も違つてゐるものだから、娘なんか私より背がズツと大きいんですのよ。生意氣で甘つたれで……」と、いつてゐるうちに、邊にはゞかりのない電話の聲が、手に取るやうに聞えて來た。

（叔母さまのお家へ、中條さんと二人で來てるの。十時頃まで遊んで歸るわ。えゝ……えゝ……叔母さまお變りないわ。今お客樣と話していらつしやる……）と、あまりに、あけすけな物いひ

に、美禰子は思はず、微笑して、

「姉夫婦が、めちやくちに嚴しいもんですから、活動へなんかも私の家へ來たことにして、參りますの。可哀想な位ですの。」と、房子にいつてゐると、

（叔母さま、お電話に一寸出てよ）快活に遠くから呼び立てた。

惠美子が一しきり騷がして出てしまつた後、主人の瀧山が歸つて來た。やゝ猫背の、一寸支那人をでも見るやうな溫厚な青白い顏をして、口數が少ない人だつた。房子夫人は、知人の中で、こんなとつつき憎い人は居ないと思つた。何を思つてゐるのか、何を話しかけたらいゝのか、向うからは何にも話しかけないし、此方の話には、短い返事しかしないし、と言つて此方を怒つてゐるのでもなければ、嫌つてもゐないのだつた。

美禰子さんは、幸福ね、と口では言つてゐるが、美禰子が、無口の良人に、何やかや樂しさうに物をいつてゐるのを見ると、こんな煮え切らない人の、どこがいゝのかしら——と、時々思ふことがあつた。

瀧山夫婦と三人で食事をした後夜來のむしやくしやした氣持も、やゝ溶けたので、これから家へ歸つて、善後策を考へて見ようと思つて、八時頃瀧山の家を出た。

市兵衛町の家へ歸つて見たが、もとよりその時分家にゐる良人ではなかつた。洋一と耶奈子が女中の手でスヤ〳〵眠入つてゐるのを見とゞけて、さて自分の部屋に、獨りぎりになると、良人と昨日始めて知つた新しい女との、堪へがたい幻影が、――相手の女をよく知つてゐるだけに、今迄よりはマザ〳〵と胸に浮んで、安からぬ物思ひが續き、氣持は滅入り、じれにじれて、眼は冴えるばかり、美禰子に會つていくらか、まぎれてゐた苦しみが、夜の更けると共に、さかんになつてくるのだつた。良人の歸りかと耳をすます自動車のサイレンは、中途で止まるか行きすぎるかして、到頭良人は歸つて來なかつた。

これは、宮川の常套手段だつた。

妻に、新しい惡事を見つけられると、出來るだけうそでまるめて、逃げようとするが、理責めに合つて、どうにもならなくなると、窮鼠の如く、あべこべに强くなつて、高飛車に出て、憤りちらして次ぎの夜は家を空けるといふ……。

と、いつて宮川は、房子夫人にとつて、それほど薄情な良人ではなかつた。外で、女をこしらへるといふ缺點だけを除けば、物分りのいゝよく氣のつく旦那さまで、土曜日の夜と日曜日とは「家庭日」と稱して、妻子本位に暮してゐるし、洋一や耶奈子に對する極端に近い父親としての

愛情は、嫉妬に狂ふ折の房子夫人にも、純粹無垢な頼もしいものに見えるので、……

男の性慾なんていふものは、一つの淺ましい感情で、そんなものをお前に感じないからといつて、決してお前を愛してゐない譯ではないのだとか――戀愛と性慾とは珍しい物に對する一つのあこがれなんだ。毎日毎夜、顏を突き合はしてゐる女房に、そんなものを感ぜられるか、女房には、もつとじみな、しかしそれだけ深い尊い愛情を感じてゐるんだとか、聽いてゐれば半分もつともで半分得手勝手な議論と、――それから前にいつた父性愛とにまぎらされて、いく度か決心した離婚行をその度毎に思ひ止まつて來たが、しかし今度は……

普段から、そればかりはと、禁物にしてある素人、しかも素人も人によれ、一年前までは家にゐた堀田の娘と、どこかの家の茶の間で、今頃は、昨夜の出來事について、自分の批判などを交ぜて、何と話し合つてゐるのだらうと思ふと房子は、胸の内がたぎり立つてくるのであつた。

今度は、どんなにさげすまれてもいゝから、あの娘の家へ押しかけて、父子を並べて置いて、さん〳〵恨みを述べてやらう。たしか四谷邊にゐるはずだから、探せば分らない事はない。堀田も一つ穴のむじなで、久しくやつて來ない所を見ると、宮川から資本でもだしてもらつて、そのために資産を無くしてしまつたといふ米相場でもやつて、いゝ氣になつてゐるのだらうと思ふと、

堀田父子が仇敵のやうに憎まれて來た。

だが、夜が更けて、眠れぬまゝに、房子夫人の思案は、變つてゐた。今まで、いつもやつきになつて騒ぐので良人が何か張合ひでもがあるやうに、浮氣をするのかも知れない。今度は、一つ家庭政策を轉換して、絶對無干渉超然主義といふことにして見ようかしら。いくら、遲く歸つても悪い顔一つせず、どんな電話がかゝつても怪しまず、良人が我家三寸離れた後の行動は、一切不問に付して、こつちのするだけの事は、ちやんとして、私は美禰子さんの言草ではないが、そよそよと風に吹かれてゐる草花のやうに、すましてゐてやらうか。もつとも、それには絶大の辛抱を要するには、違ひないが。

房子夫人は、曉近く眠り、翌日は晝過ぎまで寢て、一昨夜見張りにだして置いたお氣にいりの、綾といふ股肱耳目とあまやかした女中を、

「あやア。あやア。」

と呼び立てゝ、朝湯にはいり、常より念入りなお化粧の傍に綾を捉へて置いて、勝手なお喋舌をしい〳〵、少し薄氣味がわるいほど、御機嫌がよかつた。

隣は何をする人ぞ

澁谷金王の中流の靜かな邸宅街、その一つの袋路の行きどまりに、まだ建つてから間のない新しい貸家へ、二三日前から越して來た一家がある。表札は露店の表札菁家の墨痕あざやかに堀田同菜。これは、宮川が房子夫人の探索を恐れ、にはかに移した隱れ家である。

宵から來てゐる宮川と、切炭を盛んにおこした手焙をはさんで、華美な大島に、茶つぽい袋帶をやゝ低く結んで、いかにも奥樣らしい裝ひの堀田の娘久美子。

「越して來て、ほんとによかつたと思つてゐるのよ。此處の方が、ずつと靜かで……」

「おれがよせといふのに。送つてくるのだけは、全く餘計だつたんだよ。」

「どうなんですの。その後の御機嫌は……」

「それがさ、あんまり晴々してゐて、氣味がわるいんだよ。」

「さう何だか恐ろしいわね。私だとお解りになつたら、隨分憎んでいらつしやるだらうに……でも致し方ないわ。」

と、目尻にこびがあふれる。

この娘の母親は、その昔九尺二間に生び立つた何町小町で、米相場で失敗してのらくらしてゐた堀田を見捨てゝ行方不明になつたのが、久美子の七つの年だつた。

母に似て美しいが、やつぱり母の性格を受けてゐて、少女のときから人絹は着ても木綿はいやといふ方で、父親を手古摺らせ、房子夫人に世話になつてゐる内にも、その華美好きな所だけ感化を受け、學校を出ると、娘の方が窮屈な食客生活に不服で、父をそゝのかして、宮川家を出て、自分から口を探して、丸之内會館のグリルのウエイトレスになつてゐた。と、そこへ宮川が、食事や宴會に來て、久美子の働いてゐるのを發見した。

そんな風に働いてゐると、また新鮮な美に溢れる久美子のよく發達した肢體や、なまめかしい笑顔を、改めて美しいと感心してはゐたが、もと〳〵主從に似た關係ではあり、初めは色戀を離れた親しみを微笑に見せ、久美子の番に當ればチップをはずむ位であつたものを、今年の二月、久美子が風邪から肺炎ぎみで一月以上寢つついたとき、宮川の事務所宛、無心の手紙をよこした。

――奥さまには、あんまりお世話になつてゐるから、この上御面倒をかけるのが恥しくつて…

と、いぢらしい書方に、ホロリとなり、二度金を屆け、三度目に見舞ひに行つてやつたのが動機で、久美子はグリルをよしてしまつた。

妾といはうか愛人といはうか、さうした關係になつてしまふと今まで相手にしてゐた藝者やダンサーとは違つて、宮川は思ひがけないほど、久美子に心をひかれた。ダンスはする、スポーツは何でも知つてゐる。洋裝をすればよく似合ふし、評判の映畫は大抵見てゐるし、たしかに妻の房子よりは一時代新しい女性である。華美な性格で、男に甘えることも上手だし、モダンな手管も心得たものだし……。別れるといふ日のあるのを、想像出來ないほど、宮川は久美子にほれこんでゐた。

だから、久美子を房子夫人に見つけられたのは、宮川に取つて、今までにない不覺だつた。房子夫人には、恩のある堀田父子だし、もしかくれ家を探しあてられて、膝づめ談判をされたら、恐れいつて別れますと、言はなければならないのだつた。だから、物に動じない宮川も、今度だけは、少しあわてゝ久美子を促してこゝへ移らせたのであつた。

「でも、お隣の人達、とつても妙よ、あきれたわ。」と、久美子がいつた。

「妙つて、どんな風に。」と、孝三は早くも、神經質に表情を變へて訊き返した。

その顏色には、おかまひなしに、サツサとつゞけて、

「あたし、すつかり憤慨しちやつてゐるのよ。もう隣の家の誰とも、口なんぞきかないつもりよ。だつて、お引越し蕎麥だけぢや、あんまりしきたりすぎると思つたのよ。それに、とても感じのいゝ十七八のお孃さんがゐるし、御懇意になりたいと思つて、昨日ねえやに虎屋の最中を持たせて、挨拶にやつたのよ。そしたらね、一昨日やつたお蕎麥の切手と一しよに、口上つきで返してよこしたのよ。宅では一切虛禮廢止の主義でございますから、今後とも盆暮の御心配などなさいませんやうに。氣持の上の御交際を、どうぞ末長うつて、恐い眼鏡の奥さんがやつて來ていつたんですつて……あんなお隣があるから、こんないゝ家が、空いてゐたのよ。その恐い奥さんが、女學校か何かの校長先生か何かですつて……」

御機嫌買ひで、とかく人に物をやりたがる久美子が、意氣揚々と、物を贈つて返されたのだから、さも殘念げに氣負つていふので、宮川も思はず可笑しくなり、

「フ、、、。まあいゝさ。世間にはさういふ人種もゐるんだ。向うで近所交際をしないつもりなら、結局都合がいゝぢやないか。うるさくなくつて……」

「そりやまあ、さうですけれど、その御主人つてのがね、これも先生か、何かと見えて、背の低

い八字髭ばかり立派な、をかしいやうな人物なの。そしてね向うの中二階の窓から、時々こつちを見てゐることがあるのよ。垣根が低いからこつちが、まる見えなんだわ。少し憂鬱よ。」

「冬は、障子を立てゝ置くさ。その内、樹でも植ゑてもらふといゝ。」

「兄妹二人の子持らしいのよ。兄さんは、帝大の學生よ。妹の方は、あんな親達には、似合はない、サバ〳〵した可愛いお孃さんなの。今日四時頃かしら、そのお孃さんが垣根ごしに、お宅へ子犬が迷つて參りませんかつていふのよ。昨日の事もあるし、(いゝえ)といつて探してやらなかつたら、さみしさうに、いつ迄も垣根のところにゐるのよ。そしたら、赤い小ちやな犬が、おどけた見たいな顏をして、よち〳〵家のお風呂場の方から出て來たのよ。お孃さんが、いくら呼んでも行かないの。氣の毒だから、あたし、たうとう抱いてつてあげたのよ。」

宮川の顏は、ほのかながら、何だつまらないといふ感じが出るのを、話はこれからなのよといふ風に、久美子は緊張してゐた。

「すると、びつくりするほど、うれしがつてお禮をいくたびもいふのよ。芝犬といふ犬で、本郷とかの叔母さんにもらつたんだつて、居なくなつたら、泣いても泣き切れないんですつて。そして、頬ずりをしたり、胸に抱いたり、もうたいへんなのよ。さうして私と話してゐると、緣側に

出たのが、お父さんの八字髭なのよ。いきなり（惠美子、何をしてます、惠美子！）って、ハツとするほど、大きい聲で呼ぶの。あたしの名と似てゐるから、とび上つちやつたわ。そして、あたしには、一禮もせずに、ひつこんでしまふの。癪にさはるつたら……」

「ふーン、大家に頼んで、垣根を板塀にしてもらふんだね。もつとも、そんな風ぢや向うで板塀にするかも知れないが、まあ、あんまり萬事氣にしない方がいゝ。」

宮川ののびやかな調子に、二人顔を見合せて笑つた。

あたゝかく、のびやかなのは、部屋の内だけで、外には十二月の木枯しの音が、心を凍らせるやうに吹きつのり、夜廻りの音が、さえかへつてきこえた。

宮川が次ぎの座敷に立つた後、久美子は、たちまち薔薇色のクレープデシンのパジヤマに着更へて、黒いナイト・ガウンを、フンワリ羽織つた。

そんな裝をすると、彼女はペルシヤ猫のやうに、エキゾチツクでなまめかしかつた。

久美子は、もとより賢い女ぢやなかつたが、「氣合ひ」の優れた女性だつた。かういふ女には、男が氣合ひ負けをする。（自分は賢い）（自分は美しい）といふうぬぼれと、自信とが、彼女を本質以上に見せる。

宮川には前からの恩もあり、最初の男性だからといつて、宮川の訪れを後生大事に待つて、貞淑にしてゐるといつた女性ではなかつた。宮川は、いはゞよいパトロンだつた。彼とかうなつて、お金にも持物にも、不自由がなくなると彼女はその天性を發揮して、いろ〳〵な集りや、ダンスホトルに顔をだして、ワイ〳〵もてはやされるのを、喜んだ。

臨町にゐる自分、すでに再三ならず、宮川をすつぽかして、夜遅くまで遊んで歩いた事もあるし、こゝへ來て、日も經たないのにもう學生が尋ねて來て、門前で立話をしたり、すべて、くつたくなく放膽で、少々ばかり出鱈目だが惡氣はなく、愛らしい陽氣な存在だつた。空想と實際との區別のない、魅力に富んだこの種の女性は、藝術家には愛されるが、道學者には眉をひそめられるものだ。

宮川は、時々いら〳〵させられ目を離すことが出來ないだけに、なほ心を引かれて、房子夫人にどんなに騒がれても、別れる心なんぞ微塵なかつた。

新居の珍しさに、ばしやいでゐる久美子は、三面鏡の前で、唇に思ひ切り西洋べにを塗り、耳たぶに、少しばかり塗香をふくませながら、

「明日ドライヴに連れてつてくれない？」と、鼻聲でいふと、

「うん。」と、次の間から返事した宮川の聲も、たのしげにのどかだつた。

房子夫人が、機嫌のいゝのを幸ひに、宮川は、その日到頭宿つてしまつた。

よく晴れて、冬日のあたゝかな次ぎの朝、ドライヴに行くからといつて、早起きの出來るやうな二人ではなかつた。

日が高まつて、二階の八疊いつぱいに、初冬とは思はれない、明るい光と溫暖があふれてゐる。

宮川は、新聞をひろげながら階下へ、

「おい！　腹がペコ〳〵だよ。」と、催促すると、

「はーい。たゞ今。」と、上機嫌な久美子の聲が彈み上つて來た。

――フランネルの寢衣に、丹前をひつかけた宮川は、縁側に出て欄干によると、目の前に山茶花の白い花が眞盛りだつた。昨夜の久美子の話の一件は、どちら隣かと眼をのばすと、右は崖の上に立つてゐて、何にも見えない。左は、といふよりも裏隣は、垣根の向うに、二百坪以上の無雜作な庭があつて、和洋折衷の相當間數のありさうな建物で、下座敷は日本式にガラス障子を建廻して、人影もなくしんとしてゐる。

「こゝの家だね。これぢやこつちからも、丸見えぢやないか。」と、口にだして呟きながら、欄干

からのめりだして、あつちこつち見廻してゐたが、矢庭にヒョイと首をすくめて、部屋へはいると、障子を半閉めてしまつた。やがて、アルピナチーズと番茶を持つて上つて來た久美子に、

「いけねえ。見られちやつた！」と、右手を指して、

「あちらの二階の窓から、女の人がヂツと見てゐたよ。」

「どんな人……？」

「君がいつてゐる眼鏡の恐い女の人さあ。チラと見たんだけれど、どこかで見覺えのある顏なんだ。くさるねえ、かう隣が近いのは……」

「どうして、こつちを見てゐるんでせうね。」

「他人の生活が、氣になるのは、日本人のわるい癖だ。その内でもとかく女はねえ。」

「ほんとに、だから女はいやねえ。」と、久美子も、いかにも輕蔑していつた。

「みんな君みたいに、サバ〳〵してゐるといゝんだが。」

「ほんたうによ。」と、久美子は、大眞面目だつた。

明日は、家へ四五人人を招待してあるので、房子夫人の御機嫌を取つて置く必要もあり、子供の顏も見たくなつたので、宮川は頃合を見計らつて、

「今日は、もうドライヴなんかしないで歸るぜ。」と、いふと、久美子は、存外あつさりと、
「えゝ。どちらでもいゝの。」と、もう自分單獨で暇をつぶすプログラムを考へて居るやうだつた。
「明日は客を招んであるから來られないし、――明後日まで大人しくねなけりゃ、ひどいよ。」
「えゝ、だいぢやうぶ。家に、ずーつとねてよ。」と、答だけは神妙だつた。
もう、ラジオの晝間演藝のハーモニカの音が、耳の底へヴヅ〳〵と響いて來て、とても久美子と、新しい家になれぬ女との食事の支度を待ち切れなくなつたので、
「ドライヴに行かないとすると、どこかへ御飯をたべに行かうか。」と、いふと久美子は、すぐ贊成して二人一しよに出かけることになつた。
裂路から、可なり廣い本通へ出たところで、その本通に門のある、問題の裏隣の人達が、門を出るところへ、パツタリぶつゝかつた。
なるほど、夫婦の子にしては美しすぎる十七八のスマートな令嬢と、神經質らしい二十三四の色の淺黑いやせぎすな青年と、先刻二階から顏を見合はした夫人と、謹嚴實直のカタログ見たいな髭の御主人と、一家總出の外出だつた。
久美子は、夫婦の批評家のやうな鋭い視線をあざやかに受け流して、いかにも惡戯娘らしく、

相手の懷に近寄つて、世辭々々しく馬鹿丁寧な挨拶をしたので、さすが謹嚴な御夫婦も狼狽して、タジ〳〵となりながらも、連の宮川の方へも眼を轉じたので、宮川も帽子を取つて、かるく挨拶しなければならなかつた。その連中と、三間と離れない頃、もう久美子が聲高に、
「御連中溫かなもんだから、代々木の原へでも散歩に行くのよ。で、なかつたら動物映畫でも見に行くのよ。」と、いひだすのを、
「聞えるぢやないか。」と、たしなめて、宮川は眉をひそめた。
「をかしいな、どこかで見たやうな顏だ。」と、
校長が何かだといふ夫人の顏にも見覺えがあつたし、令嬢の方もどつかで見たやうな氣がしたが、それがどこで見たのか分らなかつた。
澁谷の通りへ出て、自動車に乘ると、宮川は久美子に、
「さはらぬ神にたゝりなしさ。お隣の人を、からかつたりしたらいけないよ。どうも見たことのある顏だし、――あの夫人が家の女房の先生であつたりして、さうでしたかなんて、きまりのわるいことになるといけないから。」と、警戒した。
「えゝ氣をつけるわ。でも、先刻は痛快だつた。胸が、す！としたわ。私が、挨拶したら困つて

ねるんですもの。あのお嬢さん、可愛いでせう。でも、あんなお父さん、お母さんぢや、可哀想だわ。私がお友達になつて、少し仕込んでやらうかしら。」

「よしてくれ、お前が、そんなことを考へてゐるから、向うで警戒してゐるんだよ。ほんとに、注意なさいよ。」と、宮川は微笑しながらも、眞面目だつた。

町内の風紀

和田工學博士夫人伊佐子女史は、瀧山夫人の實姉である。和田は、某專門學校の、どこといつて特色のない教授である。だから、社會的には夫人の方が、ずーつと有名である。C英學塾の塾長は、もう喜壽の祝をすましたほどのめでたいお婆さんなので、教頭の伊佐子女史が學校の、內外で、多くの權限を持つてゐる。近頃流行の新聞の相談欄を引き受けてをり、昔からキリスト教信者で、すべてが物々しく、理解や融通が偏してゐて、罪の處斷には、ためらひなく、一刀兩斷の切味を見せる。そんな所が、一部からは輕蔑され、一部からはひどく賴もしがられて居る。

平たくいへば、嬶天下で、良人をかるく見て、ともすれば笠にかゝりながら、そのくせ良人からは獨立することは出來ないといふ質の婦人である。もちろん、嚴格な一夫一婦主義を尊奉してゐるから、妾などは、言葉だけでも唾を吐きたいほど、憎惡を感じてゐるのに、あたかも對等の階級のやうに、先方から、なれ〳〵しく挨拶をされ、氣のよい良人が、それにつり込まれ、相手の男に帽子を取つて禮を返したのは、思つても腹立たしい事だつた。

子供達の手前、鬱憤は、その場では口にのぼらなかつたが、その夜夫婦卓をはさんで向ひ合ふと、伊佐子夫人は、

「困りましたわ。」と、さも重大さうに口火を切つた。

「何が……」

夫人は眼鏡の奥から、小さく光る眼で、ヂロリと夫君を見やりながら、

「裏の女のことですよ。なれ〳〵と挨拶をしたり、貴君もなすつたり、困りますわ。隆一も惠美子も折角、間違ひもなく大きくなつてゐますのに、あんな者から、いやな感化を受けさせたりしたくないんですわ。ほんとに……」

良人は心得て夫人の意を迎へるやうに、

「全く、よくあの家へはあゝいつた風な連中が、越してくるね。行きどまりの袋小路で、人目に

立たないからだらうけれど……」

「今度の方が、先の人達よりずつと、性質がよくありませんよ。今朝なんかも、あの男の方が、そりやしどけない寢衣姿で、二階からこちらをヂロ〳〵探求するやうな眼で、見てゐるんですからね。どうしたものでせう。」

「まあ、隆一や惠美子が、あの人達に感化されて、間違ふこともあるまいけれど、よく注意して、絶對に交際ないやうにして置くんだね。」

「そりや、むろんですけれど、あゝ近くては、目につくし、いやらしい流行歌などのレコードをかけてゐるのが、自と耳にきこえますし、あゝいふだらしのない無教養な人達には、こんな所に住まつてもらひたくありませんね。」

「その内に、この前やつたやうに、世帶調査にくる巡査に告げておやりなさい。」と、夫君の決定的な一言に、

「あゝ、あれは利きましたわね。」と、伊佐子夫人の口元に、うすら冷たい笑ひが漂つた。

隆一と惠美子の兄妹はほとんど一體同心のやうに、仲がよかつた。二人は、兩親のくせは、ちつとも受けつがない、やさしい素直な青年男女だつた。この二人は、物心つく頃から、學校から

家庭へ、家庭から學校へと、勉强の課目に追ひまはされてゐた小さい兎だつた。そして、キリスト教のお説教といふ鞭が、とき〳〵彼等の頭の上で、鳴つた。

が、高等學校へ行き女學校へはいる頃から、二人とも、一徹に何の潤ひもなく、自分達の意見を强調する兩親には、少しも抵抗しないで、祕かに道草を食ふ廻り路を、お互に發見してしまつた。

隆一は、秀才型の青年で、兩親から受けた宗教的なもの、その矛盾した舊い觀念からくる凡てを、すつかり排擊して、友達とかくれて、禁斷の書を漁るやうになつてゐた。

惠美子は、閉ぢこめられた勉强の暗い洞穴から、パツと外界に、人一倍空想的な觸手をのばしてゐた。

よく、本郷の叔母の家へ行つた。そこへ行くのは樂しかつた。叔母の書棚には、色々に變形したロミオ、ジユリエツト物語があり、お友達とのかくれ遊びの策源地でもあつた。

いま兩親の惱みの種になつてゐる裏の女に、兄妹は互に異つた意見を持つてゐたが、ある同情に似た感じを持つてゐる點は同じであつた。

隆一は、女は美しいと思つた。次ぎには、ある生若さからくる、妙に老成ぶつた氣持で、女が

さうした境遇に、甘んじてゐるらしいのが、あはれに思はれた。

惠美子は、この頃よくアメリカ映畫の主題になつてゐる可憐な『お妾物語』の一つを見てゐるやうに、裏の女主人公を空想してゐた。子犬を抱いて連れて來てくれたその女性の、深々とした双眸が好きだつた。母のゐないときには、話しかけ、微笑みかけたいとさへ思つてゐた。

しかし、(裏の女と絶對に、つき合つてはいけません)といふ兩親の注意に、兄妹は神妙にうなづいた。だが、いつか同じ家に住んでゐた年増の園者を、兩親が町内の風紀のために、それとなく、いびりだした事を考へると、兄妹は憂鬱だつた。

夫婦がそろつて教育家であり、もうこゝに澁谷が開けかゝる頃から住んでゐるので、町内に隱然たる勢力があり、半丁ばかり行つた、角の交番の巡査達からは、町内で一番尊敬され、信頼されてゐた。だから夫婦が、新しく越して來た人達が素性がわるく、町内の風紀のためにわるいなどといふと、日蔭者の女に對してなど巡査の世帶調査は、たまりかねる位辛辣になるのだつた。

宮川には、その日も次ぎの日も、おとなしく家に居ますといひながら、久美子はその夜も次ぎの夜も、十二時過ぎてから、歸つて來た。

ずーつと晴つゞきの、その日も麗かな小春日和の晝近く、二階はまだ雨戸を閉したまゝの、薄

くらがりの中で、久美子は寢息さへ立てず、死んだやうに寢入つてゐた。

「奥さま。奥さま。」女中に、肩先を布團の上から、輕くゆすぶられて、細く眼をあけたが、夢を見て居るやうに、物の文色も見えず、女中の姿さへ分らなかつた。そのまゝ寢がへりをして、また眠りかけようとすると、

「奥さま、巡査さんが見えて、色々訊きますんで、一寸階下へいらしつて頂きたいんですけど、奥さま。」

「なあに、誰が來たの。」と、やうやく、枕元の女中の白いエプロン姿に、頬をなでられたやうな氣持で、半身もたげると、

「何ですか、私には、よく分りませんのです。色々訊きますから、奥さまをお呼びしてくるつて、申しましたんですけれど……」

「だから誰がさ?」

「巡査さんでございます。」

久美子は、あらはに不機嫌になつて、

「私が行かなくつちや、駄目なのかい?」

「えゝ。」軽い舌打ちをして起き上ると、パジャマの上に、昨夜ぬぎちらした衣物を、そのまゝだらしなくひきかけて、腰紐を結びながら、

「一體何時なの？」

「十一時半でございますよ。」と、いはれて、思つたより早いのに安心して、羽織のあるまゝに、伊達巻のまゝで階下へ行くと、玄關の三和土の上に、茶色の調査簿を持つて、若い巡査が突つ立つてゐた。眠氣もさめないし、ぼんやり障子の傍に神妙にすわると、

「お邪魔します。堀田久美子さんですか、貴女が世帯主ですな。」

「はあ。」

「家族はなし？」

「はあ。」

「病人もなし？」

「はあ。」

「大分夜遅くまで、お客様があるやうだね。」

巡査の言葉が、粗野だつたので、返事をしなかつたが、眠氣は忽ちなくなつてしまつてゐた。

「旦那があるかね。」

「えゝ？」と、何氣ない顔で、深い問ひをこめて訊き返すと、

「旦那があるならあるといつてもらへばよい。この邊は、みな良家ばかりで、夜の出入が少い所だらう。だから、犯罪でも起きた場合の參考に、知つて置かないと困るからね。」と、巡査の頬に妙な笑ひが浮んだ。

こんな風に訊かれたら、大概の女はドギマギ顔を赤らめるか、つまらなくクド〳〵辯解して、次ぎから次ぎと根掘り葉掘りに訊かれて、つひには旦那の名から職業迄いつてしまひ、次ぎの戸口調査が頭痛の種となり、交番の前を通るのもいやになり、急に肩身のせまい思ひをして、越してしまつたのが、この前この家に住んでゐた藝者上りらしいお妾だつた。

だが、久美子は少し違つてゐた。返事を待つて彼女をみつめてゐた巡査を前に、彼女の寢はれたやうな表情が、ピンとなり、首筋がシャンと引きしまつた。

「隨分失禮な訊問をなさるのですね。」と、大膽な語尾に笑ひさへ含んで、若い巡査は却つて手前の方が、ヘド〳〵してしまつた。足もとに視線を落して、靴で三和土をかるくけりながら、

「女ばかりの世帯に、男の出いりが繁ければさう訊かざるを得ないからさ。」

「一家を持つて居りましたら、客もありますし、お友達も參りますよ。」
「女主人のところへ、毎夜遲い客があるなぞは、少し困るからな。町内の風紀上よろしくない。この邊は、閑靜な、學者とか官吏とか眞面目な家庭ばかりの町だから。」
「獨り女は住めない所でございますか。」
「そんな事はないが、たゞ通つてくるお客の素性が分つて居ればいゝんだ。」
「お調べの家族は、私と女中の二人ぎりですわ。時々くるお客樣を旦那と思ひ、私をお妾だらうと思ふのは、他人樣の勝手ですわ。それで結構ぢやありませんか。それよりも、お隣の御夫婦あれはどんな御商賣なんですの。」
「あれは、有名な學者の御夫婦だよ。」
久美子は、思ひきり輕蔑の調子をこめて、
「何だか知りませんが、此方の家を隙見ばかりして、ほんたうに困るんですよ。あれも何とか御注意して頂けませんの。」と、聞えよがしの誰憚からぬ調子に、巡査は少し恐れをなしながら、
「貴女が、あまり目立つやうな恰好をしてゐるからいけないんだよ。」
「へえ、わるうございましたわね。でも、あの奥さんだつて、旦那さんだつて、まるで浸畫か何

かに出てゐるほど、目立つてゐますわね。」
久美子のヒステリ氣味な、早くもそれと察した反擊に、巡査は苦笑しながら、
「餘計な悪口をいふもんぢやない。とにかくあまり町内の平和を亂さないやうにやつてゐらふことだね。」といふと、後向きに格子戸を閉めて、靴音あらゝかに出て行つた。
二人の問答を恐ろしいやうに、茶の間で聞いてゐた女中を呼んで、
「あの巡査さん、隣へ行つてから來たんだらう。」と、久美子の眉のあたりが險しかつた。
「はい。さうでございませう。」
「いま〳〵しいわね。町内の風紀にいけないんだつて。きつとあの眼鏡が、何かいつたんだよ。あゝ口惜しい。もう、お隣になんか遠慮するものか。」と、勝氣な眼に、どうやら涙がうるんで、そのまゝ二階へ駈け上ると、忽ちカラリ〳〵と戸をあけて、ビクトロラの蓋を拂ふと、かけたのがジヤズの中で一番かましいピーナツトヴエンダ。綠と紅の羽根布團と黑いガウンも、よく陽のあたる欄干に、これみよがしに乾しならべた。
一階の物音に驚いて、上つて來た女中に、
「ねえ。妾の留守の時は、十時になつても十一時になつても出來るだけさう〳〵しいレコードを

かけて置いてね。」

レコードをかける位の對抗策では、彼女の鬱憤はサラリとはならなかつた。

三面鏡に向つて、お化粧に長い時間を費しながら、宮川が來たら、すぐいひつけて、うさばらしをしようと思つたが、どうせ來るのは晩の八時か九時だらうし、それまで待つてゐるのが、もどかしく、銀座の寶石商店に指環の修繕を頼んで置いたのが出來てゐるはずだし、それを取りに行つたついでにブラ〳〵しながら氣を晴して來ようと思つた。

蔑すまれたといふことが、ジツとして居ても、身體中がムツと暑くなつてしまふほど、癪にさはつた。隣の人達のことと、巡査の言葉とをくり返しくり返し、憤慨してゐると、しまひには宮川のことまでが、腹立たしくなつて來た。

なるべく人目に立たないやうに、こんな所へ自分を圍ひたがる宮川が、いけないのだ。何でも陰氣なことが嫌で、華美に陽氣に暮したがる彼女は、はじめ宮川がこゝを捜した時から、あまり氣にいらなかつた。同じ澁谷でも代官山の方に、赤いスペイン瓦の屋根をつけた文化住宅が、格安な値で、賣物になつてゐた。それを、久美子は宮川に買つてもらひたかつたが、彼は通ふのに遠すぎるのを理由にして、いろ〳〵けちをつけて、家賃もあまり高くないこの家を借りたのだ。

女房よりも愛してゐるとか、口先ではいひながら、財布の口ばかりは、グツと引きしめてゐる。今年もそろ〳〵クリスマス・イーヴのドレスを作らなければならないのに、臨時のお小遣ひをちつともくれない。そんな風だから、いはれなくつてもいゝことをいはれてしまふのだ——。

と、久美子の頭の中には、暗いしるが、グル〳〵めぐつて宮川にまでとばつちりが及んだ。貯金しろと呉れたお金も何かほしいものがあつたら、使つちまはうと腕時計を見ると三時だつた。

「旦那さまの方が早かつたら、夕方から銀座へ指環を取りに行つたといへばわかるから……」と、家を出かけて、本通りへ出て半丁ばかり行くと、學校の歸りらしい黄色いレインコートに制帽を冠つた、隣の息子に出會つた。青年は、尋常な目禮をして、すれちがつて行くのを、

「あの。」と、久美子は呼び止めた。

無言で不審げに、振かへつた青年の、何處となく、まだ子供々々した唇のあたり、神經質らしい眉の下に、二つの眼がさえて明るかつた。

兩親の子に似合はず、身體全體から若々しさと純潔さが溢れ出てゐた。

——氣取屋でもなし、さればといつてはにかみ屋でもないやうだ。制服の襟も帽子も油じみてゐないのは、神經質で綺麗好きなんだらう。

その上、兩親のやうな眼では、自分を見てゐないと、人の顏色を見ることの得意な久美子は、ホンの瞬間に見て取つてしまつた。

「あの、私いつも獨りでございますから、お妹さんと御一緒に、時々遊びにいらしつて下さいませんの？　私、お妹さんとお友達になりたいんですのよ。」

久美子の唇から、取つて置きの言葉が、コケツチツシユな微笑と共に、スラ〳〵と流れ出た。

久美子は、先刻家にゐる頃から隣家の夫婦をいやがらせるために、息子なり娘なりに往來で出會つたら、思ひきりなれ〳〵しくしてやらうと考へてゐたのであつた。

「ありがたう。でも、一寸伺はれませんね。はゝゝゝゝゝ。」

（親達が御存知の通り頑固で……）と、いふ意味を、眼と笑ひとで十分いはせたほど、青年の態度はさばけてゐた。

久美子も、それがハツキリ分つてゐながら、しかし言葉だけは、いかにも、解しかねるといふ調子で、

「まあ、なぜでございませう。是非お遊びにどうぞ。」と、しとやかに頭を下げて見せた。

「はゝゝゝゝ。」と、青年は返事せず、だが久美子に不快を感ぜさせないやうに、飽くまでほが

らかに笑ひながら、一寸目禮して歩き去つた。

青年の歩き去る靴音を、背で聞きながら、見た所よりも、グツと物の分つてゐるあんな風の青年なら、こつちが押しづよく、少しのコケツトリイを示してやれば、どうにでもなるやうな氣がした。

近くでよく見れば、均齊のとれた立派な體格をしてゐるし、今まで久美子の知つてゐる、ダンスホールで知合になつた學生達のやうに、アメリカナイズされてゐる連中の持つ厭味は、ちつともなかつた。スタ〳〵と伸びた桐の若木のやうな純潔さが感じられる。

あれで、何でもよく心得てゐて、案外おとなしく兩親のいひつけに、從ふと見せかけて、かげでは相當なものかも知れない。

とにかく、上手に水を向けたらあゝいふ青年は、自分のためにあらゆる奉仕を惜まないだらう。

あの妹の方は、もつと仕事が簡單だらう。何だか、兩親の重壓のために、おしひしがれながら、どうにかして自分の生活を、伸ばさうと、人なつこい眼で、あたりを物色してゐるといふ、容子である。あの子には、一寸やさしい友情の手をさしのべたら、すぐとりすがつてくるだらう。

宮川にも内緒で、あの若い二人を、自分の掌の土にをどらせて、それこそ町内を驚かせるやう

な事をさせて、あの取りすました教育者夫婦の方が、却つてこゝにゐたゝまれないやうにしてあげるから見ていらつしやい……と、久美子は妄想をたくましうしてゐた。

自分自身、何の生活目的もない、久美子のやうな女性は、こんな事に、ヤケに熱心になるものだつた。

學者の妻

習慣になつてゐる夕暮の犬の運動に、リオといふコリーを先に立てゝ、乳房の大きくふくれてゐる芝犬の母を連れて、家のめぐりの道を一廻りしてくると、美爾子は手先や襟元が冷たくなつてしまつた。

――こんなに寒くなつてしまつては、もうお前達は、あさやに連れて行つて貰ひなさいね。――と畜生に話しかけながら、門のわきの郵便箱の夕刊を取ると、眞白い封筒が冷たさうに箱の底に殘つた。

「龍山美爾子様」と、達者に男らしくシツカリ据つてゐるその萬年筆の手蹟が、忽ち久滋を思ひ

ださせた。

破るのに骨の折れるほど、丈夫な封筒を、立つたまゝマニキユアされた爪の先で、ボリ〳〵破つて見ると、何のこと音樂會のプログラムに青い二枚の招待券だけ。味氣ない氣持でプログラムを展げると、十一月廿五日――明後日催されるハンガリの提琴家、ヨセフ・シゲツテイの演奏會だつた。プログラムの隅の方に、

――當日お目にかゝれることを樂しみに致して居ります。　久滋――、

と、簡明に一行書かれてあつた。

仔馬ほどもあらう、大きな身體を腰のあたりにすりよせて、甘えるコリーを、うるさいやうに、愛撫するやうに、押しやりながら、犬小屋に連れ込んでしまふと、縁側から居間へ上つて、封筒は机の上に、無雜作に放りだし、する〳〵帶を解いて、

「あさ――　お風呂の加減を見て頂戴！　直ぐはいるから。」と、甲高に呶鳴つた。

女中の返事を待つて、裸になると白いタイルの敷いてある流しに降りながら、脱いだ着物の始末をしてゐるあさに、

「おゝ寒む、こんなに寒くなつては厭だア。」と、駄々兒のやうに肩を揺つて、

「明日から、犬の運動をさせるお役目はあんたにゆづるわよ。」と、いつた。

あさは、外の空氣を吸つて來た夫人がにはかに、いき〳〵と機嫌のいゝのをうれしく思つた。

冷えたすねに、ヒリ〳〵する湯を、チツと我慢しながら、眞白い身體を、やがてトツブリと湯に浸すと、美禰子はたまらなくいゝ氣持さうに、かるく眼をつむると、久滋のかいた、たつた一行の文句を頭の中でくり返した。

——當日、お目にかゝれるのを樂しみに致してをります。

萬年筆を握つてゐる、その人の手が思ひだされた。ゴツ〳〵骨つぽいが、細長い上品な指である。その手もよかつた。

長い年月がたちながら、お互に好きであつた日の事が、ハツキリ思ひだされる。お互の心の底に、むかしの情熱のおきがいくらか殘つて居るだけに、會ふことが重なるたびに、そのために、苦しまなければならないのではあるまいか……。まして私は、瀧山があゝして茫漠としたとらへ所のない人だけに……。

わづかばかりの、白粉氣を洗ひ落してしまふと、みどり兒のやうな柔肌は、一層生々と艶々しく、素肌の美しい女だつた。露をふいて出ると、あさがもう、美禰子が好みで作つた、紫縮緬

の無地の居間着に、臙脂の幅せまく仕立てた帶をそろへてゐた。

三つの花のレツテルの張られた白い陶器の壺から、よい香りのするナイト・クリームを、ほんの少し指先にとつて、顏から咽へ、後は鷺鳥のパフで、輕く白粉をたゝきこみ、唇には荒れを止める程度にフランス製の棒紅をつけた。

湯から上つて、二十分も經つた頃、瀧山がひどく疲れた寒さうな顏をして歸つて來た。湯上りの上氣が薄らいで、皮膚は引きしまつて光澤を帶び、はだの色の白さは、紫の着物に、際立ち冴えて美しかつたが、美禰子の心づくしの化粧や苦心の居間着の配色などには鈍く、盲といつてよい瀧山は、花の美しさや香りなどよりも坐るなり、

「あゝ、お腹がすいた。」と、まるで子供のやうだつた。

「お風呂を先になすつたら、——寒かつたから、私先に頂いちやつたのですけれど、いゝお湯ですわ。」

「面倒だよ。くたぶれてゐて……」と、兩手で顏を、ブルンと擦でた。美禰子も、二度とはすゝめなかつた。お湯ぎらひで、傍から何どいはうとも、面倒だとなつたら、四日も五日もお湯に入らないで、平氣の人だつた……。

あさに命じて、晩食の膳を運ばせた。例によつて默々と箸をうごかす良人に、美禰子は何かと話しかけた。

「ねえ。二十五日に音樂會へ行つてもいゝ……？」

「うん。いゝ。」

「貴君だつて、あんまり研究室ばかりにいらつしやると、お身體のためにもよくありませんわ。」

「うん。」

「たまには、一しよにお出かけになりませんか。音樂會とか、郊外への散歩とか……」

瀧山は、好物の淺漬の厚く切つたのを、パリ〳〵と音を立てゝかみ碎きながら、美禰子の言葉にはお構ひなしに、

「今月いくらか貯金した？」

「はい！」

「新しい分はいくらになつた？」

「もう大分になりますわ、四千圓以上……」

「僕がヒョッとした間違ひで死ぬやうな事があつてもまづ大丈夫だね。」

「なぜ、急にそんなことおつしやるの？」

「今日僕が解剖した死體の男は、死ぬ前に自分の死體を賣りたいといつたんだよ。」

「……」美禰子の美しい眉がくもつた。

「ルンペンだが、女房らしい女がゐるんだね。死體をいくらかにでも賣つて、その女にやつてくれといふ遺言だつたらしい。」

「まあ！　いやだわ。」美禰子の、夕暮から、何がなし明るんでゐた氣持は、忽ち壞れてしまつた。

「だが、それほどまで、妻を愛してゐる男は珍しいぢやないか。」瀧山は、ひどく感動してゐるらしかつた。

「あら、でも女なんて、そんな事よりも、御主人が生きてゐる內に、散歩へつれて行つてくれるとか、半襟の一つでも買つてもらふ方が、うれしいかも知れないわ。」それは、美禰子の良人に對する抗議でもあつた。

瀧山は、美禰子を心で愛してゐる。しかし心で愛してくれると同時に、身體で手で口で愛してくれないと、女性は滿足しないのである。それから、もう一つの不滿は、彼の愛は、彼の妻になる女なら、それが美禰子でなくて、他の何子であつても同じだつただらうと思はれることだつた。

つまり、美禰子の個性を愛し、その性格や趣味を愛してゐてくれるのではなく、美禰子が彼の妻であるために――彼の知つてゐる唯一無二の女性であるために、愛してゐてくれると思はれることだつた。

彼は、凡そ藝術的なことは、何にも分らなかつたが、美禰子が欲すれば、本も繪も買つてくれるし、高價なエレクトロラも買つてくれるし、――だが、その繪が壁にかけられ、よい音樂が部屋の空氣をうごかしてゐても、彼は無關心だつた。

彼は、たゞ暖かい芝生に、大きなコリーと戯れてゐるやさしい女性が、自分の生きてゐる間はもちろん、死んだ後迄も彼の考へる意味で幸福であればよかつたのである。

だから、何をさて置いても、月々貯金はしてくれるし、行きたいといふ所へはやつてくれた。

それで、美禰子を樂しくしたつもりで、自分は學理の研究に沒頭して、彼自身至極滿足だつた。

美禰子は、良人のさうした愛情に、壓迫を感じはしたが、滿足してはゐなかつた。

「貴君は、私をどう思つていらつしやるの？」

「どう？……つて、やさしい好い人だと思つてゐる。」

眞面目に判を押したやうに、瀧山の答へはいつもきまつてゐた。

さうした絶對の信頼は、いつも美禰子をじり〳〵させた。そのために、彼女は、手も足も縛られてゐるやうな氣がするからだつた。久滋といふものが現れたについて、美禰子は解り切つてゐる良人の心持に、今宵また消息子を入れて見た。

「貴君が死ぬよりも、私が、ぽつかり死んだら、どうなるの？」

「輕く考へても、一年位はボーッとして、研究なんか出來ないやうな氣がするね。」

「ぢやあね。」と、美禰子は甘えて、すり寄りながら、

「萬一、私が外の男を愛したりなんかしたら……」

「さうだね。殺してしまふかも知れないよ。」

その道の達者が、冗談半分にいふのと違つて、眞面目なので、何か不氣味だつた。

「でも、貴君に分らないやうにしたら。」

「貴女は、そんな悪い女ぢやないもの。」

どうも、感情だけは年を取つてゐないといふ感じだつた。感情的には、ずーつと年下の青年のお守をしてゐるやうに、美禰子は思つた。

――明後日の音樂會には行かうか、よさうか――。

美爾子は、いぢらしいやうな氣持で、良人の頭を抱へて、やさしいお母様のやうに、接吻をした。良人の唇は、彼が愛用のチエリイの匂ひがした。

たつた一枚のプログラム、わづか一行の文字で、美爾子は次の日も、靜心なき日を過してしまつた。まだ過の崖の上にあるといふやうな怖れではなかつたが、今の自分の心持からいつて、久滋と會ふことが、何故かしら不安であつた。

研究室中心の良人。感激のない愛情と退屈な幸福。快樂といふものは、どちらへ向いたら得られるのだらうか。五六年退屈な靜穩がつゞいた。子供も生れさうにはない。未來にも、胸をはずませ、息をつまらせるやうなうれしい瞬間があるだらうか。何か、人生の流れからは、取り殘されてゐるやうな感じである。これが、ほんたうの生活だらうか。

二枚の招待券！　房子夫人を誘はうとして止してしまひ、姪の惠美子を連れださうとして止めた。結局獨り行くつもりで、

「ドレスにするから、靴をきれいにして置いてね。」と、女中にいひつけてからも、まだ行くのを止さうか、連をこさへようかと考へ迷つてゐた。

その落着かない氣持を拂ひのけるため、エレクトロラの蓋をのけ、一番低い音にして、リムス

キイ・コルサコフのスペイン狂想曲をかけて見たが、その心臟をたゝくやうな小きざみな太鼓の音が、却つて久滋の面影を引きずつてくる。

菫色のサツパリしたデザインのアフタヌーンを着て鏡に向ふと、久滋に會つたら、小娘のやうにオド〳〵しさうな自分の瞳や唇を、いとほしむやうに、冷たい指先で、いく度も押へつけた。

久滋は——

彼は日本橋の有名な商家に育つた末つ子で、小さい時からなみ〳〵ならぬ美貌で、兩親からも他人からもいたく愛された。

だから、自尊心が強くて、幾分冷笑的で、一本氣で、しかし愛嬌があつた。

こんな風な男であつたから、人にも好かれたし、女にも惚れられた。

家の商賣は兄が繼ぎ、彼にも相當の資産の分配があるわけだが、溢るゝばかりの才幹と、妙な意地張から、裸一貫でやれるだけやるといふ建前で、關西へ行つてから數年。その間に劇場關係者としての腕と、多少の文名とをかち得てゐた。劇場の文藝部長としての彼の位置は、彼の性能にも趣味にも適してゐて、しかも獨り者には、十分な報酬をもらつてゐた。だから、誰の掣肘も受けぬ氣まゝなアパート生活に、風雲の志を抱いた青年の客氣は、やゝ衰へて、どうやらブ

チブルジョアの安定した生活に尻をすゑかけてゐた。

音樂會

文學好きであつた久滋が、昔やつてゐた同人雜誌で知合になつた愛らしい文學少女が、この頃ふと傳手を求めて、診察を受けに行つた醫學博士の妻になつてゐる。

六七年前の純な戀愛關係が、しきりに思ひだされる。手を握り合ふことはおろか、胸がわくわくして、口も碌にきかれなかつた二人だつた。その後、いろ／＼な女性と交渉して、女を獲ることの容易さになれた彼も、彼女だけには何か特別の追憶が殘されてゐた。

思ひがけなく再會して、追憶の色は染め返され、憂愁の影を帶びた美しい人妻に、何か近づきがたく、そのために心は却つて深くひかれ、二度の會合は三度の會合を願ひ、彼から今日の音樂會の切符を二枚――ひとりで來てもらひたいと心で願ひながらも、體裁をつくろつて、二枚送り屆けたものである。

×

音樂會は、どんな集りよりもインテリな高級婦人達と、外人客が多い。

舞臺は粗末で、音樂會の外は、そこでよくボキシングの仕合があり、見物席も雜駁としてゐて何かうす寒く、そこでしかつめらしい顏をして、音樂を聽かねばならぬことは、あまり愉快な事ではない。

久滋は、たゞさり氣なく切符を送つたと思はれたかつたので、自分の席はわざと隔てゝ取つてあつた。こんな小才覺をする彼ではないのだが、美禰子だけには、初戀當時のやうな遠慮が殘つてゐるのだつた。だからに別に美禰子の姿を求めようとはせずに、開幕すると大いそぎで席に着き、序の輕いハンガリイ・フオークトンを聽き、わづかな暮間が來たとき、始めて美禰子の方へ目禮を送つた。

そして、美禰子が一人で來て居ることに、うれしさを感じ、そして彼女のアストラカンの外套から、はみ出てゐるすみれ色の胸や、頭にぴつたりついた小さい帽子の下で、彼女の顏が、處女めいた表情で、すが／＼しく微笑んだのをホンの一瞬間の内に、あざやかに腕裏に刻みこんでしまつたのである。

次ぎの演奏がすんで、十五分の長い休憩に、廊下に出て、お互に改まつた挨拶をすると、双方

からさりげなく、
「お一人ですか。」と、いふやうな事を訊ね合つてから、先夜の火事の夜の事を話して笑ひあつた。
そして、壁にうがたれたやうになつてゐるソファに並んでこしかけた。
「何か最近面白いお話でもありますか。」
「いゝえ何にも。相かはらず、犬と遊んだり、小説を讀んだりしてますの。」
「面白い小説がありますか。」
「ないんですの。ドストエフスキイのものなんか讀み返してゐると、やり切れなくなつて——殊に『永遠の良人』なんか讀んだら、五日も六日も沈んでしまつて……」
「ドストエフスキイのものを讀み返すなんて、そりや、良くない現象ですね。よつぽど退屈なんですね。」
「おほゝゝゝ。その通りですわ。」
そして、また音樂が始まり、席に着くと、良くない現象は、久滋の上にも起りつゝあつた。
久滋は、音樂を聽いてゐるのが、妙にいら立たしくなつて來た。彼は、美禰子と二三度會つてゐるうちに、美禰子に對する自分の氣持が、可なり長い年月を經た今も、あまり變つてゐないの

に氣がついた。
二人ぎりでゐると、彼女のかぼそい腕が、不意に自分の首に卷きついて來て、あの聰明な大きい双眸が、接吻のために閉ざされる。むかし惱まされたさうした幻想が、今もまた彼の腦裏に浮んで來て、彼は目のくらむやうな氣持がするのだつた。
最近數年の間、いろ〳〵な女性に接して來たが、坐り直して口說くやうな全身を投げ出した戀愛は、男子たるものゝたはけた沙汰と、近代青年らしい戀愛觀をいつの間にか抱いてゐる彼が、今更美禰子に對してだけ、勃々たる情熱を感ずるのは、自分でも不思議であつた。
そんな事を考へて、我を忘れ、音樂の音さへも、ともすれば耳に入らない自分を見出すと、何物かに嘲笑されてゐるやうな腹立たしさを覺えるのだつた。
最後の演奏が終つても、渦卷起るアンコールの聲で、シゲツテイは、ロンドか何かの短い曲を、二つばかり彈いた。それに對して、聽衆は熱狂的な拍手を送りながら、立ち去りかねてゐた。
やがて、我に返つたやうに、一度にドツと出てくる人の流れに、肩や背をぶつゝけながら、久滋は階段の所で、示し合せたともなく、美禰子と一緒になつた。お互に口はきかなかつたが、そこからは連れ立つて下へ降りた。

二階から降りて來て、一階の出口と一緒になるところで、美禰子はつい目の先に、澁谷の甥との姿を見つけてハツとなつた。

だが、美禰子が氣がつくよりもさきに、向うの二人は、叔母を見つけて、二人の方で却つて驚いてゐるらしかつた。

美禰子は、邪しい所は少しもないが、しかし若い青年と連れ立つてゐたなど、やかましやの姉に知られたくないやうな氣がして、困つたなあと思つた瞬間、惠美子は、

「まあ！　叔母さん！」と、いひながら人混みの中もかまはず、近寄つて來て、肩につかまつた。

隆一は、角帽の下で「やあ！」といふやうな笑ひをよこしたなり、出口の方へ歩きつゞけてゐる。

ふと見ると、隆一と並んで、青狐のショールを首にまいた洋裝の女が、つれだつてゐる。おやと思つてゐると、

「叔母さん。今夜のこと內緒よ。お母さまにいつたら駄目よ。」と、惠美子が耳もとでいつた。何だ、此方のいはうとすることを、向うでいふのかと安心して、

「なぜ？」と、訊き返してやつた。

「だつて、ほらお兄さんと並んで歩いてゐる方ね、あの方とお交際したら、いけないとお母さんにいはれてゐるのよ。」

美禰子は、惠美子にすがられたまゝ出口の方へ押されながら、

「あの方、誰方？」

「裏の家の方よ。お妾さんらしいのよ。」と、惠美子は、何のこだはりもないやうにいつてから、小聲で、

「叔母さまも、お一人――ぢやないのね。」といつてすぐ美禰子の後に寄り添つてゐた久滋をふり返つて、その眼にぶつゝかつたらしく、頰を一寸赤めながら、

「誰方？　イレ・シヤルマンね。」と、無邪氣と生意氣とを、ゴツチヤにしたやうな、小さいつぶやきを漏らした。

女學生の仲間で、流行してゐるらしい言葉に、奇妙なアクセントをつけて、感歎したのが、なかしくて、つい微笑まされながら、すかさず、

「家へいらつしやる方よ。貴女こそお母さんに、おしやべりを氣をつけてね。」と、いふと、

「えゝ。分つてるわ。」と、心得顏に背いて、もう一度ふり返つて、久滋を見上げ、久滋が一寸目

禮すると、今度は前よりもつと赤くなりながら、
「サヨナラ。その内遊びに行くわ。」と、いひ捨てると、人混をすりぬけて、もう出口を出てしまつたらしい兄を求めて、駈け去つて行つた。
外へ出て、電車通へ出たとき、久滋は帽子を輕く取つて、突然、
「こゝでお別れしませうか。」と、氣むづかしさうな聲でいつた。美禰子は、夜目にも分るほど動搖して、彼の表情を讀まうと努めながら、
「そんなにお急ぎですの。」と、しづかに訊いた。
久滋は、「こんな風にいきなり別れようとして、美禰子を試して見ようといふやうな——底意があつたわけではない。全く美禰子と長くゐることは、何か不安な恐ろしい事のやうに感ぜられて、いら〳〵してくるからだつた。
「いゝや、急ぎの事なんかありやしませんが。」と、苦笑を浮べた。
「まだ、九時を少し過ぎたばかりですもの、——銀座でお茶位——いかゞですの。」
「結構ですけれど、——また火事でお騒ぎになるんぢやありませんか。」
美禰子は、輕く肩をすくめて、

「いやな方、まだあんな事を氣にしていらつしやるの。でも今日は、ちやんと宅の許可を得てゐますし、第一本郷の火事なんか、銀座に居ちや分らないでせう。」と、安心したやうに笑ひながら、もう久滋が一緒に、銀座へ出ることを承諾したものとして、内幸町のビルディング街の方へ電車通を横ぎつて歩き出した。
空には、立待ち頃の月がさえてゐた、二人の影は、地にあざやかであつた。音樂を聽いた後の故か、美禰子はどちらかといへば、浮々してゐた。
「貴君は、お變りになつたわ。」久滋の顏を、なゝめに見あげるやうにして云つた。
「前よりは、人が惡くおなりになつたわ。」
「惡く——といふよりも、僕は自分でも實際的の人間になつたと思つてゐますよ。」
「貴方が、この五六年の間、どうしてゐらしつたか、關西でどんな風にしてゐらしつたか、聽かして頂きたいわ。」
「そんな話が、なぜ聽きたいんです。つまらんですよ。」
久滋は、全く無愛想すぎるほどの調子でさういつた。
美禰子は、微笑みながら、相手の調子を氣に止めず、彼の態度や表情から、その心を探つてゐ

るやうだつた。

久滋は、ます〳〵息苦しい氣持だつた。

自分との戀が、たうてい遂げられないと見て取ると、あつさり思ひ切つて、アツといふ間に結婚し去つた優美ではあるが聰明な女性が、まだ自分に對して好意だけは寄せてゐる。彼は出來るなら、その好意にそつぽを向けたかつた——と思ひながら、結局それに引きずられて行く、それが何となく腹立たしい。二度會ひ、三度會つた今宵は、それがはげしい。

銀座の大通へ出ようとする一つ手前の横町の角で、

「どこでお茶を飲みませう」か。」と、久滋が訊ねた。

「それは、貴君に決めて頂くわ。」

久滋は美禰子と——とにかく人妻である以上、こんな風に歩いてゐるところを、人に見られたくなかつたので、銀座の通へは出ない方が、いゝと思つたので、その横町を左へ折れて、ジヤーマン・ベイカリの方へ歩いた。

そこなら、表から内の容子を檢べられるし、午後三時頃は、新聞社の記者など、顔見知りの連中も、澤山來てゐるが、いまの時間には、この邊にウロ〳〵してゐる知合などは、居ないはずだ

つた。

知つた顔の居ないのと、割に空いてゐるのに安心して、扉を押してはいつた。

室内は、ストーヴの暖かさと、煙草の煙とで、ムツとするほどだつた。

顔も近々と、さし向ひに席に着くと、久滋は、一寸拗なやうにだまつてゐたが、美禰子は頬を上氣させて、嬉々としてゐた。

「私、うれしいんですの。」と、いつた。久滋は、一寸ギクリとしながら、

「何が。」と、訊き返した。

「私、うれしいんですの。貴方と、お喋りが出來るのが……」と、驚くほど明らさまに、彼女はくり返した。

「うれしい……」

久滋は、がらんとした調子で、ヂツと美禰子を見つめたが、美禰子はうれしさうな微笑をますます大きくして、

「えゝ、家にゐると、お喋りが出來ないんですもの……瀧山は無口で、人間は解剖して見れば、内臓の外は、何にもないつていふやうな顔をしてゐるんですもの。だから、犬に物をいつたり大

袈裟にいへば、壁にでも話しかけたりしたくなる位ですの。」
「瀧山氏のやうで、好いんぢやありませんか。人間に何を喋ることがありませう。」
「ひどいことを、おつしやるわ。」と、美禰子は、瞳を大きく見ひらきながら微笑した。
「でも、お喋りつて、人間にとつて必要なことですわ。夜遅くまで、主人の歸宅を待つてゐるときなど、ほんたうに話し相手がほしいと思ひますの。仕方なく、音樂を聽くんですの。音樂は物事を忘れさせてくれますわ。でも、少し長く聽いてゐると飽きますわ。でも、一人でゐるときは、まだいゝんですの。主人と顏を見合はしてゐても、私の話したいことは、何にも話せないんですもの。」
「芥川龍之介の書簡集か何かのうちに、駄辯慾不充足とかいふことがありましたよ。でも、瀧山さんは、どうして、貴方の話相手になつてくれないんですか。」
「えゝ。あの人は、神樣見たいに超然としてゐるのよ。神樣とお喋りは出來ないでせう。」

「ありますわ。でも、その方は、御主人に對する愚痴や非難を、私に聽かせにいらつしやるのよ。私の話をきいては下さらないんですの。また、私のお喋りしたいことは、その方に話しても始まらないことが多いんですわ。」
「でも僕だつて、退屈な奥さまの話相手なんぞに、向いてゐるかどうですか。」
口でこそ皮肉はいへ、久滋は美禰子が、現在の夫婦生活から、倦怠を感じて、心や感情が飢ゑきつてゐることを知るといぢらしくなつて來た。
「だから、時々會つて下さいません？　一週間に一度位、主人がそんな風ですから、外出は自由ですし、家へ遊びにいらつしつて下すつても、かまひませんわ。そして、私に珍しい空氣を吸はせて頂きたいわ。」
そんな事をいひながらも、これは大變な事になりはしないかと、美禰子は少し後悔してゐた。
しかし、美禰子は自分の心をコントロールする自信があつたから、たとへ一週間に一度位久滋と會つたところが、良人を裏切るやうな事には、絶對にならないと信じてゐた。
久滋も、美禰子が昔自分を、あんなにアツサリとあきらめた事によつて、どんなに賢い女性であるかを知つてゐたので、美禰子のさうした提議を言葉以上に深く取つて、後で馬鹿を見たりす

るのはつまらないと警戒しながら、

「では、時々お伺ひすることに致しませうか。」と、平靜にいつた。

「えゝ。うれしいわ。この次ぎの土曜日はいかゞ？」

「はア……」

「氣のないお返事ね。いゝわ。きつと、いらつしやるものと思つてお待ちしてゐるわ。」

もう、十時を過ぎてゐた。

久滋は、冗談のやうに、次ぎの土曜日を約束してから、今宵は美禰子を追ひ立てるやうに、立ち上つてゐた。

出た所の電車通で、美禰子を自動車に乘せ、久滋は虎の門のアパートまで歩くことにした。

美禰子をせき立てゝ早く別れたのは、一人になつて、美禰子に對して、どんな風な態度に出るべきかを、しつかり考へようと思つたからだつた。

わざと、日比谷公園の中の道を歩いて歸つたが、彼女の美しい眸ばかりが頭の中にチラ〳〵して、彼の意識は混沌として考へやうがなくなつてゐた。

久美子と兄妹

音樂會へ來てゐた兄弟と久美子達も、やはりブラ〳〵銀座の方へ出て來たが、このトリオは眞直ぐ銀座通りへ出てしまつたので、久滋達とは、再び出會はなかつたのである。

久美子は、映畫女優に見まがふほどの凝つたなりをしてゐた。彼女は、隆一よりも惠美子に多く話しかけてゐた。

久美子と惠美子の會話は、散漫としてゐて、どこにも取り止めたものはなく、つまらない事を珍しがつたり、何でもない事に感心して見たり、まるで掛合漫才のやうな話し方をして、ゲラゲラと笑つてゐた。しかし、そんな中でも、どうかするとまるで謎のやうな眼ざしを、久美子は隆一の方に向けてゐた。

久美子はすこぶる氣まぐれであつた。しかしそれは、彼女が氣まぐれだといふよりも、むしろ彼女は、ある神祕な力（然しすこぶる陽氣な）……の支配に身を委せてゐて、その力のために自由自在にあやつられ、彼女のさゝやかな頭腦は、その力の氣まぐれを制し切れないといふ感じだ。

久美子は、今までもよく、

「私はさびしいんですの。昔から、一人ぼっちでせう。現在だって、こんな風でせう。私と仲よくして下さいね。」と、いふやうな事を、一二度會った男に平氣でいふ。そして、いった傍から、忽ちケロリと忘れてゐる。彼女の行爲は、凡て矛盾撞着の連續である。

しかし、彼女が隆一に會った瞬間の感じはとてもよかった。だから、どうしても彼と親密になりたくなった。さうなるともう、教育者夫婦に對する面當のことなど、ケロリと忘れてゐる。忘れてゐなくつても、そんな事は二の次ぎである。久美子は、昨日折を見て、音樂會の切符を二枚惠美子にそっと渡したのである。

惠美子は、交際をさし止められた女性から贈られた切符で、音樂會に行くことが、やかましやの母に對するすばらしい反逆のやうな氣がして、兄にはそれと打ち明けないで、誘ったのである。

隆一は、會場で裏の家の女がすぐ後の席にゐるのを發見して、「はゝん！」と思ったが、彼は學校で、動物學をやってゐるので、妹のすることなどには何にも干渉しない。

惠美子と久美子とは、專ら先刻會った惠美子の叔母について話してゐた。

「本郷の叔母さまって、隨分きれいな方ね。貴方のお母さまの御姉妹だなんて思へないわ。」久美

子がいふと、惠美子もうれしがって笑った。

「私のお母さんたら、あんまりお小言許りいってゐるから、だん〳〵あんな顏になって了ふのよ。」

「あたし、先刻の方、どこかでお見かけしたやうな氣がするんだけど、思ひだせないの。」と久美子が首をかしげた。彼女は、宮川家にゐた時、宮川夫人を二三度訪問した事のある美禰子を思ひだせなかったのである。

「あのお連の方、旦那さまなの？」しばらくして久美子が訊いた。

「旦那さまは、あんな綺麗な人ぢやないの。あの人きっと叔父さまの後輩か、でなかったら、患者かも知れないわ。」

「患者？　ぢや、叔父様はお醫者様？」

「えゝさうなの。」

「いくら、お醫者様の奥さんだって、患者と散歩するなんてをかしいわ。あの素敵な叔母さまの騎士よ。」

「さう――かしら。」

惠美子が、溜息まじりに呟いた。そして、二人は意味ありげに、クス〳〵笑ひ合った。

隆一は、二人の會話にすつかり毒氣を拔かれてゐる形で、仲間にこそ入らなかつたが、妹をたしなめようともせず、先刻からニヤ〳〵笑つてゐた。

彼は、珍しい蝶をでも採集したやうに、久美子といふ存在に興味を感じてゐた。お妾といへば、どんな女でも控へ目がちな、暗いかげを身につけてゐるものだが、彼女はほがらかで、他のいかなる女性よりも、幸福さうである。無意味な……母などからいはすれば、輕蔑すべき生活を送りながら、潑剌たる魅力を持つてゐる。隆一は、その不思議な謎に、心をひかれかけてゐた。

彼等も銀座で、お茶を飲んだ。

久美子は、なほも惠美子を相手に、止度もない空虛なお喋りを續けてゐるが――曲者はその眼ざしである。二重の切れ深く、長く、眸の色はすんでゐて、コケチツシユになり、陽氣になり、そして忽ち疲れたやうになり、物思はしげになる。よくかはる眼ざしだつた。そして、それをまともに、時々隆一の方へ投げて來る。

「貴君は、何も話して下さらないのね。何かおつしやいよ。」

「僕ですか、何もいふ事なんかないですよ。貴女のお喋りを聞いてゐるだけで、隨分面白いんだから……？」

「よつぽど妙な女だと思つていらつしやるんでせうね。ひどいわ。」

「さうですな、妙つていふのかな。僕には貴女の言動の總てが、不思議ですよ。解らないんですよ。謎ですよ。だから、貴女のいふことを聞いてゐると退屈しないんです。」

隆一は、生來非常に、率直に物をいふ青年だつた。そこが、またひどく、久美子の好みに投じてゐた。

「謎ですつて……有難いことだわ。」と、意味のないことをいつて、久美子は笑つた。

二人の眼は、空間でぶつゝかりすぐお互に避けた。

久美子にも、隆一の總てが新鮮に感じられた。あゝいふ夫婦の間から生れてゐる以上、生眞面目一方の青年だから、頭からなめてやらうと思つてゐたのだが、少々當がはづれ、ダンス場で知合になつた學生などとは、交際工合が全く違つてゐて、その大膽な一言三言に、かへつて彼女の方が打ちこまれた形であつた。隆一は、久美子の事を、

「貴女は、出鱈目で餘計な事ばかりして、暮してゐるのですね。」とか、「貴女は、人生の愉樂ばかりを願つてゐて、それ以外には、何にもないんでせう。」とか、ズバ〳〵とやつゝけたが久美子はそれが、ちつとも癪に觸らないで、却つてこの青年に興味を持つて行つた。そして、

「貴君は、學校で何を勉强なさるの。」と、訊くと、隆一は眞面目に、
「僕は人生で、信用出來るのは自然科學だけなんです。だから、それをやつてゐます……」と、ハツキリ答へた。久美子は理由もなしに、その答に感心してしまつた。
三人連立つて、同じ圓タクで歸るのは、さすがにためらはれたので、久美子は數寄屋橋まで歩いて、そこで別れようとすると、
「一緒にお歸りになつても、構ひませんよ。僕達が、少し手前で降りますから……」と、隆一は却つて別れようとする久美子を引き止めた。
久美子は隆一の物の分り工合が、至くうれしくなつて、車に乘つてから暫くすると、
「貴君も、映畫を御覽にならないの。」と、訊ねた。
「貴君もは、ひどいですな。僕が、そんな老人に見えますか。」
「いゝえ、いゝえ。……でも、さうでしたら、今度御一緒に、お伴させて下さいませんか。」久美子は、あわてゝいつた。
「そんな機會があれば、いつでも……」隆一は、親しい友達を見るやうな眼で、久美子を見やりながら答へた。

「映畫なんか、御覽になつて、お家でよろしいんですの。」と、つい訊かずにゐられなかつた。
「いゝや、兩親は喜ばないでせう。しかし……」と、隆一は半笑ひながら、「僕は、規則に縛られるのは大嫌ひです。だが、自分で規則正しい生活をするのは好きなのです。だから、兩親にかくれてしてゐる事でも、ちやんと規則正しくやつてゐますから、兩親には絶對に分りません。」
「ぢや、お酒なんかも規則正しく召し上るの。」と、久美子が訊いたが、隆一は笑つて答へなかつた。
「お兄さんは、私よりも、チヤツカリしてゐるのよ。つまり、ずるいのよ。だから、お母さまはとても信用してゐるの。」と、惠美子が横からいつた。
「さうを。」と、久美子は、ほと〳〵感に堪へぬといふやうな表情をした。
交番の二丁ばかり前で、兄妹は降りた。久美子だけ、家の近くまで、タクシーを乘りつけた。
久美子は、初めて口をきいた青年のために、すつかりリードされたやうな氣がした。老人夫婦に、復讐する氣持などはどつかに消しとんでしまつて、あの青年と仲よくなつたら、どんなに愉しいだらうと考へてゐた。

侵入者

一日一日、網をたぐるやうに、心待ちにしてゐた土曜日が、來てしまつた。

劇場の方も、中日に近く、ほとんど仕事もなかつたので、一時頃に、一寸顔出だけして、閉場るまでに、歸つて來ればいゝと思つたので、二時頃から本郷の瀧山邸を訪問した。

銀座へ一寸寄つて、ケーキを買つて行つた。

彼が、耳門を開けると、臆病なコリーが、走りだして來て、殺されさうな聲で吠え立てた。犬嫌ひな彼が、いさゝか辟易して立ちすくんで居ると、

「リオや、リオー　リオ！」と、甲高く叱りながら植込から飛びだして來たのは、思ひがけなく音樂會の夜に、チラと見た美しい令嬢だつた。一見して學校の歸りに、立ち寄つたらしい白粉つ氣のない生々とした顔で、はにかんだやうな、打ち解けたやうな、何ともいへない可愛い風情の微笑を浮べて、あどけなく目禮をすると、右の手で犬の首輪をしつかりとらへながら、

「吠えるばかりで、何もしませんのよ。」と、いひながら、左の手で扉を開けて、

「どうぞ！」と、いつた。

そして久滋が門に入ると、犬を引きずるやうにして、庭の方へ廻つた。

「お客さまよ。」と、そこで大きい聲で、叫んでゐるのが、久滋に聞えた。

女學生時代の美禰子などと比べると、ずつと朗かで、センチメンタルな容子が、ちつともない。日本の男性は進歩しないが、女性は、十年を週期として、絶えず進歩してゐるなどと、玄關に立ちながら考へてゐると、女中が出て來て、客間へ通された。一二度來たことのある應接間とは違つて、こゝは美禰子の趣味通りに、飾られてあつた。

壁は、淡いグリンの紙で貼られ、カーテンも椅子も、女性らしい優しい選擇で統一されてゐた。アツブライトではあるが、ピアノがあり、その上の繪は、パステルでかいた女の肖像畫であつた。

主人の不在に、夫人を訪問することが、可なり彼の心をとがめてゐた。今日の訪問についても、幾度か考へ直した。しかし、久滋としては、人妻である美禰子に、危險な野心は、ちつとも感じてゐなかつたし、また自分を信じてゐる以上に、相手を信頼してゐた。たゞ、お互に、青春時代の想ひ出をたのしむための會合である。それを、現實に引き戻して苦しむほど、俺も馬鹿でない。第一相手の美禰子が馬鹿でないと久滋は思つてゐた。

たゞなつかしい共通の思ひ出を持つ友達同士として、むかし戀人時代の初期に、盛んに試みたやうな文藝談や音樂談の話相手になればいゝのだらう。元來物のよく分る女性だつたから、今だつてさう見當違ひな物いひはしないだらうと久滋は思つてゐた。しかし、さう思つてゐるものゝ、顧みて多少の不安がないでもない。これも一つの火遊びではないだらうか、相手も新しい生活の刺戟を求めてゐるのだらうし、自分だつて――と、久滋は思ひ直して見た。

女中が、紅茶を運んで來たぎりで、美爾子は、なか〳〵現れて來なかつた。

（何をしてゐて、おれを待たすのだらうか。外では、昔と變つてゐなくつても、家庭では主婦らしくすましこむのだらうか）と、考へてゐたとき、しのびやかに扉が開いて、先刻の令嬢が入つて來た。

「これお讀みになつて……」と、白い紙片をさしだした。

こんなに早く來て戴けるなんて、思はなかつたものですから、今しがたお風呂に入つてをりますの。おしやれをしてゐます。ほんの十分ほど、お待ち下さいませな。

これは、姪です。惠美子といふヤンチヤ。ピアノでも彈かせて下さい。割合上手です。

久しぶりに見るその人らしい可愛い手蹟と稚氣に、ほゝゑみながら見あげると、相手は顏を赤

くして首をさげ、直ぐ彼と向ひ合ひの席に、チヨコナンと腰をかけた。

「學校のお歸りなんですか。」と、訊くと、

「えゝ。」と、存外、ハツキリ返事をしながら、また顏を赤くした。惠美子は、のべつ顏を赤くして、興奮したやうな息づかひをしてゐた。

その聲も、生毛の生えた桃色の頰も、紅い小さな唇も、全體がいかにも新鮮だつた。

チツと見てゐると、この年頃の娘の常として、愛の豫感に似たやうな、ある惱ましい漠とした、感觸が、その大きな双眸に、しのび上り、忽ちまた消えるのだつた。

「叔母樣が、お相手をしろつて、困るなあ！」と、男の子のやうな物いひを、口の中で小さく呟くのを、

「叔母樣が、こゝに貴女が、ピアノがお上手だと書いてありますよ。聽かして下さいませんか。」

といふと、

侵入者

「まあ、意地惡。そんなこと書いてあるの、ひどいわ。」と、ほんとに困つたやうに、兩手をもんで、しかし直ぐ續けて、素直に小聲で、

「何も彈けないのよ。……何にしませう。」と、訊ねた。

「何でも、貴女のお得意なものを。」
「ぢや、モツアルトの私のお得意の二樂章だけをね。」
それは聽いてゐると、身體を搖つて、調子を取りたくなるやうな、快活な、魅力に富んだメロディの繰返しで、最初はアレグロ、中半はアンダンテの二樂章だつた。
惠美子は、少し上り氣味に、大いそぎで彈いてしまふと、助かつたと云ふ顏つきで、
「もう澤山ね。」と、無邪氣にいつて立ち上つた。
久滋は、可なり彼女の彈き方に感服した。そして、器量もわるくないと思つた。
「失禮しました。」
間もなく、廊下を小走に急いで、陽氣に入つて來た美爾子は、お化粧をしてゐたといふのに、よほど氣がせいてゐたと見え、髪は耳の後で梳しつけただけで、紅や白粉も、いたづらのやうに浮び上つてゐた。
「ピアノお彈かせになつたのね。どう——相當なものでせう。」といひながらも、顏はそんな事は、(どうでもいゝ。あゝうれしい)といふやうに、相好を崩してゐた。
「まあ! ひどいわ、叔母さん!」と、いふ惠美子と、ぴたり身を寄せて坐ると、湯上りのせゐ

か、生々としてゐて、人妻といふ氣は少しも起らず、惠美子とあまり年の違はない姉妹のやうにしか見えなかつた。
久滋も、いまは人妻と交際してゐるといふ、小うるさい良心の反省は、跡方もなくどこかへ消え、眉の間があざやかに晴れわたつた。
「なか〳〵どうしてお上手で、感服してゐる所なんですよ。」
「學校の方は、要領よく怠けるんですけれど、ピアノのお稽古だけは、熱心なのでございますよ。」
「學校は、どちらですか。」
「これの母が務めてゐます……」と、美爾子がいひかけるのを、
「いやよ。私の事いろ〳〵お話しするの。」と、いひながら、先刻から自分の肩の所までグーンとひつぱつてゐたカーテンの房をさかんにいぢりながら、くすぐつたいやうな怒つたやうな眼をして、叔母を見上げた。
「貴女、グロコールマンがあつたはずだから、あさやにいつて、持つて來て頂戴な。」と、叔母に

侵入者

いはれると、敏捷に立ち上つて、扉の外に走り出た。
久滋は、二人ぎりになると、美爾子が、外で會づてゐる時よりも、ずーつと興奮してゐるのに

氣がついて、少し不安になりながら、
「御主人は、いつ頃お歸りになりますか。」と、いつて訊いた。
「十一時過ぎませう。」夫人は、何か他人の事のやうに答へた。
「土曜日にでも、そんなに遲いのですか。」
「土曜日も、何もあるものですか。」
「でも、早くお歸りになるときもあるのですか。」
「えゝ、一週間に一度位はね。」
「でも、毎晩外で遊んで遲く歸る主人に比べれば、貴女の御主人なんか、結構ぢやありませんか。」
「私も、始めはさう思つて、あきらめて居りましたの。でも、結局同じ事ですわ。時間と精力を、外の事に使つてゐる點では同じですわ。妻にくれるものは、少しも殘つてゐないんですもの。」
美禰子の可愛い眉が、くもるのを見ると、よつぽどその生活が單純で、退屈なんだなあと、しみじみ氣の毒になつて、
「でも、貴女の御主人の場合は……」
「あら、貴方に、主人の話をして頂かうと思つて、來て頂いたのではありませんわ。」と、美禰子

は、キツパリ遮ぎつた。
「ぢや、何のお話を致しませうか。」久滋は、美禰子の烈しい制止に、少しタジ〳〵となつていつた。
「貴君のお話をきゝたいんですわ。關西へいらしつてからの……」久滋を見あげた美禰子の眼は美しく輝いてゐた。
「僕の話なんか、つまらんですよ。」
「いゝえ、つまらなくないわ。宅の主人の生活なんかよりは、ずーつと、面白いに違ひないんですもの。」
几帳面な研究生活を、蟲のはふやうに、ヂリ〳〵進めてゐる、良人の生活に比べたら、若くさかんな情熱に溢れてゐた久滋の話は、きつと面白いに違ひないと、美禰子は思つてゐた。
「僕なんかこの七八年來の社會情勢を見極めることが出來ず、從つてどんな生活が、現代で一番有意義なのか分らないし、それかといつて今まで育つて來たブルジョア的な生活をあきらめることも出來ず、結局、働かない生活はいけないと思つて、親父の家を離れるために、關西へ行つたのですが、自分一人でやり出して見て、どうにか生活が安定してくると結局、贅澤を覺えたり、

侵入者

遊びを覺えたりして、これはいかんノ〳〵と思ひながら、プチブルな生活に、尻を据ゑて了ひさうですな。でも、今でも何かしら、不滿でこれではいかん〳〵と思つてゐるのですよ。僕は、貴女のやうに、かしこく人生を見極めて、落着いてゐることが、以前から出來ない性分なんですね。」

「あら、私が、かしこく落着いてゐるんですつて……」

美禰子は、眼をみはつて、烈しく首を振りながら、

「違ひますわ。私には、何の目的もないんですもの。だから不滿を感じながら、ぢつとしてゐるだけですわ。」

「貴女が――何を、そんなに不滿を感じていらつしやるんですか。」

美禰子は、一寸顏を赤らめながら、

「だつて、心から打ち込んで行く何物もないんですもの。たゞ、かうして毎日主人を送りだして、毎日遲くまで主人を待つて……レコードを聽いて、犬と遊んで――」

美禰子は、謎めいた眼で、ヂツと久滋を見詰めた。久滋は、不思議な興奮が、自分の身體へも傳はつてくるのを覺えながら、

「ダンスなんかおやりにならないんですか。」

「あんな華美なこと、昔から嫌ひでせう。」

「芝居は……」

「あまり見ません。音樂會だけ月に一二度……」

久滋は、話してゐるうちに、息苦しくなつた。これはいかん――と思つた。若く美しく、生活に充ち足らず、情熱のやり場に困つてゐる女性から、發散する妖氣が、ひし〳〵と彼を襲つて來るやうな氣がしたからである。

一寸間を隔いてから、

「さつきのお嬢さんは、どうなすつたのでせうか。」と、訊いて見た。その妖氣を拂ひのけたかつたのである。

「惠美子ですか？」美禰子は、依然として彼から眼を放たずに、ゆつくりとした調子で訊ねた。

「はあ。あの方を呼んで、レコードでもかけて頂きたいですな。」美禰子の視線を避けて、先刻女中がはこんで來たグロコールマンの二房に、手をのばした。

「私と、二人ぎりで話してゐると、憂鬱におなりになるの？」

久滋は、自分の言葉を美禰子が、そんな風に取つたのを、少々じれつたく思ひながら、首をか

侵入者

るくふつた。

「さうぢやありませんよ。あまり、お話が理に落ちたからですよ。もつと、賑やかにしようぢやありませんか。」といつた。美禰子は、かるく肯いて立ち上ると、ミスタンゲットの「サセ・パリ」に針をあてると、扉の外へ顔をだして、

「惠美子さん。惠美さん、遊びにいらつしやいな。」と、呼んだ。

主人に呼ばれた犬のやうに、忽ち飛びはねるやうな足音がきこえると、自分よりはやゝ背の低い叔母の兩肩に、兩方の手をかけながら、惠美子が顔をだした。

「久滋さんが、三人で話しようと、おつしやるのですよ。」と、美禰子がいふと、惠美子はうれしさうに、先刻の位置に腰かけた。花盛りのライラックの一枝のやうに好もしい姿だつた。

空氣が、にはかに明るみ渡るやうだつた。久滋は愛嬌深い視線を惠美子に向けながら、

「惠美子さんは、何がお好きですか。」

「映畫にスポーツ。」よどみない答へだつた。

スポーツは、何がお好き。水泳にラグビー。自分でやつて見たいものはスキー、でもお母さんが許してくれないの。さうした理窟ぬきの會話から明るい笑ひが、部屋の中にかもしだされた。

「母が入れといふものですから、仕方なく英學塾へ入つてゐますの。でも、英語なんか嫌ひですから、ちつとも出來ないんですのよ。」

「ぢや、卒業なすつたら、すぐ御結婚ですか。」

「いやだわ。結婚なんて、氣味がわるいわ。」

惠美子が、朗かにいつたので、レコードをかけかへてゐた美禰子まで、つり込まれて笑つた。

快活に、何のこだはりもない惠美子の樣子が、久滋の心をたのしませた。二十歳以下の若い女性は、昔ほど感傷的でなくなつた。生活について考へぶかい顏をする前に、突き進んで、これを樂しまうとしてゐるのだと、久滋は思つた。

美禰子が、マスネーの「繪畫的風景」をかけると、久滋の爲に夕食の支度をするつもりで、部屋を出たが、出て一間ばかり歩いたとき、鳥の羽ばたきのやうに、騷しい思ひが胸をついて起つた。

それは、久滋が惠美子の事を——惠美子が久滋の事を——どう思つてゐるかといふことだつた。

惠美子が、久滋の美貌に、少女らしい憧憬をいだいて居ることは、この前音樂會で逢つた時から分つてゐたし、——久滋も自分と緊張し過ぎる話をするよりも、惠美子と他愛もない話をする

方がずーつと好もしげであるのも分つてゐたので、美禰子は臺所へ來て食事の指圖を女中にする間も、座敷に殘した二人の事が何かしら氣になつた。といつて久滋が惠美子のやうな少女を、積極的に誘惑するやうな男でないことは信じてゐたが。

部屋へ歸つて見ると、久滋と惠美子は、何か特別親しげに、聲高に笑つてゐた。惠美子は、叔母が、はいつてくるのを見ると、

「叔母さま。とても、うれしい事があるのよ。久滋さんが、これから劇場の切符を芝居がある毎に私と叔母さんとに送つて下さるんですつて。」と、ふは〳〵と止め度なく、上昇した機嫌のよさが、美禰子の心をギヨッとさせた。

久滋までが、彼女の凶い豫感を裏書するやうに、ほがらかな機嫌になつてゐた。

美禰子は、いつも可愛い姪が、この時ほど憎らしい——侵入者のやうな氣がしたことはなかつた。

惠美子と話してゐる時よりも自分と話してゐるときの方が、ずーつと冷淡のやうな氣がして、全神經がチカ〳〵してくるのだつた。

三人でする食事は、美禰子にはあまり樂しくなかつた。食事が終つて、久滋は一本のホープを

吸ひをはると、

「御馳走さま。僕もう失禮します。」といつて、あつさり立ち上つてしまつた。すると、惠美子が、

「あすこの坂が暗くて恐いから、久滋さんと御一緒に私も歸つた方が、都合がいゝわ。」と、これも淡々として歸りかけるのだつた。

何か二人が、示し合はせてゐたかのやうで、美禰子の勝氣は、それ以上、ヂツと落着いてゐるわけにはいかなかつた。

久滋の眼から、惠美子の姿をおほひたいやうな、否彼の視線の中へ、自分以外の女性の影を入れたくないやうな、わがまゝで酷薄な愛情が、にはかに彼女を狩り立てるのであつた。

惠美子の靴は、パンプヒールで、つゝかけるだけの、雜作もないもの。彼女は先へ降りると、玄關先の植込の陰に立つて、靴をはいてゐる久滋を待つてゐた。

その折を、美禰子はすばやく久滋の耳に、唇を寄せて、

「今日は惠美子が居るので、お會ひしたやうな氣がしませんわ。私、やつぱり外でお會ひした方がいゝわ。この次ぎ、いつ會つて下さいます。お決め下さいませな。」と、興奮に戰いた熱い息吹と共にさゝやいた。

久滋は、不意だつたので、立ち上ると強く美禰子の顏を見返した。
彼女の顏は、恐ろしく眞劍で、顏中が眼ばかりのやうに感じられた。

戰術

どこまで續くお天氣か、甚だ危いものながら、宮川夫人は、良人へ對する嫉妬を、いさぎよく清算して、我家を離れた良人の行動は一切不問に付することにして、心中は知らず、打ち見たところ天晴さば〳〵した賢夫人振を示してゐる。

人にも、御自慢の躾で、洋一も耶奈子も、寢る時間がくればさつさと寢部屋へいれられて、寂しがりもせず、眠つてしまふ。晝間は、その子供達のよきママ、夜は刺繍や編物や、時には女中や書生達を集めて談笑したり、コリント・ゲームをしたり、良人の歸りはいつにならうが一切無關心、十時になれば自分だけは、サツサと寢てしまふ。

宮川は、知人が熱海で、借地に關する訴訟事件を起したので、頼まれて、「二三日熱海へ行かねばならなくなつた。彼は職業上の事は、夫人に一切いはぬ習慣だつたし、所が所だけに、事實

用件で出かけるといつた所で、當然夫人のあてこすりや皮肉があるものと覺悟して、事後承諾的に、幾分殘酷な快感とは行かないまでも、それに似かよつたある感じで、その朝突然、

「用事があつて、二三日熱海へ行くよ。午前の汽車だから、大急ぎで支度。」と、ズバリといつてのけたのを房子夫人は二度と訊き返しもせず、良人の居間へ驅て、シャツやら靴下やら、新しいネクタイなどを胸もとに抱へて來て、ストウヴに近い長椅子に順序よく並べた。素直な態度が思ひがけなく、物足らぬやうな感じがするのは、却つて宮川の方だつた。

途中事務所へ寄つて、久美子の所へ熱海へ行くから會へないと斷るつもりで、電話をかけて見ると、彼女は珍しく、朝から出かけて居るといふ女中の返事だつた。

前から、體よく騙されて居るかも知れないと思ふほど、頼りない久美子の心、それゆゑに却つて引きつけられて、一度は完全に自分のものにしてしまひたい情熱に、時々驅り立てられるのだが、この頃は、いよ〳〵頼りなく、うすら冷たいやうな久美子だつた。

陽氣なよそ〳〵しさなら、どこからでも切り崩されようが、派手な女が、妙に暗くさびしさうに、彼の訪れも、むしろ迷惑げに、よろづ張のない有樣なのに、少し手こずつて、一昨夜も、

「どうしたのさ！」と、やさしく訊ねてやれば、

「あたし、この頃戀愛をしてんのよ。なあんてね。」と、眞らしくも冗談らしくもいつた。まだ、二十を越したばかりの娘に、正面から詰問するわけにも行かず、そのまゝ默つてしまつたが、十一時頃でなければ起きない久美子の、午前中に外出してゐるなど——ひよつとしたら、ダンス・ホールで知合になつた男とでも浮氣を始めて、昨夜から歸つてゐないのではないかといふ疑惑も起つて、熱海の事件をサツサと切りあげて、明日中にでも歸つて、久美子の行動を突き止めてやりたいやうな氣になつた。

そんな風にして、宮川が熱海へ行つた日の夕暮だつた。

學校歸りの隆一は、自分の家のある通へ出てから、裏のお妾の家の女中に、パツタリ出會つた。自分の歸りを、わざ〳〵待つてゐたやうな氣がした。計畫的な行動らしい表情を浮べて、走り寄つて來て、早口にさゝやいた。

「今晩七時頃、いらしつて下さいますやうに。奥さまが、お友達を集めて、お遊びなさいますんで、貴君さまに、ぜひどうぞ！」

隆一が、ハツとして立ち止まつたばかりで、返事をする暇もないうちに、女中は小走りに先へ歩いて、小路の中へはいつてしまつた。

彼は、ニヤ〳〵笑ひながら、そんなに甘くはないぞ、すつぽかしてやれと思ひながら、家へ歸つて部屋に落着いたが、さて机に向つて考へて見ると、自分が裏隣りに遊びに行くなぞは、燈臺下暗しで兩親に知れつこなく、平生口やかましい母親をかつぐ惡戯としては、安全至極な冒險で、それだけでさへ、一つ行つて見たい謀叛氣がわいて來るのに、誘つた久美子の面影が、何か不思議な蝶のやうに、彼の心の上をかけめぐつて、杜詩の卷四を取つてペラ〳〵とめくり、そこに目當つた、

「百舌いづれの所より來る。重々として、まさに春を報ず。」といふ一句を、いく度もくり返したけれども、讀みつゞける氣も起らず、まして他の本を取つて勉強する氣にもなれず、彼は食事の前に髪を整へ、また洋服に着換へてしまつた。母は、目ざとく、

「どこかへお出かけ？」と訊ねた。

「えゝ、試驗準備に、友達とノートを讀み比べて、整理をする約束をしましたから……」と、彼は臺詞を暗記した役者のやうに、スラ〳〵といつてのけると、母は安心して、

「十一時頃迄には、お歸りだらうね。」と、いつてそれなり、食事は濟んでしまつた。

彼は、間もなく家を出た。

足音をはゞかつて、一度は交番のある方角へ、靴音高く歩き、今度は向ひの塀際を夜盗のやうに身を忍ばせて、歸つてくると、久美子の家のある小路へはいつた。そして、そつと久美子の家の格子を開けた。それと知つてかたちまち、玄關へ出て來て、笑ひながら何か大きくいひださうとする久美子へ、彼は芝居氣たつぷりな樣子で、人指し指をピタリと唇にあてゝ見せた。

しかし、その刹那、足元の三和土に、二三足の男の靴と、女ものゝ草履などを見つけると、久美子の友達の種類を考へただけで、氣落ちがし、來るのぢやなかつたと後悔したが、久美子に手を取られんばかりに、招じられて、下の十疊の部屋へ通された。和洋折衷の裝飾で、もう五六人、人が來てゐた。

若い女のにほひ、むせるやうな煙草の煙、部屋の中はムーツとするほど、暖かだつた。

凡そ部屋にゐる若者達は、粗雜な厭味なタイプで、後で分つたが、蒲田の女優だといふマヤ子といふ女性も、ひとみと額ばかりが大きく、あくどく丁寧な化粧も、どこか曲馬團じみてゐて、隆一は久美子の手前に、何か己の優越感を誇りたいほどだつた。

久美子も、隆一だけには露はな好意を見せて、人々への紹介にも、

「この方が、若い學者の和田さん。この人達は、みんな私のお友達よ。」といつた。誰かゞ、

「十把一からげはひどいな。」といふと、

「十把一からげにして置けば、後で追々分るぢやないの。」といひ返した。

そんな風に、何か隆一に優先權を與へてゐた。

久美子は、一座の連中の女王のやうに、振舞つてゐたが、皆見かけよりは、善良な連中らしく、そんな風に紹介されても、ニコ〳〵して隆一に、愛想よくするのだつた。

カードで、何かしてゐたらしく、みんなの卓の上には、トラムプが散らばつてゐた。

「バカラをやつてゐましたの。」と言ひながら、久美子が、トラムプを片づけようとするのを、隆一は、

「仲間になりますよ。」と、止めた。

「さう。ぢや私の隣にいらつしやい。そして、私の親から始めませう。」と、久美子は隆一を自分の傍にすわらせた。

バカラは、直ぐ續けられた。

若者達の、闘暴な位無遠慮な浮いた氣分の中で、隆一は最初は落着きを示して勝負にも強かつたが、矢張りさびしく生眞面目に教育されて來た隆一は、いつか上せ上つてしまつた。

洋酒が出て、ねたし、紅茶の中にも、少量ながら、ウヰスキイが加味してあるし、隆一は頬を上氣させ、いつの間にか周圍の連中と同じやうな笑ひ聲を立てゝゐた。

バカラの勝負は、彼が勝ちつゞけたが、最後に久美子と一騎打して負けてしまつた。

「これでおしまひよ。」

口惜しさうな彼の鼻先で、久美子はうれしさうに拍手して見せた。

それから、一座は二組に別れて表情遊戯を始めた。

隆一と久美子が反對の組の銘々の頭だつた。

これは、敵の方からその組の一人に課した題を、課せられた人が言葉ぬきの表情だけで表現し、それを味方が理解しなければ、負けになる遊戯であつた。

隆一の番になると、敵の組の久美子は、仲間と愼重に耳打ちをしてゐたが、やがて彼女は勝ち誇つた微笑を浮べて、隆一を衝立の陰に手招きした。

題を聞くつもりで、衝立の陰へ行くと、久美子は、晴々しい目つきで、隆一の身體を、抱かうとした。

隆一は、久美子の大膽な所作に、タヂ〳〵としたが、まさかその手を拂ひのけるわけにも行か

ないのをいゝことにして久美子は隆一の兩肩を抱いて、耳にふれるばかりに唇を寄せると、

「私、貴君が來て下さつたので、うれしいの！」といつた。

隆一は、その色つぽい動作に、壓倒されさうなのをやつと、踏み止まつて、

「それが題ですか。」と訊き返した。

「あら、いやだわ。題は別よ。題は、サンゴロー！」

「サンゴロー！　落語家ですか。」

「さう。」

「むづかしいな。」

「出來なければ、皆の前で私のいふ通、何でもしなければいけないことよ。」

「僕がうまく表現しても、味方が理解してくれなかつたら、どうします？」

と、隆一は近々と見る久美子の美しさに、やゝしどろになりながら訊ねた。

「早く出て來ないと、怒つちやふぞ。」と、誰かゞわめいた。

隆一は、自分の胸の中に起りかけた感情を、誰かに察せられたやうな氣がして、あわてゝ皆の前に進み出た。

まづ、手眞似で羽織を脱ぐ眞似をして、高座だといふことを味方にうなづかせ、次ぎに鰻をつかまへるやうな、くにや〳〵した三語樓の手つきを可なり巧に演出したが、やう〳〵味方の一人が、

「落語家！」と、怒鳴つただけだつた。

「駄目よ。ちやんと名前をいひ當てなければ。」と、久美子が間髪を容れずに叫んだが、隆一の組であつたマヤ子が、女性のすばやい直感で、

「三語樓！」と、見事にいひ當てた。

久美子は、隆一を教育家の息子と見て、三語樓の眞似など、出來ないものと定めてかゝつて居たので、つまらなさうな顏をしたが、後の連中は、一しきり隆一の手眞似をほめて、笑ひがなかなか途切れなかつた。

「さあ、今度は、此方の番だ。役者は、貴方でせう。」と、隆一は、久美子を招いた。

隆一は、先刻から彼女に當てゝ考へてゐたプランを、仲間に素早く傳へると、彼女を衝立の陰に連れてはいつた。

久美子は衝立の陰になると、なれ〳〵しく、すり寄つて、隆一の肩に、右の手をかけてゐた。

モデル、マネキン、ロボットと思案して、一番むづかしさうなロボットを選んで、

「ロボット！　出來なければ、罰はシツペ！」といつたが、偉さうな口を利いても、女を知らない隆一は、二度もつゞけて、美しい久美子に、身近く立たれると、その肉體から立ちのぼる妖氣に當てられずにはゐなかつた。

彼女の髪の毛から發散する香氣が、魂をしびらせ、彼女の眼がチカ〳〵と柔かく輝き、彼女の半開の唇からもれる熱い呼吸が、不透明な香り高い靄のやうに、彼を包んでしまひ、彼は所を忘れ自分を忘れ、あらゆる道德的反省を忘れてゐた。

若い隆一は、自分の出題した、ロボットのやうに、久美子の持つ雰圍氣に、魅され、支配されてゐた。

久美子は隆一の出題に、暫らく困じてゐたが、やがて一座の眞中に、立ち上つた。

隆一は、久美子が、まじろがず前方を見つめて居る神祕めかしい瞳の色に、魂を打ちこんで見つめてゐた。

久美子は、しなやかな指で、ハート型を作り、それを自分の心臟のところに當てゝから、兩手をふりほどいて、それが無いことを示し、また脈に手を當てゝ、それをふりほどいて、それが無

いことを示して、まづ人形を暗示した。さて、そのふくよかな胸の兩乳房を、人造人間のボタンに見せて、着物の上から強く押して、シヤツキ〳〵と歩いたり、コクリ〳〵とうなづいて見せたが、敵も味方も、そのあざやかな身振りに、崩れるやうに笑ふだけで、久美子のすばらしい機智にも拘はらず、彼女の味方は、ロボットとは、いひ當なかつた。

「いやになつちまふな。」と、久美子が匙を投げると、隆一はすかさず、

「シツペをしますよ。」と、進み出て、久美子の右の手を取ると、そのまん圓く膨のある甲を、指の跡のつくほど、強くはげしく打つた。久美子は、却つて強く打たれたことを喜ばしさうに、

「こちらはいゝの。」と、左の手をからかふやうに、隆一の鼻先にさし出した。

或は、もぐらの眞似。ジプシイの眞似。その後も、馬鹿騒が續いて、遊びが種切れになつたのが、十一時頃だつた。

「遲くなつちやつた。失禮するかな。」と、誰かゞいつたのがきつかけで部屋の空氣は、忽ち動搖した。マヤ子が、

「あたし泊めてもらはうかな。」と、いひ出すと、

「三郎ちやんにわるいから、一緒に歸れよ。」と、久美子が、男のやうに亂暴な口調でいつた。

三郎といふのは、のつぺりとした學生で、露骨にマヤ子と戀人らしく、ふざけてゐた學生だつた。

「歸らうよ。」と、岸といふ、久美子に氣のあるらしい青年が、さう皆にいひながら、意味ありげな眼差を隆一の方へ送つた。隆一も、かすかながら、ムツとした氣持で、

「どうも、御馳走さま。僕も失禮します。」と、腰を上げると、

「貴君は、駄目ですよ。みなさんと、ドヤ〳〵とお歸りになつたら、お家の方へ知れるかも知れませんよ。ちよつと、お殘りになつてから……」と、きつぱりすぎる程、ハツキリ彼を引き止めてしまつた。それは、隆一としても文句のないところであつた。

銀座街頭

皆が歸り去つた後は、文字通り杯盤狼藉、取りみだされた部屋に、獨り坐つてゐると、隆一は自分らしからぬ今宵の振舞を、反省するよりも、魔法にでもかけられたやうに、唯々諾々と、久美子の思ふ通りになつてゐる自分が、たゞ不思議で、しかも今迄の生活になかつたやうな甘美な

感じがするのだつた。
「戀かな。戀だとするととんでもない女に戀したものだ。」彼はさう考へると、心の中でゾツとした。
「ペンニイ・ペンニイ・ペン。」甘たるい聲で、イタリー語の歌の章句をくり返しながら、客を送りだした久美子が、浮々と引き返して來た。

×

隆一が家に歸つたのは、十一時を過ぎてゐた。家族は、みんな寢入つてゐたので、隆一は、こつそり自分の寢間に入つてしまつた。
明け方、やうやく眠りについて、今朝は妹に、度々呼ばれてから起きた。彼が、食堂へ顏を出すと、
「昨夜は、大分遲くお歸りのやうでしたね。」と、母は皮肉でなしに、彼の勉强を犒らつて話しかけた。
彼は、簡單にうなづいてから誰とも話をせず、食事をした。妹が、
「昨夜、裏の家、隨分大變なさわぎだつたのよ。兄さん、御存じない？」

話しかけたので、少しヒヤツとしたが、母が横から、
「ほんとに困つた人達ですね。」合槌を打つたので、隆一はだまつてゐた。
食事が濟むと、サツサと家を出かけたが、もう自然科學をやる冷靜な學徒ではなくなつてゐた。
昨夜人々が歸つた後で、いきなり狂したやうに、自分の前にさしだされた久美子の唇を、戰きながら、拂ひのけて、たつた今迄自分も一緒になつて演じてゐた馬鹿さわぎから、久美子の生活を皮肉に口汚くのゝしり、
「貴女なんか魂のない、生きたロボットですよ。」と、いつて棄てると、
「さう。おつしやる通りだわ。……ぢや、どうしろとおつしやるの……私、何を當にして暮せばいゝんでせう。」
拂ひのけられて、花のくづれたやうな形のまゝ言葉につくせぬ哀愁を、――なまめかしさのありつたけを双眸にあつめてヂツと彼を見つめてゐた。
「私に、魂を誰が入れて下さるの。私にだつて、純情な戀は出來てよ。……仕方なしに不自然な生活をしてゐるけれど、私を本當に愛して下さる方があつたらちやんと出來てよ。今のパトロンなんか、ちつとも好いてゐませんわ。」と、涙さへ浮べて、なほヂツと見つめるのをいきな

り引き寄せて接吻したのは、誰をとがめる由もない自分の仕業だつた。そして、驚いて走り出した玄關で、久美子が、

「明日會つて下さらなきや――學校がお退けになる時分、さうね、三時頃ならいゝんでせう。銀座の――何處に致しませう――資生堂で――きつといらしつて下さいね。」といふのを結局承諾してしまつた事になつた。

一體昨夜から自分は、何をしてゐるのか、あさましい事ではないか。妾の情夫！　そんな言葉が彼の心を苛責した。

教室には入つても、講義は一切耳に入らなかつた。總ては、昨夜だけの惡夢にして置け、今後一切あんな女に、かまふものか。

さう思ひながら、彼の心はすぐ久美子にひきつけられてゐた。

謎のやうな美しさ、蓮葉な、陽氣な女が、忽ちしなえて、世にもあはれな體で、彼を見上げる嬌態。

熱いさわやかな唇から受けた幸福感！

それを考へると、反省も理性も、父も母も、みんなとりとめなくなつてしまふ。

（きつといらしつて下さいね）

久美子の言葉を思ひ出すと、何ともいへない愉しい誇らしい氣持が、青春の歡喜こゝに極まるといふ感じで身體中に流れるのであつた。

× ×

熱海へ行つた宮川の用件といふのは、割合簡單なもので、もと〳〵熱海に別莊を持つてゐる彼の知人が、用事にかこつけて彼を招待したやうなものであつたから、忙しいといへばその日の内にでも歸れる筋合のものだつた。

だから、一泊して仕事が片づいてしまふと、冷然とし出した夫人のことも、久美子のことも氣がかり、その日の晝過ぎの汽車で、東京へ歸つて來てしまつた。

彼は、新橋驛で降りると、直ぐ澁谷の久美子の家へ行くつもりで、風タクに乘つたが、乘つてしまつてから、（待てよ）と自分自身に呼びかけて、

「おい！　澁谷へ行くのは止すよ。銀座へ行つてくれ！」運轉手に命じ直した。

あの夜以來、よそ〳〵しいほど晴やかな房子夫人の態度が、隨分氣になつてゐたが、今度の熱海行で、いよ〳〵これはをかしいと思つたので、今日のやうな時間に餘裕のある時に、何か品物

でも見立てゝ買つてやつて、浮氣はするが、妻にも良人らしい誠意を、持つてゐることを、見せたくなつた。

序に子供達にも、久美子にも——。さう思つて宮川は銀座通りを珍しく獨りで、ブラ〳〵歩き、見なれた商店をのぞき込みながら、到頭ある寶石店で、房子夫人に、眞珠のヘヤービンを買ひ、そこを出てから子供には、松坂屋で、おもちやを、久美子にはとりゐ屋か田屋かで、ハンド・バツグでもと思つて、電車通りを横ぎらうとすると、目の前を通る自動車の窓ガラスに、チラと久美子の顔が見えた。

「やあー」と、思はず口にだして叫びながら、ステツキをあげさうにしながら、遠ざかる自動車を見送ると、乘つてゐるのは久美子一人でなく、學生らしい男の肩が、正しく久美子の肩と並んでゐた。

しばらく、茫然としてしまつて、危く青バスにひかれさうになりながら、やうやく松坂屋の方に渡つたが、心中すこぶる穩ならず、人に押されながら、エレヴエ・ターに乘り、うつゝなく五階へ行き、洋一に飛行機を耶奈子にフランス製の人形を買ひ、それを自宅の方へ配達を頼むと、一散に松坂屋を飛びだし、澁谷へ自動車を走らせた。

久美子が、留守なことは分つてゐた。自分が、今日も歸らないと思つて、どんな事をしてゐるか分らなかつた。だが、歸つてくるまで、待つてやらう。そして、歸つて來たら、思ひきり責め、詰つてやらう。都合で、別れてしまはう。

さう考へて來ると、妙に切迫した感じが、胸に迫つて來た。俄に久美子の出鱈目なあどけない態度や、西洋人臭い立居振舞ひなぞが再び得がたいものとして、二倍にも三倍にも美しく感ぜられ、あゝ自分は別れられるだらうか。あれを失ふ位なら、一思ひに殺してしまつた方がいゝ、何か自分が下手人にならずに殺す法はないか、などと、思ひがけない激しい嫉妬の情が、湧いてくるのを宮川は、グイと奥歯でかみしめてゐた。

暮なづむ冬の夕空に、ぼんやりと視線をあづけて、兩腕をむづと組み、今まで覺えないやうな嫉妬の苦しみに、肺腑をのた打たせてゐると、澁谷までが、三十分も四十分も、かゝるやうな氣分がした。

久美子の家に着いて、いつもの通り、板敷の上に、ペチヤンと坐つて、

「いらつしやいませ！」と、挨拶する女中に、いきなり、

「奥さんは、いつから出かけたんだ？」と、嘘をついても駄目だぞと言外に威を持たせていふと、

女中はにぶく、怪訝な表情で、

「奥さまは、二時頃お出かけになりましたが……」といふ顔を、つく〳〵見返したが、嘘をいつてゐるやうな様子は、少しもなかつた。

客間に通つて、折鞄をドサツと投げだし、自分でストウブをつけ、長椅子の上へこしかけて見たが、糸目の切れた凧のやうに、東京中をフラ〳〵してゐる久美子の事を考へると、何かしら落ちつけず、あの學生はどういふ男であらうか、いつからの知り合だらうか、などと愚にもつかない事が、眞劍に考へられ、久美子と自分の年齢の違ひや、氣持の相違などが、今更のやうに不安の種となり、金で買つてゐる愛情の頼りなさが感じられ、宮川は久美子に對する自信が、霧のやうに飛びちつて行くのを感じた。

相似

夕方になつても、久美子は歸らなかつた。いつまでも待つてやるぞといふ氣持で、女中に命じてこさへさせた夕飯を、氣まづく食べた後、今度は久美子の居間の六疊へ入つて、何か浮氣をし

てゐるやうな、ハツキリした證據がないか、探して見る氣になつた。

贅澤過ぎるほど、立派な三面鏡の前に、背の高いのや低いのや、白や青色のいくつもの壜に、人形の首のつまみのついた陶器の粉白粉入や、その他いろ〳〵のお化粧道具が賑やかに並び、部屋には、その人らしい香氣が漂つてゐた。

壁には、銀のわくの額縁の内に、宮川自身がすましかへつてをり、それと向ひ合ひに、やゝ小さい型の額縁の中に、久美子がお得意のポーズで納まりかへつてゐる。

鏡臺の抽斗を拔いて見ると、汚れたパフや、ガーゼや、まるめた拔毛なんぞ、見たばかりでゾツとするやうな代物ばかりが、一杯につまつてゐる。

左の壁に沿つて置かれてゐる簞笥の抽斗なども開けて見たが、歌舞伎座や東劇の繪番組や、邦樂座や武藏野館のキネマ・ニユースといつた他愛のないものばかりで、しかもどの抽出も、鍵などかゝつてゐるのは、一つもない。

あつちこつち、ぼんやり眺めてゐるうちに、氣負ひ立つた自分が笑止に思はれ、久美子は例によつて、取るに足りない學生と、フロリダへでも踊りに行つたのだらう。ならばこんなに興奮して待つ方が、大人氣なく馬鹿々々しい。歸らうかなと思つて、以前の座敷の方へ引き返して來た

が、そこでまた氣が變つた。

時々、こんな風に、無規則に家をあけて、此方につまらない心配をさせるのは、にが〳〵しい。今夜こそ銀座で學生と相乘りしてゐた所を見たのを、とつてに取つて、ぎゆう〳〵いぢめてやらう。いぢめようといふ氣持の中には、いぢめて謝らせて置いてから、久々で思ひ切り愛撫してやらうといふほくそ笑ましい氣持も、そつと忍んでゐた。

女中に湯の支度をさせて、ゆつくり入つて出たのが八時過ぎた。

二階から羽根蒲團を降させ、ソファの上に横になると、あゝも叱り、かうも詰つてやらうと思つてゐる内に、うと〳〵と眠氣ざして來た。

×

「あら、こんな所でどうなさつたの？」と、常にかはらぬ、甘つたるく粘りつくやうな、久美子の聲を聞いて、自分の考へでは、こんな姿勢を取つてから、まだ十分と經つてはゐまいと思ひながら、腕時計に薄目をやると、もう十時を過ぎてゐた。

不用意な時に、久美子に先手を打たれたので、思ひ通りの姿勢が取れず、少しまごついてゐると、

「風邪ひくわよ。」と、なれ〳〵しくかゞみこんで、肩に手をかけようとしたので、思ひ切り邪慳に、それを拂ひのけた。

チツと、久美子の容子を睨め回してゐる宮川の眼を、久美子は眞面に受けながら、

「おゝこは。私が居なかつたんで、憤つてゐるのね。ごめんなさい！」と、それがいつもの手の、愛らしい仕草で、ピヨツコリ頭をさげるのを、強く頭を振つて、

「駄目々々。謝まつたつて、許すものか。どこで浮氣してゐたんだ。」と、烈しくいふと、

「あら、浮氣なんかしないわよ。マヤさんと銀座で買物をして、邦樂座へ行つたのよ。」と、あつさりしたものだつた。

「嘘を吐け、おれも、銀座へ行つたんだ。君が、學生と自動車に乘つてゐるのを見屆けて、留守を承知で、この家へ來て、待つて居たんだよ。いつものやうに誤魔化されはしないよ。」と、冷淡にいかめしくいふと、長椅子から立つて、彼女からわざと遠ざかるやうにと、腕椅子の方へ坐り直した。

だが、心の内では、彼女の答へは凡て分つてゐるつもりだつた。（いやアん！）と甘えて（何何さんとさびしかつたから、どこそこへ踊りに行つたのよ）と、いふのであらうと高をくゝつて

ねると、その豫想は見事に外づれて、

「御存じなら、お聞きにならなくつてもいゝぢやないの。」と、不貞々々しく忽ち笑ひをのんで、つゝぷくれた表情になつて、しかも冗談氣は、微塵もなかつた。宮川は、思はずかつとなつて、

「おい！　あんまり、人を馬鹿にするのはよせ。それが、散々待たせた俺に云ふ言葉か――一體君は、この頃どうかしてゐるぞ、昨日は午前中から家を開けてゐるし、一寸僕が東京を離れると等生と、一緒に遊び歩くし……少し勝手過ぎるとは思はないか。君一人世話になつてゐると思ふと、間違ふよ。君の親父さんにだつて、相場の資金を一萬圓近くも融通してやつたし、君にだつて衣物や身の廻りのものだけだつて、一萬圓近くはこさへてやつたし、貯金は……」と、いひかけて見たが、久美子は達磨大師も三舎を避けさうな、鐵壁の沈默の中にたてこもつてニコリともせず、宮川の言葉をはねかへしてゐる容子に、たまりかねて、

「おい！　おれのいふことを聽いてゐるのか。おれのいつてゐることに不平があるのなら、おれはもうこの家に來ないよ。」と、定石の大人氣ない脅し文句を、宮川はてれ臭い思ひでいつてのけた。

「だつて……」と、やうやく唇をうごかしたが、そのまゝ默りこんでしまはうとするので、

「だつて、どうしたんだ！」と、いふと、

「だつて私、若いんですもの。」と、久美子はケロリとしていつた。

「若い！」と、宮川が氣色ばむと、

「お怒りになつたらいやだわ。だつて、貴君には奥さまが、おありになつて、私は近所隣から、後指をさゝれるやうな、肩身のせまい暮しをしてゐるんですもの。貴君、のいらつしやらない時位、遊んだつていゝぢやないの。年中貴君の顔ばかり見てゐるといふことはないわ。」

宮川は、さういはれたときに、自分の顔を逆さに突きあげられたやうな氣がしたが、その時彼は自分が妻に對して時々いつた言葉を思ひだした。

（おれだつて、事務所へ行つちや相當忙しい仕事をしてゐるんだもの、何も毎日のやうに家へ歸つて、年中お前の顔ばかり見なければならぬといふことはないだらう）

彼は、いつも妻に不用意にいふ、かうした言葉が、いはれる方にはどんなに致命的な言葉であるかゞ始めて分つたやうな氣がした。

しかし、それは男性だけがいへる特權のある言葉のやうな氣がして、久美子にいはれて見ると、猛烈に腹が立つて、

「おい！　それはおれに愛想づかしをいつてゐるのか。」と、つめ寄ると、久美子は、
「あら、さうぢやないわよ。たゞ、物の道理をいつてゐるだけだわ。」と、平然としていつた。
凡てが、強氣の不貞くされで、宮川がいつか久美子に自分の家まで送らせた時、妻に見つけられて、破れかぶれに房子夫人に對して取つた態度と、そつくり同じであつた。
自動車に同乘してゐる所を見つけられるといふ事件の發端までが、似てゐた。たゞ、宮川の立場だけが、違つてゐるだけだつた。
宮川は、そんな事に氣がつくと、何か因果應報といふ氣がして、むきになつて久美子を咎める氣にもなれず、といつて、可愛い女から愛想づかしをいはれる年がひもない器量のわるさに、苛立たしい沈默をつゞけてゐると、その内にどういふ考へか、久美子は帶止をはづし、帶揚げをほどき始めた。
これも、彼女の用ひる戰術の一つで、今まで喧嘩をして、險惡になると、忽ちしどけない恰好をして見せて、そのまゝ有耶無耶にしてしまふといふ遣方だつた。
今に、（今のは冗談よ）と、首にすがりついて來る彼女の兩手を期待しながらも、そこは男としての意地で、先手を取るつもりで、

「いつもの戰術は、駄目だぞ！」と、いひ放つと、
「戰術ぢやなんかないわ。御飯を頂いたばかりで、苦しいからですの。」と、白々と、取りつく島のない物いひに、宮川は愕然として、驚きあきれるのだつた。
戰術でないと迄いはれると、もう正面から最後の話をする外はなくなつたので、
「さうか。さうまでいふのなら、ハツキリ話をつけよう。おれもさう物分りの惡い男ぢやないし、君も世話になつてゐる旦那をだましてゐるのぢや辛からう。正直におれが、いやになつたとでも、外に好きな人が出來ましたとでも、ハツキリいへばいゝのさ。おれもさうだつたら、仕方がない、あきらめるよ。どうだ、おれがいやになつたんだらう。」と、宮川は、冷靜に〳〵と話すと、久美子は不敵な微笑を、チラと浮べて、
「いやになんか、なりやしないわよ。好い方だと思つてゐるわ。前から貴方を好きな氣持、ちつとも變つてなんか居ないわよ。」
「好い方で、嫌ひぢやないといふだけぢや、男女の仲は面白くないんだよ。情熱がなければ……ぢや、前から好きな氣持に變りがないけれど外に戀人が出來て、情熱が無くなつてしまつたといふんだらう。」

まさに、それに近いのであるが、久美子はまづ、

「ふゝ……」と笑つてから、

「ひとりで、お決めになつておしまひになるのね。そんな事當つてゐないわ。でも先刻もいつた通り、貴君にちやんとした奥さんがあり、お子さん達があつて、貴君がその家族制度つてものを立派に認めていらしつて、御自身の都合のいゝ時だけ、自由になすつていらつしやるんでせう。私は、その、お相手をしてゐるんですもの。それと同じに私だつてお妾つて位置は、ちやんと心得てゐるのよ。でも、あなたがお見えにならない時位、遊んでもいゝだらうと思つて、つまり立場は違つても、理窟は貴君と同じだらうと思つてるの。」

條理の立つやうな立たないやうな、申譯のやうな申譯でないやうな事をいひながら、着物からすつかり紐といふ紐をとつてしまふと、

「絹や、私のお部屋に、パジヤマをだしといてね。」と、女中にはすこぶる御機嫌のよい聲で命じ、裾前もハラ〳〵と隣室へ行くと、着物を着かへながら、女中をからかつてゐるらしい、クツ〳〵といふしのび笑ひが聞えてくる。

自分に對してだけ、無愛想になつてゐる久美子に、宮川は身體のしんからムツとした、憤り

とも情なさとも、みじめな氣持とも、分ちがたい感情がわいて來て、しみ〴〵嫉妬の情といふものは、何と耐へがたい不快のものであらうかと思ふのであつた。

宮川は、薄ら寒い氣持で、常に自分を待つてゐる妻の氣持が、とんでもなくしみ〴〵と胸に思ひだされ、嫉妬する身がどんなに辛いかゞはじめて分つたやうな氣がした。

（ぢや、もう會はない事にしようね）と、一言きつぱりといつて歸つて了へばいゝのだが――宮川は、久美子に鐵鎖のやうに強い未練で、繋がれてゐた。

それを又、久美子がよく知つてゐた。

久美子は、久美子で隆一にわけもなく、心をさらはれてゐた。

その兩親に對する反感から、一寸ちよつかいをだした相手が思ひの外に物分りがよく、純情で、率直で、今までの男友達とは丸きり風格が變つてゐるのが、好きになり、好きになつたとなると、一瀉千里にほれてしまふ久美子は、昭和通のある鳥料理で、

（もう今日限り會はない）といふ隆一を、あの手この手で巧に說き伏せて、宮川の來ない土曜と日曜とだけ、二人ぎりの時間を作ることを承諾させてしまつた。だから、今の彼女の胸の内は御機嫌の惡からうはずはない、萬々歲である。

だから、宮川に未練はないのだが、宮川とかうしてゐるために得られる贅澤といふ人生の快樂には、彼女もまた鐵鎖のやうな斷ちがたい未練で、繋がれてゐた。

贅澤も亦、人生の最大な快樂の一つである。まして、久美子のやうな女性にとつては、一時の情のために、みだりに捨てゝはならない必要品なのである。

それに、相當かしこい久美子は隆一の兩親があんな風では、この上二人がどのやうに愛し合つても晴れて一しよになれるといふことは、覺束ないといふことを、ハツキリ知つてゐたから、好きな限りは、會ひつゞけて居ようと思ふだけであるから、そのために宮川と別れようとは思つてゐない。

だから、宮川は宮川で、相當機嫌を取つて置けばいゝのであるが、わがまゝで、どこか、天眞な久美子は、隆一に強く心を引かれてゐる以上、そんな心の餘裕はないのであつた。

だから、一層のこと、これを機會に、宮川と清算して、自分で働いて食ふ、もとの女給仕か、でなかつたら、ダンサアにでもなつて、しまはうかと、天晴な心境が浮び上つたが、もとより氣おくれした久美子の空な思ひつきだけで、手近なところ、見事身體にピタリと食ひいる絹のパジヤマや、高價なパリ製の化粧品も、何不足ない部屋も、易々とは清算しがたいものばかりである。

その上、豐かであれば戀愛もたのしいし、宮川といふ堰があれば、却つてせかれるために、逢瀬が樂しくなると考へると、また忽ち妥協する氣になつて……

「そこへ行つても、もうつまらない事いはないか。……久美子は、貴君の好い子ちやんなのよ。いつまでも……貴君が勝手に、やきもちを燒いて、變な事おつしやるから、つい買言葉で、久美子憎い見たいな事いつたのよ。ごめんなさいね。そこへ行つても、もう大丈夫？」

あざやかな轉向。半開きの扉から、顏をのぞかせて、この一週間かされなかつた甘い言葉に、宮川が思はず苦笑すると、黃色いパジヤマは忽ち猫のやうに、ふんわりとあたゝかく、彼の膝の上に飛び込んで行つた。

夫婦

夫　昨夜、宮川が家へ歸つて來たのは一時を過ぎてゐたから、そのまゝ寢室へ行つた。なか〳〵寢つかれなかつたが、朝は、案外早く眠がさめた。

婦　すぐ、頭にくるのは、久美子の事だつた。別れたくない未練で、だまされると知りながらだま

されて、手もなくよい／＼よい、あわゝと、あやされてしまつた感じであつた。しかし、何か久美子の心の中に、異つたものが、忍び込んでゐることだけは、疑へなかつた。少し浮氣をされても、平氣でゐられる位の女は、世話をして置いてもつまらないし、といつて此方が打ち込んでしまへば、一寸した疑惑が起つても苦しいし、といつて妻にしてしまへば、安心し切つて面白くもをかしくもなくなるし、それに、久美子が自分の位置を、ハツキリ認識して、性道徳とか家庭制度などと、かれこれいひだしてくると、いよ／＼苦しまさせられるのではないかと思ふと、宮川は早朝から、少し憂鬱になつてゐた。

廊下に足音がして、朝刊を持つて房子夫人がしのびやかに、寢部屋に入つて來た。

「あら。……もうお目覺めなんですか。」と、いつたまゝ、出て行かうとするのを、

「おい！」と、叱りつけるやうに呼び止めたので、夫人はけゞんな顏をふりむけて止まつた。

「ストウヴに火をつけてくれ。もう起きるから。」

返事はなくだまつて、栓をひねつて火をつけてゐる夫人を眼で追ひながら、

「近頃、君は人が惡くなつたね。前には、もつと肚と口とが、一しよだつた。肚でゴテ／＼思つてないで、何でも素直にいへばいゝぢやないか。」

起きがけから、いきなり何をいひだすことやらと、夫人は少々あわてゝ、マジ／＼と良人の顏を見つめた。宮川は、少してれくさくなりながら、

「さうぢやないか、旅行から豫定より早く歸つても、仕事が早く片づいたかとも、訊いてくれないし……」

「そりや、貴君がみんな惡いんですもの。申し上げたつて、無駄だと私に思ひこませて、おしまひになつたんですもの。」

房子夫人の表情には、歴々と皮肉に冷い、そして少々恨みがましい妙な笑ひが昇つて來た。

さうきり込まれて見ると、受太刀はきまりが惡く、ヘナ／＼になつてしまつて、

「階下へ行つて御飯をたべるから。……」

そつぽを向いていふと、房子夫人は默つて出て行つたが、この一二年つひぞ聞かなかつた、良人の、つゝかゝるやうな、物いひで、何故だか知らないが、良人の心がグーンと自分の胸元に、飛び込んで來たやうに感じて、にはかに足音も晴やかに階下へ降りると、女中に物をいひつけてゐる聲にも喜色が溢れてゐた。宮川は起ち上つて鞄の底からヘヤピンをとりだすと、ガウンのボケツトにつゝこんで、のつし／＼と階下へ降りて來た。

階下へ行くと、昨夜子供部屋へそつといれて置いた包みを早くも解いたと見え、洋一は飛行機の捩子を巻いて、うれしがりながら、

「パ、。今日は日曜？」と、訊いた。父が、朝から家にゐて、自分達の機嫌を取つてくれる日は、日曜だと子供心にも知つてゐるからである。

「うゝん。今日は、日曜ぢやないよ。」と、宮川は苦笑しながら答へて、

「これ、マ、さんにも、お土産……」と、いつてさすがに、直接に手渡すことが、氣はづかしくガウンのポケツトから小箱を取りだして洋一に渡すと、洋一は非常に重大な使命を、父から受けたやうに、飛行機を放りだして、勝手の方へ走つて行つた。

間もなく、房子夫人は、手足をだらんとさせてゐる耶奈子を、兩手で携げるやうに抱きながら、抱いた右の手先で箱から取りだしたヘヤピンを持ちながら部屋へ入つて來た。

「これお土産――何だかきまりが惡いやうね。」御機嫌とりとは知つてゐながら、それでもうれしい女心の、率直に感じのまゝいつた。

「何がさ――」と、わざと訊き返して、もう支度の出來てゐる膳の前に、ドカリと坐つた。

「僕に、一寸見せてよ。」と、生意氣に、母親の手から、ピンを取らうとする洋一を、和やかにな

だめながら、早速にルイズ巻の根元にさし込んで、また直ぐ拔いて見ながら、

「隨分いゝものね。私、これに似たのをよつぽど自分で買はうかと思つてゐたの。」と、娘の頃のやうに、あどけない笑顔に、明るい表情をしてゐる房子夫人の姿を、珍しいものでも見るやうに、宮川はしげ〳〵と眺めいつた。

昨夜の今朝であるだけに、妻も子供も可愛く、こゝに安住してゐれば、嫉妬も焦燥も、何もないのだがなあ、と、宮川は思つた。

「熱海、如何でした？　東京より、よつぽど暖かでせう。」と、箸を取りあげた良人に話しかけた。

「さうね。東京ほど、風が寒くないね。」

「パ、、魚釣りした？」洋一が、今年の春、熱海へ行つて魚釣りをしたことを思ひだして、横から口をだした。

「魚釣りなんかしないよ。お父様は、御用で行つたんだもの。」

夫「ぢや、今度魚釣りに連れて行つて？」

「うん。來年にでもなつたらね。」

婦「來年のお正月？」と、洋一がきゝ込むのを、

「うん。まあ。」宮川が、ごまかしかけるのを、房子夫人が、
「お正月に、パ、さんにおねがひして、皆で行きませうね。」と、抱いてゐる耶奈子に頬ずりをした。珍らしく寛ろいだ氣持で、食事の後も、夫人と世間話をしてゐる内に、ラジオの晝間演藝の放送が始まつてゐた。
「今日は、出かけないで、家にゐようか。」と、口にだして呟きながら、やうやつと腰をあげかけると、房子夫人はしみ〴〵うれしさうに、
「一寸お待ちになつて、お書齋に火の氣が無くつて寒いでせうから、一寸暖めて置きますから……」と、ついと立ち上つて、ストウヴをつけに行つて、また立ち戻つてくると、
「晩の御食事も家でなさるの？」と、立つたまゝ、ニコ〳〵訊ねた。
「うん。君がよかつたら、どこかへ一緒に食べに行かうか。」
「まあ、氣味がわるいほどですわねえ。」と、いふのを、
「もつと、氣味をわるがらせてやらうか。」と、宮川は立つて行つて、夫人の肩に手をかけて、ひき寄せると、額際に輕い接吻を與へたが、どうにも情熱といふものが、なかつた。
夫婦といふものは、どうしてかうも、情熱といふものが、無くなつてしまふのだらう。接吻な

どをすると、何か愛人ごつこでもしてゐるやうな空虚な氣がすると、宮川は考へた。
書齋へ入つてデスクの前に、腰をおろしはしたが、書類は大抵事務所の方へ置いてあるので、整理する仕事もなく、ぼんやりとストウヴの火を見つめながら、スリーキャツスルを二本、三本。硝子箱にいれてある古風な置時計も、友人から買はされた梅原龍三郎の女の繪も、ロダンの「鼻かけの男」のブロンズもみな眼になれたものばかり。ぼんやり何もしないでゐると、妙なさびしさが、身體の中に忍び込み、馬鹿さわぎをする友達の顔が、ぽつかり浮んで來て、あやしげな思ひ出が、妙な一人笑ひと共に浮び、クラブで友達と面白く遊んでゐるのを、切り上げて、久美子の所へ行く時などは、（あゝ億劫だ。何といふつまらない事をおれはしてゐるのだらう）と、面倒くさくも腹立たしくも思はれるが、かうして一日中家にゐると宣言してしまふと、行くべき所は、此處かしこと、樂しく眼前に浮んで來て、ヂツとして書齋で、日の暮を待つてゐることが、修道士の難行苦行のやうに感ぜられ、遊び好きの宮川としては、到底辛抱出來ないことだつた。
（家庭は平和である。しかし退屈である。こゝには、少しの刺戟もない。一生連れ添ふ女房だもの、疎略にして置いても、いつかは償ひが出來る）といふ、いつもの論理が首をもたげて、部屋の中が、うす暗くなる頃には「街へ！　街へ！」といふ要求が、猛然とわいてくるのであつた。

でも、今更事務所へ用事が出來たともいへず、觀念の眼を閉ぢてヂツと我慢してゐると、五時を少し廻つた頃、女中が、

「お電話でございます。」と、知らせて來た。

「誰から？」と、訊き返すと、

「矢崎樣からでございます。」と、遊び友達の名をいつたのでにはかに生々と、二階を降りて下の廊下の電話に出ると、

「大阪から前田が今日出て來たので、四五人で飯を食ふから、君もぜひやつて來ないか。」と、いふ誘ひであつた。二つ返事で、行くといひたいのを、夫人の手前、

「さうだね。」と、濁ると

「前田が、君にぜひ久しぶりで會ひたいといつてゐるんだよ。」と、重ねていふので、

「ぢや、都合で。」と、如何にも不承々々に承諾すると、

「都合でなんていはないで、必ず來たまへ。場所は木挽町の清田家だから。」と、いふ追究だつた。

「うん。」と、あいまいに電話を切つたが、渡りに舟とばかり、心は早くもその方へかたむき盡されて、廊下のはづれにチラと姿の見えた房子夫人に、

「おい！　前田が大阪から出て來たので、やつぱり、一寸出かけてくるよ。」と、いつた。

「お出かけ？」と、夫人は忽ち不平さうな顏つきをして近寄つて來た。

夫人にして見れば、この電話が豫定の電話らしく思はれ、朝からの御機嫌取りも、この電話で飛びださうための準備工作であつたやうな氣がし、良人からの御機嫌取りに有頂天になつてゐた自分が腹立たしく、氣取り氣もない佛頂面で、

「さう！　ぢや、一緒に御飯をたべるなんて、おつしやらなければいゝのに。本氣になつてゐたのに、つまらないわ。」

「だつて、仕樣がないぢやないか。前田が來たんだもの。」

「だつて、お約束があつたわけぢやないんですもの……」

「半年ぶりだもの、行かないといふわけにはいかないよ。」と、邪慳にいつてしまつた。

宮川は、夫人にすまないと思ひながらも、家にヂツとしてをられない自分の氣持なんか、說明しようにも出來ない事なので、男といふものは、どうしてかうも家庭から逃れたい〳〵と思ふものかなアと、自分でも情なく思ひながら、夫人がもはや何事もいはずに、差しだす長襦袢に手を通した。

もう、今朝からの一時和やかな氣分はたゝきつぶされて、夫人は明かに宮川を責めなじる不快な表情も露骨に、

「あゝ自動車を呼んで！」と、女中に命ずる聲も、まるで叱りつけるやうだつた。

だが、さうした不愉快を忍んで一歩外へ出れば、水を得て生きかへつた魚のやうに、潑剌と樂しく、自動車が、ゴーストップに止められるのさへ、時間の制限のある先でもないのに、いらいらと氣がもめるのであつた。

小鹿の如く

久滋と惠美子が、連れ立つて、美禰子の家から、歸つた時の事だつた。

久滋は、惠美子と共に、逢初橋の電車通で、自動車を待ちながら自分の傍に立つてゐる惠美子が、久滋が（送つてあげませう）といふのを待ち望んでゐるのではあるまいか、と思ひ、

「どちらの方面へお歸りですか。」と、訊ねた。

「澁谷！」

「遠いですね。お送りしませうか。」

「だつて、方角が違ふのでせう。」

「僕は虎の門ですけれど、澁谷から赤坂にもどる位、何でもありませんよ。」

「なら、いゝ事考へた。私が、久滋さんを途中で降してあげればいゝんでせう。赤坂へ廻る位、何でもないわ。あれ止めませう。」と、物をいひながら、白い手をあげて、通りかゝつた三十三年のフオードを止めた。

久滋は、惠美子の女學生らしい、明るい濶達な精神をよろこびながら、惠美子を先に、自動車に乘つた。

自動車に乘ると、久滋はやはり美禰子の事を考へてゐた。（會つてくれ）といふ彼女に對して、咄嗟の思案が出ず、（とにかく手紙をかく）といつて別れたが、美禰子のせまるやうな双眸が、眼の前にチラ〳〵して、それ以上會ひつゞけることが、急に不安になつて來た。

「久滋さん、お芝居に何時呼んで下さるの。」と、不意に惠美子に話しかけられて、

「あ、――それだ。」と、久滋はうつかり聲を立てゝしまつた。

「まあ、なあーに。」惠美子は、不思議さうに訊き返した。

「いや、つまらん事を考へてゐたのですよ。四五日のうちに、叔母さまの所へ切符を送りますから、御一しよにいらつしやい。」

「さうお、――きつとね。家のお母様とても舊式で、ちやんとした理由がないと、中々夜なんか外出させて下さらないの、だからお芝居なんか見たことないわ。でも、叔母さまと一しよならば行かれるの。うれしいわ。」と、うれしさうに笑ひ返して來た。

自動車は、神田から御所のお濠に沿うて走つてゐた。

「お家は虎の門の御近所？」

「虎の門アパートです。」

「何階？」

「第七天國です……！」

「ぢや、ジャネット・ゲイナアのやうな、可愛い方が、時々いらつしやるの……」

「は……。不幸にして、そんな人はまだゐませんよ。」と、久滋は答へたが、初對面でありながら、うちとけた、口の利き方をする惠美子の朗さが、彼の心の中にも、若々しい晴やかさを移し植ゑてゐた。

惠美子は、家へ歸るなり、母に呼ばれて、叔母の家での出來事を、細かく訊かれ、

「いくら、本鄕へ行つてゐたからといつて、遲くなりすぎましたよ。この頃、貴女の頭は、フラフラしてゐますよ。今日なんか、眞直ぐ學校から歸つて、勉强すべきだつたのです。定期試驗も、すぐですのに　今夜は早く寢て、明日は今日の償ひに、一日勉强しなさい！」と、嚴格に申し渡され、英語の格言集と聖書とを持たされ、寢部屋に追ひいれられてしまつた。こんな事は、しばしばある事で、そのためには少しも悲しくなかつたが、先刻まで久滋と一しよに居て樂しかつたが、獨りになると、凡てが忽ち悲しみにも似た記憶となつて、胸の中にひろがつて來て、ぢつとしてゐられないほど、惱ましかつた。

惠美子は、ベソをかきさうな顏になつて、靴下を取り、コルセットを脫ぎ、ワンピースの洋服を、獅子がしらのやうに、頭の上にたくしあげて、すつぽりと裸になつてしまふと、タオルの淸潔なパジヤマを着て、燈を消すと、冷々としてゐる寢臺の中に、きよらかな身體を横たへた。

眼を閉ぢると、ひらめくやうに、久滋の笑顏が浮んで來て、明日にでも思ひがけない所で、久滋にひよつくり逢ふことが出來たら、どんなにうれしいことだらう。學校の歸りに、お友達とわづかの間だけでもよいから、銀座を歩いて見ようかしら――すると、叔母が久滋と並んで歩いて

くるのと、バツタリぶつゝかるやうな想像が忽ち浮び上り、惠美子の胸はいよ〳〵息苦しくなつてくるのだつた。

彼女は、なか〳〵眠れさうにもないので、手を伸ばすと枕許の、小さいライト・スタンドの鎖を引いて、ほの明るさの中で、胸の上に聖書を開いた。ところが、その開いた所に、

（愛のおのづから起る時までは、殊更に喚起しかつ醒すなかれ。わが愛する者の聲きこゆ。視よ、山をとび、岡を躍りこえて來る。わが愛する者は獐の如く、また小鹿の如し。視よ、彼われらの壁のうしろに立ち、窓より覗き、格子より窺ふ。わが愛する者、われに語りて云ふ、わが佳耦よ、わが美しき者よ、起て出で來れ、視よ、冬すでに過ぎ、雨もやみて、早去りぬ。もろもろの花は地にあらはれ、鳥の囀る時、すでにいたり……）

惠美子は、パタリと本を閉ざし、ライトの鎖を引いた。何だか、自分の氣持がすつかり書かれてゐるやうな氣がして、いよ〳〵悲しくなつた。

（お母さんが聖書なんかこんなとき、讀ませるからいけないんだわ。聖書なんかで、私の氣持を落ちつけようとしたつて、だめだわ。お母さんのやり方つて、いつもかうなんだわ。私、いよいよ久滋さんの方へ、小鹿の如く飛んで行つてやるわ）と、惠美子は考へた。

T劇場の師走興行は、水谷八重子を加へた新派の連中で、だし物は月並なものばかりで、あまり面白くはなかつたが、久滋は惠美子との約束はあり、美禰子に手紙をだすといつたまゝ、そのまゝになつてゐるので、切符を送るついでに、手紙を書かうと思つたが、机に向ふと、（二人ぎりで會はう）といふ言葉を、どんな程度に解釋していゝか分らないし、從つてうつかり何か書けないといふ逃げ腰とで、つい延々になり、一週間も經つてから、やつと切符を送ることにした。そして、プログラムの外に、半切の原稿紙に、

先日は、御馳走さまでした。暇を作らうと思ひながら、一寸忙しい仕事がありましたので、お約束も果せず、切符の方も、遲くなりましたので、とにかく明後日の切符二枚お送りいたします。惠美子さまも、ぜひお誘ひ下さいませ。委細は、お眼にかゝつたとき申し上げます。

と、走り書にして、速達で出した。

當日、開場間際には、久滋も入口のところで、ウロ〳〵してゐたが、切符に當る座席も空なり、二人の姿もなか〳〵見つからないので、一時樂屋に歸り、第一幕の終つた幕間に、また座席をの

ぞいて見たが、まだ空のまゝだつた。
（美禰子さんは、僕が手紙を書かなかつたのを怒つたのかも知れん）と思ひながら、何か氣がかりで廊下をブラ〳〵歩いてゐると、婦人のトイレットの前で、今よひは和服で、すつかり大人びて見える惠美子が、此方が思はず、微笑みたくなるやうな愛らしい笑顔で、彼の前に立ちふさがつた。
「やあ！　叔母さんは。」
「こゝー」と、化粧室を指して、
「今日お母さまが、中々許して下さらないの。それで叔母さまに、わざ〳〵私の家まで來て頂いたの、だから、遲くなつたのよ。それに、叔母さま、とても御機嫌がわるいのよ。」と、可憐に眉がひそんだ。
「それに、まだ悲しい事があるのよ。試驗があるので、九時までには歸らなければならないの。」と、悲しさうにいつた。
「そりや、意味ないですね。」
「えゝ、ないわ。私、お芝居が閉場てから、久滋さんと銀座を歩いてお茶でも御馳走して頂かう

と思つてゐたのよ……」
「ぢや、八時頃まで御覽になつたら、銀座へ出て、お茶を飲んで……」
「でも、それぢや叔母さまに悪いわ。」
惠美子が、さういつた時、久滋は、自分の傍にぴつたり近寄つてゐる美禰子に、氣がついてあわてゝ挨拶した。
「やあ。いらつしやい！」
「今晩は。」と、美禰子はさういつたが、惠美子の（叔母さまに悪いわ）といふ最後の言葉だけを、耳にしたらしい美禰子の顏は、久滋がハツと思つたほど險しかつた。
にほふほど美しい、くすんだ紫の地に、ぼんやり白く淡く木蓮の花片の浮いたお召を着て、黑の紋無しの羽織に、さび朱に古代模樣の緞子の帶を締めた美禰子の姿は、ピチ〳〵した感じで、あたりに群がる女性の中に、一段と浮きだしてゐるやうだつた。
久滋は、やつぱり美しいなと感歎し、その險しい顏の表情から、何かある危險の迫つてゐるやうな氣がして、いふべき言葉を取り落して、ぼんやりしてゐた。
すぐ幕の揚がるベルが鳴りだした。

「この次ぎの幕間に、食事をなさいますか。それなら、席を取つて置きますから。」
「どうぞ。」美禰子は、探るやうなひとみで、久滋を見た。
「ぢや、この幕が終つたら、前の廊下へ來てゐますから。」さういつて、久滋は樂屋の方へ去つた。
叔母と姪と、座席に並んで芝居を見始めた。舞臺には、仕出らしい二三の人が、出てゐるだけだつた。
「惠美さん！　貴女、久滋さんと何かお約束したの？」と、美禰子は、小さい聲で訊いた。
「いゝえ。」
「何を話してゐたの」
「あたしが、試驗で早く歸らなければいけないといつたら……」
「あの人、何といつたの……」
「ぢや、八時頃こゝを出て、一しよに銀座を歩かうとおつしやつたの。」
「それから、どんなこと？」
「いやよ。叔母さん、一々覺えてなんか居ないわ。」と、惠美子は、叔母の追及を明かに煩はしさうに、彼女としては、珍しいほど、險しい調子でいつた。

「そんな大きい聲をしちや駄目よ。」
美禰子も、何となくとげ〳〵しくいつた。二人とも、何かいら〳〵した氣持だつた。
美禰子は、惠美子が、丁度自分が同じ年頃に、久滋に感じたやうな淡い戀心を久滋に寄せて居ることが、ハツキリしたやうな氣がした。久滋も、自分と、おつかなびつくりで、舊情を溫めて居るより、惠美子と戀愛までとは、行かなくても、にぼやかなほの〴〵した話をしてゐる方が、ずつと無事で樂しい事に違ひないのだと思ふと、獨り取り殘されてゐるやうな、うすら寒い思ひに、却つていら立つて來て、久滋にいはれゝば自分も困つてしまふ愛の言葉を、いふだけはいつてもらひたいといふやうな慾望が、胸の奥處に、とゞろ〳〵と鳴り波つてくるのだつた。
惠美子を、自分が久滋と會ふ折のダシに使ふつもりでゐたのに、まご〳〵してゐると、自分の方が久滋と惠美子の戀愛發展のオブザーヴアーになるやうな氣がして、彼女は氣が氣でなかつた。
三人で、食事をする時も、美禰子は何か樂しくない思ひで、いらだつてくる神經を、抑へることに努めてゐたが、惠美子は、叔母の思ひなどは、少しも氣にしない年の若さからくる自由さで、頻に久滋に話しかけて居た。
「もう一幕見たら、私歸つてもいゝ？　叔母さん。」

食事が濟みかけたとき、惠美子は默りがちであつた美禰子にいつた。
「惠美ちやんのわがまゝたらないわ。……私をわざ〳〵迎ひに行かせて……」と、もう明かに叱るやうな口調であつた。
「だつて、九時にお歸りつて、お母さまから、堅く申し渡されてゐるんですもの。」
「ぢや、今日なんか來なくつてもいゝぢやないの。」
「だつて、私久滋さんと、お茶でも飲んでおしやべりをしたかつたんだわ。」
惠美子は、もう露骨に、自分のしたい事を　主張するのだつた。美禰子は、少し憂鬱になつて、
「貴女が歸るのなら、私だつて歸るわ。だつて、貴女を送つて行つて、お母さんに手渡さなけりやいけないんですもの。あゝつまらない。」美禰子は、苦笑しながらいつた。
「ぢや、一幕見たら、お歸りになりますか。僕も、用事がありませんから、お伴して出ませう。」
と、久滋はごく自然にいつた。
その幕が終つて廊下へ出て見ると　久滋は外套を左の腕に抱へて待つてゐた。
美禰子達も、クロークで預けたコートなどを取りだして、外へ出たが、美禰子は、惠美子のためにひきまはされてゐるやうな氣がして、

（私だけ、もつと見て行くわ）と、いつて見ようかと思つたが、それもヒステリツクで、相手が年下の姪であるだけ、大人氣ない氣がした。
劇場を出て、銀座の方へ歩いた。美禰子が、機嫌がわるくなればなるほど、久滋は惠美子とばかり話してゐた。
美禰子は、久滋の心の動きの中心が、どこにあるのか、だん〳〵分らなくなつて來た。
街には、薄い夜霧がかゝつてゐて、赤や青のネオンが、うるみにじんで居るやうに見え、冬とは思へないほど、夜氣がゆるんでゐた。
「お茶でも飲みませうか。」と、久滋は、やつと美禰子に話しかけた。
「だつて、惠美ちやんは、急いでゐるんでせう。早く歸つた方がいゝわ。」美禰子は、こゝぞと意地わるをいつた。
「あら、お茶を飲む位いゝわ。だつて、まだ九時前ですもの。」
「勝手ね。まるで、叔母さんを引つぱり廻してゐるのね。」
「あらいゝわ。叔母さんは、久滋さんといつでも遊べるんでせう。私なんか、もういつお目にかかれるか分らないんですもの。ねえ、久滋さん！」

惠美子は、もう大膽に敵手らしくふるまつた。

火遊び

尾張町まで歩いて來て、久滋も惠美子も行きつけの、足の向き易いジヤーマン・ベイカリへはいつた。惠美子が無邪氣に、自分本位に振舞つて、メリンゲンといふお菓子に、オレンジエードを注文した。

「久滋さん、わたし學校でどんな仇名がついてゐるか教へて上げませうか。」

「さうですね。貴女なら、花の名前、さうですね、カーネーションとでもいつて居るのですか。」

「うゝん、違ふの。オレンジエードつて、仇名がついてゐるの。」

「なるほど、この味も貴女だなあ。」

「いやだあ、久滋さんまで、さう思ふの。みんなに、甘く思はれてゐるのね。私だつて、もつと大人びた味だつてあるつもりよ。でも、これ飲んでゐると、お腹の中まで、綺麗になるやうな氣がするわ。」と、いひながら、チラ〳〵と時計を氣にしてゐるのがいぢらしかつた。

「そんなにお母さんが、きびしいのですか。」

「さうよ。クリスチヤンのガリ〳〵屋さんですもの。それに、私お母さんの學校へ行つてゐるでせう。だからお母さんは私を模範生か何かにするつもりなんですもの。いやになつちまふわ。」

「御同情致しますよ。」

「ねえ、久滋さん今晩送つて下さるでせう。」

「貴女の若い叔母さんと、御一緒でしたら。」

「えゝ、叔母さんは、私をお母さんに引渡さなければいけないんですもの。」美禰子はすつかりクサツてゐた。

惠美子のために、自分の久滋に對する氣持が、だん〳〵研ぎすまされて行くのがいやだつたし、まだ小娘と思ひながらも、敵手に對するやうな嫉妬を感じさせられた。

小鹿のやうに敏捷な振舞、オレンジエードのやうに甘美な娘らしい性格、惠美子のよさを、久滋も今はハツキリ兩手の中に受け容れてゐるらしい……。

それでいゝではないか。所詮自分は、人妻であるし、家庭を破壞してまで、久滋と、何うならうと決心してゐるわけではないのだから、惠美子などを敵手として、惡あがきするなど、いかに

もみつともないし、こゝで眼をつむつてしまふ方がよいのだと思ひながら、しかし久滋をこのまま失つてしまつたら、また前のやうな刺激のない有夫の尼さんといつたやうな、寄りどころのない生活を續けなければならない。せめて、久滋のやうな思ひ出の戀人と、友人として交際ふ位の樂しみがあつてもいゝのではないかなどと思ふと、何となく胸がせまつて來て、今までは可愛い妹のやうに思つてゐた惠美子に、輕いながらも一味の憎惡が感ぜられ、惠美子を送り屆けた後、久滋と二人ぎりになる時が、待ち遠くいら〳〵とするのだつた。

「あゝ、大變々々、もう九時だわ。ぢやすみませんけど、送つて頂戴ね。」

惠美子が、あわてゝ立ち上つたので、三人は外へ出た。

自動車には、美禰子、惠美子、久滋といふ順に乘つてしまつたから、自然美禰子は二人の會話から離れ、澁谷までの時間を獨り、隨分長いやうに思ふのだつた。

車が、惠美子の家に近づくと、惠美子は久滋に、

「すみません。ありがたう。試驗がすみましたら、直ぐお休みなのよ。だから、また遊んで下さいね。」と、傍に叔母なきが如く快活にいつた。久滋も、ニコ〳〵と、

「ぜひ、どうぞ。」といつた。

美禰子は、自動車を二十間ばかり手前に止めさせて、惠美子を連れて、姉の家の門にはいり、内玄關の格子をあけて迎へた女中に、

「私、遲いからすぐ失禮すると、奥さんにいつて下さいね。」と、いふと、惠美子が、

「叔母さん、一寸上つて行かない？」と、傍からいふので、（久滋さんが待つてゐるぢやないの）といふ風に、眼で知らせると、

「あ、さうか。」と、さすがに、少してれながら、

「ぢや、さやうなら。」と、足音高く、かけるやうに奥へはいつてしまつた。

やつぱり、オレンジエードと仇名のつくだけあつて、甘い子供なのだと思ふと、それを相手にしてやきもきした自分が馬鹿々々しく思はれながら、車の在るところへ歸つて見ると、久滋は車の中で、煙草に火をつけてゐた。

「お待たせしました」と、いつて車に乘つたが、エンジンをかけたまゝにしてあつた運轉手に、

「次はどちらでせうか？」と、訊かれて、美禰子が返事に迷つてゐると、久滋は更に、

「本郷へお送りしませうか。」と、あつさりいつた。

今まで辛抱したのに、このまゝあつけなく送られて歸るなど、凡そ何のための今宵ぞと思ふと、

美禰子は、急に情なくなつて、物をいふ氣も起らず、一時に疲れが出たやうに、ガツカリしてしまつた。

「とにかく電車通へ！」

久滋は、さすがに氣を利かして　本郷へとはいはなかつた。車が、一町ばかり走つた頃、

「つまらなかつたわ、今日。」と、美禰子は、到頭本音を吐いてしまつた。

「なぜです？」

「だつて、貴君とちつともお話が出來なかつたんですもの。」

久滋を見た美禰子の眸には、人妻にはふさはしくない嬌笑がうかんでゐた。

澁谷の電車通へ出る迄、二人とも默つてゐたが、電車通へ來ると、運轉手に訊かれる前に、行先を定めなければならなかつた。

「まだ九時四十分だわ。」

美禰子は、ダイヤの粒石を周圍にちりばめてある、可愛い腕時計を見ながらいつた。

美禰子の言葉にかくされてゐる意味を、それと察したやうに、久滋は、

「ぢや、いつかのやうに、神樂坂へ寄つてお茶でも飲みませうか。」と、いつた。

「さう！　さうして下さる。」美禰子は、自分でも氣がつくほど、下手に出てゐた。

「神樂坂へ！」

久滋は、運轉手にいつた。運轉手は、うなづくと、外苑の暗の方へ、ハンドルを切つた。

いひたいことは、美禰子の胸に、溢れるほどに、たまつてゐたが、みんな大きい聲ではいへないデリケイトな話ばかりだつたので　美禰子は久滋に、かるく身を寄せただけで、默つてゐた。

久滋も、煙草の煙が、車内に立ち罩めるのを氣にして、扉の上の窓を開けたり、またそれを心持ち閉めたりしながら、口をきかなかつた。

神樂坂下で、車を止めると、二人は連れ立つて坂を登つた。冬の夜ではあるが、まだ十時前なので街は可なり賑やかだつた。

「紅屋になさいますか。」久滋は歩きながら訊いた。

「私、果物を食べたいの。田原屋がいゝわ。」と、いつて二三間歩いてから、「下の田原屋にしませう。靜かでいゝから。」と、美禰子はつけ加へた。

果物を置き並べた臺の間を、すりぬけるやうに通つて、二人は奥へはいつた。

硝子戸が多く、三和土の上に椅子を置いてある室は、寒々としてゐたが、お客は私立大學の講

師らしい男が、隅の卓子に向ひ合つて腰掛けてゐるだけだつた。

二人は、小さいストウヴに近い卓子に腰をおろして、美禰子の好みで、紅茶とメロンとを、注文した。

美禰子は、華奢な小さい手で、スプーンを巧に動かしながら、メロンを食べ了ると、ぢつと久滋の顔を、まともに見詰めながらいつた。

「久滋さん、私の事一體どう思つていらつしやるの？」

久滋は、先刻からの美禰子の態度で、この程度の難問は、豫期してゐたらしく、別にあわてはしなかつたが、さすがに飲みかけてゐた紅茶のコップを下に置くと、

「さあ、何と思つてゐたら、一番いゝんでせうか。それは、僕一人の氣持で定まることではないと思ひますが……」と、反問した。久滋の反問を受けると、美禰子はすぐ鸚鵡返しに、

「でも、まづ貴君の氣持をお訊きしたいのよ。」と、いつた。

「そんな事定まつてゐたんぢやありませんか。よいお友達になること。……貴女の趣味のお友達になること、映畫や、文學のお話の相手になること、さういふお約束ぢやなかつたのですか。」久滋は、本心は知らず、眞面目くさつて、冷靜にいつた。

「あゝさう？　たしかに、さうだつたわねえ。それでよかつた筈だつたのね。……ぢや訊くわ、貴君惠美子をどう思つていらつしやるの。」

「あはゝゝゝ。惠美子さんなんか、どうも思つて居るもんですか、驚いたなあ。あはゝゝゝ。」久滋は、快活に笑ひつゞけた。

「さう。だつて、貴君は、惠美子と話してゐる時の方が、私と話してゐるときより、樂しさうね。今日なんか、惠美子と話す、五分の一も私と話して下さらないんですもの、私まるで貴君と惠美子とのオブザーヴアーか、何かのやうな氣がしたわ。」

「それは、淺墓な貴女の御觀察ですよ。その人の前で、自由に口が利けなくなると愛してゐる證據だ、とさへいふぢやありませんか。」

「いやだわ。そんな嬉しがらせなんかおつしやつて、貴君も人がわるくなつたわ。私、さう思ふんですわ。惠美子なんか私よりずーつと時代が新しいわねえ。こだはらないで勇敢で、自分本位で、私と貴君とがどんな關係で居るかなんていふことは全然問題にしないんですものね。今に、三人で會つてゐると、貴君はすつかり、あの子にさらつて行かれさうな氣がするわ。」

「御冗談でせう！」と、久滋は一口にいひすてたが、美禰子にいはれるまでもなく、さうした不

安は、彼の心にうごいてゐないでもなかつた。
「叔母らしく、昔の戀人を姪に讓るなんて、どう？」
「そんなに、いゝ加減に讓られるほど、僕は個性のない人間ではありませんよ。それに、第一個性のない戀愛なんかには、飽き〳〵しましたよ。」久滋の瞳は、舊い情熱が忽ちよみがへつたやうに輝いた。
「いふだけの事はおつしやるのね。」美爾子の顏も、妖艶といつてよいほど、なまめかしく美しく見えた。
「いふだけぢやありませんよ。」
「さう。ぢやどういふ事になるのでせうかしら……でも、私も駄目ね。惠美子と、貴君とが親しく話をしてゐるのを見ると、取り亂すなんて……」
それは、さういふ言方による求愛の言葉でなくして、何であらう。久滋の心には、あらゆるものを燒きつくすやうな情熱が、迸しりわいた。
「明日、お暇がありますか。」しばらくしてから、久滋はいきなり訊いた。
「いつだつてありますわ。」美爾子も、新しい興奮に、胸を躍らせながら答へた。

「でしたら、横濱へフランスの、M・Mの汽船が來てゐるんですけれども、一緒に見物にいらつしやいませんか。」と、久滋はごく淡々として話した。
「さうお――お供させて頂かうかしら……面白いの？」
「たいして面白くはありませんが、會社の自慢の客船なので、見物に來てくれといふ招待狀をよこすのですよ。船の中でいゝ香水が、安く買へるかも知れませんよ。」
「さう、行つて見たいわ。」
「ついでに、海岸通から地藏坂へ――御存じですか、あの外人墓地のあるところですよ――あの横濱獨特の住宅地をドライヴするのも惡くはありませんよ。」
「さう、嬉しいわ。」美爾子は、自分ながら恥しいほど、嬉々となつて、久滋を見やると、
「ぢや、どこで待ち合せませうか。銀座の千疋屋がいゝでせう。午後一時から半までに、ね。ようございますか。」
「えゝ。」と深くうなづきながら、久滋が自分を連れだして、横濱邊にまで、遊びに行くなどといふことは、久滋の自分に對する氣持が、それだけ深くなつてゐることを示すもので、惠美子の事など問題でないのだと思ふと、忽ち心が明るんでくるのだつた。

良人の事も、明日横濱へ行つてから、どうなるかなどといふことは、少しも、頭に浮んで來なかつた。たゞ一日、久滋と一緒に居られるといふ新しい喜びに、美禰子の心は傾きつくしてゐた。

十一時近くなつて、二人は田原屋を出た。肴町の方へ歩きながら、久滋がいつた。

「今日は、火事がなかつたから、ゆつくりお話が出來ましたね。」

「いやな久滋さん。もう火事があつたつて、私この前のやうには、あわてないわ。そんな皮肉をおつしやるのなら、私貴君をアパートまで送つて行つてあげるわよ。」

「いや、僕がお送りしませう。」

「いやだわ。瀧山は、何んともいはなくつても、近所の人に見られるのがいやだから、私が送つて行つてあげるわ。」

「順路ぢやありませんし、レディに送られるといふ法はありませんよ。ぢや本郷三丁目まで送つて行つて、あすこで僕は降りませう。」

「さう。ぢや、さうして頂戴！」

美禰子は、長い單調な生活の後に、始めて感じる身を燒くやうな興奮の裡に、五分でも十分でも長くゐたいやうな氣がした。

自動車に乘つたとき、二人の手はどちらからともなく、ベツクミラアを氣にするやうな位置で、握り合はされてゐた。

出來事

家の前で、圓タクを止めて、潛門を入つて、小砂利の上を踏むとき、美禰子は、始めて人妻としての反省で、恐ろしい苛責が心のうちに襲つて來た。今宵こそ始めてなすべからざる事をなしたやうに思へたし、越すべからざる埒を越したやうに思つた。

今迄は良人にすまない事は、何一つしてゐるとは思はなかつたが、今宵は餘計な事を二つした。橫濱へ遊びに行く約束は、不謹愼であつたし、手を握り合つたことは、それだけで、非難されても仕方のない事だつた。

しかし、こんな刺激のない、退屈な生活をしてゐるんだもの、あれ以上に進まなければ、少し危險性を伴つた火遊び位しても、許してもらへるのではないかしら。さう心で辯解しながらも、今直ぐには良人の顏を見ることが怖ろしいやうな氣がして、良人がまだ歸つて居てくれないか、

でなかつたらとつくに歸つて寢てしまつてゐてくれたら、どんなに氣安いだらうと思つた。
美禰子の歸つたのを知つて、出迎へた女中にいつになく緊張して、
「旦那さまは？」と、訊いた。
「先刻、お歸りでございます。」
「さう。もう、お休みになつた？」
「いゝえ。まだお居間にいらつしやるやうでございます。」
「さう。」と、美禰子は、さりげなくいつたが、しかし今日ばかりは、良人と顏を合はせるのが、何となく不安で、襖を開けながら、
「たゞ今。」と、聲をかけながら、はいつたが、ふと見ると、良人は十疊の居間の片隅にこさへてある炬燵に洋服のまゝ當つて、顏をやぐらの上にのせたまゝ、スヤ〳〵と寢いつてゐた。
恐らく、美禰子を待つてゐるうちに、寢いつてしまつたのであらう。
「まあ！」
美禰子は、急に氣安い氣持になつて、良人の傍に居ざり寄ると、
「もし、もし、こんな所にお休みになりますと、お風邪を召しますわ。もし、あなた！」と、二

三度搖つたが、晝の疲れに起きればこそ、
「うむ〳〵。」と、うなづくだけで、容易に眼を開けようとはしないのだつた。
「お休みになるのなら、お床の中へお入り遊ばせよ。もし、もし。」
「うむ。」頷きながら、良人の眼は開かうとせず、美禰子が上衣を脱がさうとすると、可愛い坊やのやうに右によろけ左によろけてゐたが、やつと眼をかすかにあけると、
「あゝ眠い！　眠い！」と呟やいた。
美禰子は、顏を近々とさし寄せて、チョツキを脱がし、ネクタイをほどいて、ズボンつりをはづして、ワイシャツを脱がせ、次ぎの間から、寢衣を取つて來て、着せてやつたが、良人はまだそのまゝの姿勢で、動かうとはしなかつた。
美禰子も冷え切つた手足を、炬燵の中にそつと入れて、そのまゝ暫く、ヂツとしてゐると、家の中が、しいんと靜かで悲しくなつてくるのだつた。折から、十一時半を知らす時計が、たつた一つわびしく鳴つた。
良人は、かほど迄に、自分に安心し切つてゐるのか。良人の心は、子供の心か、でなかつたら、神の心である。陰も曇りも宿さず、いつも澄み切つてゐる。こんな良人を欺くのは、いやしむべ

き事であり、なし得ないことである。やつぱり中止にしようか。明日の約束は！

美禰子は、さう思ふと、さえ〳〵と、

「あなた、お寢間へいらつしやいません。ね、ズボンをお脱ぎ遊ばして、さあー」と、いひながら上半身を持ち上げようとすると、

「ど、どうしたのさ。自分で脱ぐよ。」

「お眠いんでせう。だから、轉寢をなさらないで、本式にお休みなさいませよ。」

「うん、うん、疲れちやつた。今日はドイツの雜誌へ寄稿する論文をかいたので。」と、いひながら、兩眼は閉ぢたまゝである。

美禰子は、抱くやうにして、良人を立ち上らせると、良人はズボンを足で踏み脱がうとするのを手傳つて脱がせると、

「あーあ、あーあ。」と、欠伸と溜息を、ゴチヤ〳〵に、やゝ青ぶくれた顏をしかめて、大きな伸をすると、細帶をつかんで、やつと立ち上つた。

「靴下は——」

「もう、いゝよ。」と、子供のやうにニムマリ笑つて見せるのを、

「いけませんわ。靴下は、お脱ぎにならないと、持がとても、悪いんですもの。」と、足にすがるやうにして、靴下止をはづしてやつた。まだ、左の靴下は、脱げないまゝ、次ぎの部屋へ行かうとするので、

「貴君！」と、呼び返すと、やつと敷居に、靴下をすりつけるやうにして脱いで寢室へはいると、ドタリと横になる音がした。美禰子は、自分が着換をする前、一寸炬燵に當つてから、と思つて手足をいれてゐると、三四分と經たないうちに、もう鼾の聲がきこえて來た。

結婚以來、叱られたことも一度もない。疑はれた事も、曾てない。愛してゐてくれる事は分つてゐるのだが、茫漠として、捉へどころのない良人の事を、今更のやうに考へさせられた。

「美禰子、美禰子、おい、美禰子。」

枕元で、さう呼ばれて、美禰子は薄眼をあけた。

昨夜、瀧山はあんなに眠がつてゐたのに、今朝はとつくに起きたと見え、もうすつかり洋服に着替へて、枕元に立つてゐた。

美禰子は、良人を見ると、（一體、もうそんな時間かしら）と、あわてゝ上半身を起すと、

「いゝよ、いゝよ。寢て居てもいゝよ。僕出かけるよ。」

「すみません。何時ですの。」
「もう九時近くだらう。」
美爾子は、昨夜良人のこと、久滋のことなど、とつおいつ思案しながら、二時の鳴るのを聞いてから、やつと眠つたので、寢すごしてしまつたのである。
一寸の間に、胸元や裾前を、きちんと搔き合せて、瀧山に並んで立つと、
「私、今日もちよつと、出かけますけれど……晩少し遲くなるかも知れませんの。」
「うむ。音樂會……」
そのまゝ肯いても、――その日音樂會があるかどうかなど一切無關心な瀧山であるし、歸つて來ても、面白かつたとも訊くわけでもないから――かまはないのであるが、さすがに美爾子は、一寸顏をそらしながら、
「いゝえ」と、いつた。
「僕は、御夕飯に歸らないから、遲くてもいゝよ。今日は、寒いから、風邪を引かないやうに、氣をつけなさい。」と、いひながら、早くも帽子を被ぶり玄關の方へ歩み去らうとする。
「一寸、横濱へお友達と……」

「うむ。うむ。」と、横濱だらうが、何處だらうが、一切かまはないやうな、面倒臭さうな返事をしながら、玄關の方へ急いだ。
もう美爾子の表情には、ためらひの色も消え、かすかな微笑さへ浮んでゐた。
寢衣のまゝ良人を送りだして、女中にお風呂を炊くやうに命じ、ぼんやり茶の間の火鉢に手をかざしてゐたが、良人の心は、常に九分まで研究室に行つてゐるのだ。自分のことなんか、家を一歩出れば、忘れてしまつてゐるのだ。自分を妻として、愛してゐるよりも、母か妹かのやうに思つてゐるのだ。あの寛やかさは、肉親に對する愛情である。
ほんの少しでもいゝから、自分を警戒してくれたら。昨夜でも一言でもいゝから、出先をでも訊き質してくれたら。これではまるで、自分の心といふものに、全然無關心である。これなら、私がどんな事をしようと、良人にさへ迷惑をかけなければ、良人をその渦中にまき込まなければ――良人に對する自分の態度をさへ變へなければ、それでいゝのだとさへ美爾子は考へた。
十時半。湯上りの柔肌には、お化粧がたくみに、よくのびた。
お初着の、焦茶色に黄色の端切を使つたクレープ・デシンのアフターヌーンを着て、姿見の前に立つと、單純平凡で無趣味な――女の美しさや着物の好みなど絶對に分らない瀧山が、自分を

獨占するなど、今まで分不相應な幸福を味つてゐたのだとさへ、思ひあがつてゐた。

午後一時頃、銀座の干疋屋へ行くと、もう先に久滋が來て待つてゐた。

「私の方が早いつもりでしたのに、貴方の方が、先でしたのね。お待たせしてすみません。」と、いつて微笑しながら、さし向ひの席に着く美爾子を、久滋は何となくてれ臭さうに、見あげながら、

「僕用事がなかつたので、こゝに來てぼんやり、人通を眺めて居たのですが——まだ十分ばかりしか經ちません——貴女何か召し上りますか。それとも向うで……」

「えゝ。彼方へ行つてから、船でいたゞければ船で。でなかつたら、ニユウ・グランドでも……」

「さう、その方がいゝでせうね。ぢや、すぐ出かけませうか。」と、久滋はいふと、給仕の少女を呼んで、勘定をすませると、外へ出た。

外は、風は寒かつたが、うらゝかな日和であつた。

新橋の方へ、わづかに歩いて、銀座パレスのわきで、客待ちをしてゐるタクシーの中から、新しいデ・ソートを選みだすと、まづ美爾子をすゝめて乘せた。

「横濱迄——向うで、待つてもらふとして、一時間二圓位の割で拂へばいゝだらう。」

久滋は、乘つてから運轉手にいつた。

帽子から、オーバ・コート、下の洋服も、すべて同じ色の濃い茶色でリウとした久滋の風采は、美爾子と共に水際立つて、よく似合の若夫婦のやうに見えた。

昨夜の甘美な別れが、ほのかな尾を引いて、二人とも、まだ美爾子の娘時代の、たのしい逢瀬のやうに、心がのびゝと明るくなつてゐた。

大森、蒲田、六郷の橋、晴れた青空の下に、キラ〳〵輝いてゐる田園の風物も眼にさわやかに、デ・ソートは、波乘りをしてゐるやうに、二人の身體を搖りあげ、搖りおろして、坦々たる國道を走つてゐた。

「僕は、再び貴女の力に、征服されたといふ形ですか。かうしてゐると、昔のことがいろ〳〵思ひだされて來ますね。」

「えゝ。私は、後悔してゐますの。」

「さう。貴女は、後悔すべきですよ。貴女がいけなかつたのですから……」

久滋に、さうハツキリいはれると、美爾子は、悲しくなつて默つてしまつた。

「寒くはありませんか。」と、久滋は、あたかも自分の物のやうに、やさしく美禰子をいたはつた。

生麥から、車はいよ〳〵横濱の街へ入つた。

棧橋の近くまで、車が入るのを美禰子が少し歩いて見ようといひだしたので、少し手前で車を降りて、二人は並んで税關の方へ歩きだした。

何といつても、十二月であるから、海の風は膚を嚙んだ。波のうねりは、鑛物のやうに冷たく重く、日に光りながら、ジヤブリ〳〵と汽船の巨體を嘗めてゐた。

「相當立派なものですなあ。」と、クリーム色に塗られた船體、赤く塗られた船首や、船室の形の變つた窓などから、あたりに溢れて居る異國的感じに、二人とも晴々となり、久滋は美禰子を後にして、梯子を昇つて行くと、少しばかり出來るフランス語で、ボーイに案内を頼み、デツキに出てから理髪所のある方に降りて、そこで美禰子は化粧品とハンカチーフを買つた。

それから無遠慮に、船客にでもなつたやうな氣持で、美しいサロンでしばらく休憩してから、食堂に行きボーイに輕い食事を命じ、フランス船自慢の葡萄酒を注文した。

窓には空の青、海の青だけしか見えず、贅澤で清潔な食堂に、白人のボーイ、とても横濱に居るといふ感じはなかつた。

こゝが、どこか外國の港であり、しかもこんな悠々とした氣持で、久滋と二人で食事をして居られるのだつたらと、美禰子は思ひながら、フオークを動かしてゐた。

久滋とても同じ思ひで、冗談のやうに（この船が、このまゝ動きだして、フランスへでも行つてくれゝばいゝなあ）といはうかと思つた。しかし、そんな事をいへば、たとひ冗談らしくいつても、（瀧山氏から貴女を奪つてもいゝか）といふ、意味深い謎ともなり、忽ち何ういふ風に發展して行くかわからないので、久滋は口にだすのをよしてしまつた。

萬葉集にある、

人もなき國もあらぬか吾妹子を携ひゆきてたぐひてをらむ

といふ歌が不意に喉元まで、こみ上て來て、「下らん〳〵」と、彼は自らを制するのだつた。

お互のそんな風な沈默は決して、不自然でないのみか、不思議な感度のあるもので、瞳を通じ微笑を通じて、心が互に相寄つて行くものである。

だから、船を降りて待たしてあつた自動車に乘り、海岸通を地藏坂まで行き、坂の上で車を捨てゝ、ぶら〳〵歩きだすまで、二人はまだ物をいはなかつた。何の翳もなく、相愛してゐる若者達のやうに、お互に樂しげな表情をしてゐたが、どちらかゞ、口火を切つて、腹の底をいひ合へ

ば、忽ち苦しまなければならないやうな性質のものだつた。
「久滋さん、何だつて默つていらつしやるの？」
「貴女こそ、御自分のことは、何にもおつしやらないで、僕ばかりに何かいはせようとなさる。慾張りで、贅澤ですよ。」
「さうかも知れないわ。でも、さうだつたらいけませんの。」媚のある返事がいとしかつた。
「いけなくはないけれど、ずるいや。」と、子供のやうに、肩の圓みで久滋は、美爾子の身體を押した。
左手に小さい谷を隔てゝ、フランス領事館がある。途の兩側に植ゑられた櫻の若木が、寒さうだつた。
坂を上つて行つた左側の建物に、天氣豫報の、風に千切れた旗が出てゐる。白の四角（明日も晴）。
きよらかに靜かな街である。久滋は煙草に火をつけて、歩調をゆるやかにした。
外人墓地の白の十字架の形をした碑、圓形の墓石。さわやかに晴々とした靜寂。鐵柵によつて、二人は暫し立ち止まつた。

墓石には、それ〴〵愛の記念とか、愛の記憶とかいふ言葉が刻まれてゐるが、その墓の一つに、生々とした薔薇の花が飾られてゐるのを見ると、その花やかさが、かうした場所では、一層しんと周圍の寂しさを深めるものである。
墓の下の谷、谷を隔てゝほのかに見える海。そこに、先刻乘つてゐたフランス汽船があざやかな變物のやうな姿を浮べてゐる。
「佳い所でせう。僕は、時々獨りで、こゝへやつて來ますよ。」
「まあ！　お獨りで——それは、どうだか怪しいものですわ。」
「ぢや、女性をでも連れてくるといふのですか。こんな景色の佳い所へ女を連れて來て、この景色の醸しだすリリシズムで、相手をしんみりさせて、その效果を狙はうなんて、そんな意識的な戀愛なんかした事はありませんよ。今日は、特別です。」
「特別！」
「えゝ特別に、淡々として貴女にこゝの珍しい空氣を吸はせようと思つただけ……」
「意地の惡いことを、仰言るのね。」
「だつて、さうぢやありませんか。今頃、美爾子さんをしんみりさせても、手遲れなんだから、

僕たるもの苦しくても、淡々とせざるを得んでせう。」
「私が、しんみりとしたら、どうなりますの。」
「だから、お互にあんまり、しんみりとしないやうに、お喋りをしようぢやありませんか。」
久滋は、氣輕くいつて、また歩きだした。
舊い教會堂、垣の低い綺麗な洋館がいくつも續いてゐる。フエリス女學校のある片側には、兎でも居さうな原が、所々に在つて、海が青々と眺められる。
久滋は、コツ〳〵と靴音を刻みながら、
「ほとんど、外人ばかり住んでゐる街ですから、こんなに清潔な豐かな感じがするのですけれど、我々日本人には、散歩はしたいけれど、住んで見ようとは思ひませんね。」
「さうお。私は住んで見たいと思ひますわ。高臺で、氣持がいゝぢやありませんか。」
「それぢや、瀧山さんにお話して、こゝに別莊をお建てになるんですな。」
「ひどい方、今瀧山の事なんか、おつしやつて！　意地惡よ……少し、寒いわ。」と、美禰子は、長い睫毛の中に媚をたゝへて、久滋に少し身を寄せた。
「寒い？」と、久滋は不安さうに訊きかへして、人通りも無い街だし、引きよせて抱きかゝへて

しまひたいのを、グッとこらへながら、横濱へなんか來るのではなかつた。こゝは曲者だ――もう切りあげなければ――と思つた。
美禰子の瞳が、今日ほど理智的な光を失ひ、たゞ情熱だけで輝いてゐる事はなかつた。
久滋と正面に向ひ合つたら、美禰子はそのまゝ花の崩れるやうに、彼の胸の中に落ちこんでくるに違ひないといふ感じがした。
寒いといふ美禰子を、久滋は地藏坂のはづれにある植木園の溫室の中へ連れて來た。
廣い溫室の硝子戸は、湯氣で曇つてゐる。
「そのまゝでいらつしやると、出てから風邪を引いてしまひますよ。外套を脱いでいらつしやい。」
美禰子は、その細い注意をうれしく、輕やかなアフターヌーンだけになると、青々と葉を繁らせてゐる熱帶植物の中に潛つて行つた。
「これは、何て樹でせう。」
「ケンシス。」
「これは……」

「何といつたか忘れた。こゝの男に訊いて御覽なさい！」
「いゝの。貴君が御存じでないなら、私も知らないで置くわ。」
ノビウム、フリジヤ、カーネーション。葵、薔薇。丁度腰の高さの臺の上に、限りもなく並べられた鉢の間を、クル〳〵と、時々、頰を寄せて花の匂を嗅ぎながら、久滋に心から樂しげな微笑を送つてよこす美禰子の振舞に、久滋はうつとりと我を忘れてゐた。硝子戸に近寄つて行つて、その曇りをふき、
「御覽なさい。彼處に見えるのが根岸の海ですよ。あの突き出た丘に競馬場があるんですよ。」
と、美禰子を招けば、近々と顏をさし寄せてきて眺めながら、そつと久滋の肩にかけた手はあやしく震へ、つく呼吸さへ艶やかにはずんでゐた。
暮近く、そこには人影はなかつた。どちらかの、どんな身動きでも、二人を火のやうな抱擁へ誘つたであらう。だが、二人とも紙一重のところで、踏み止まることが、もつと刺激的であることを知つてゐた。
植木園で、紫の細い花のびつしりと咲いた、ユリカの枝を二枝ばかり買つて外へ出ると、もうすつかり夕暮になつてゐた。

人通りの少い街のわびしさは、一層寂しさや寒さを感じさせるのだつた。
「どうなさいます。横濱で支那料理でも召し上りますか。それとも、東京へ歸つて。その方が落着くでせう。」
「東京へ歸つて、どつか落着いたところで……」と、美禰子はいつた。
「ぢや、車に乘りませう。」と、二人は自動車の方へ歩いた。
ユリカの花の中に、頤を半埋めて、車室の隅にひそやかに腰かけてゐる美禰子のやさしさに、久滋も今は、彼女が人妻であることを忘れかけてゐた。
日が暮れてから、寒さは急にきびしく。運轉臺の横窓も閉めさせたが、スピードが加はる毎に、冷氣が身に浸みて來る感じだつた。二人は、ぴつたりと寄り添つてゐた。
車内の薄明りに、美禰子の顏が別して美しく思はれて、久滋はだん〳〵なやましく、口數が少くなつた。
美禰子も、あまり話さず、自動車の窓を、しきりなく去來する兩側の街の燈を、うつゝなく眺めてゐた。
頭光の照す以外は、國道は暗く事ありげに光つてゐて、あわたゞしい宵暗だつた。

すれ違ふ自動車の光で、久滋の顔が時々青白くパッと輝いた。二人は、昨夜と同じやうに、手を握り合つてゐた。

美禰子は、今日は樂しかつたと思ひ、これからも樂しいであらうと思つてゐた。

「貴君は、レコードを澤山持つてゐらつしやるんでせう？」と、美禰子が訊いた。

「それは、貴女の方が持つてゐらつしやいますよ。僕は、ブランスウヰツクのエレクトロラを買つてあるんですが、レコードは、ベトーヴエンは、二三組しかないし、バツハ、ドビユシイなど、五六枚つゞきの組曲が十組位ありますかな。その他は、ジヤズが少し……」

「聽かして頂けるかしら？」

「今夜ですか。——どうぞ、しかし僕の部屋は亂雜で……」

美禰子は、久滋の部屋を見たかつたし、持つてゐるユリカの枝を久滋の部屋に飾りたかつた。食事をすましたら、久滋のアパートへ寄つて——きつと、亂雜だなどといつても凝り屋なんだから、書棚、長椅子などにも、この人の趣味が出てゐるに違ひない、壁には、どんな繪をかけてあるだらうか。美禰子は、久滋を隣に置きながら、その部屋のあたゝかい空氣と、その部屋で二人落ちついてから……の幾情景を空想してゐた。

車は、四十哩以上の速力を出してゐた。

先刻渡つた橋は、鶴見橋だらう。こゝは川崎か蒲田か、六郷の橋は渡つてしまつたかしらと、いつまでも同じやうな街道の左右を交互に見廻してゐる時、左の人道から十二三の女の子が、つと走り出して來た。

「あぶない！」と、心に思つた刹那に、眼の前にその子の着てゐる着物の模樣までが、鮮かに浮み上つた。

運轉手の肩が、ハンドルにしがみついた。自動車は、右に往來の眞中へグッと急カーヴした。

美禰子は、その瞬間、もつと恐ろしいものを見た。それは怪物のやうに双眸を輝かした巨きいトラックが、彼女に乘りかゝるやうに突進して來た。

「危い！　美禰子さん！」と、ひきちぎれるやうに久滋が叫んで、彼女をかばはうとしたが、既に遲く、パリ〳〵といふ硝子の裂ける音がして、急激な震動で、身體が毬のやうに飛び上ると、どこかへ打ちつけられ、美禰子は氣を失つてしまつた。

人間以上

レコードをかけかへてゐる久滋の姿。チエリイの灰がズボンの膝に飛び散つてゐる良人の姿。

久滋の靴の音。フランス汽船の梯子。植木園で見た花のいろ〳〵。花のにほひ。

美禰子の意識が漸く歸つて來たのであるが、時も所も、夢か現かも、分ちがたかつた。

彼女はウツスラと眼を開けて見ると、自分の顔の直ぐ上に、ニムマリと子供のやうに笑つてゐる瀧山を見出して、自分は自分の家の寢床に寢てゐるのだらうかと、瞬間頭の中で、思考が混迷してしまつた。

「もう、大丈夫だよ。一寸氣絶しただけなんだよ。どこも怪我はしてゐないんだよ。」

瀧山にさういはれると、彼女の頭の一角が、みる〳〵ハツキリ冴え返つて來て、今日一日の事が思ひ返され、恐れと恥とで、身體中の血が、一散に頭の方へさし上つてくるのを感じた。

（久滋は？　久滋は何うしたのであらう！）

美禰子は、不安な瞳を、良人から身の廻りに移し始めた。

紛もなく病院の一室である。自分は、ベッドの上に寢てゐる。傍の椅子に、瀧山は、ホツと安心したといつたやうな欣ばしさうな微笑をたゝへて腰かけてゐる。

（久滋は？）

美禰子は、物問ひたげに、惡戯をした子供のやうに、おど〳〵した瞳を良人に向けると、

（あのう……）

と、聲を出さうとしたが、聲は嗄れて、物をいはうとした刹那、急に胸の痛さを感じた。

瀧山は、美禰子の何を訊かんとしたかを察した如く、

「お連は……久滋君といつたかね。可なり怪我をしたが、生命には萬々別條ないから安心しなさい。」

久滋君といひながらも、恨みも疑ひもはさまない、ふだんと變らないやさしい言葉であつた。

美禰子は、救はれたやうに思ひながら、

「こゝどこですの？」と、訊いた。

「京濱國道の共立S病院だよ。川崎だよ。物をいふと、胸が痛むだらう。ヂツとして居なさいよ。わしは、一寸お連の容態を見てくる。向うさんでも、君の事を心配してゐるらしいから、氣がつ

いた事を知らせてくる。」と、相變らず、背を猫のやうにかゞめて、落着いた歩調で、出て行つた。

ひとりになると、さま〳〵な想念が、彼女を苦しめ始めた。

瀧山は、一體今日の出來事を、何と解釋してゐるだらう。恐らく何とも思つてゐないらしい。一二度診察した事のある久滋を覺えてゐるかどうか。それは覺えてゐるかも知れないが、その青年と自分が、同じ車に乘つて遭難したことを何と思つてゐるのだらうか。

それも、恐らくは何とも思つてゐないらしいだけに、美禰子の心は却つて、暗く恥に震へだした。

良人は、二十分ばかりして部屋へ歸つてくると、

「いま、あの人の身體を診て思ひだしたよ。久滋さんつて人は、小河原君の紹介で、二度ばかり、僕の家に來たんだね。それで、君は知つたんだねえ。」

美禰子は、さういはれて、ハツとしながら小さくうなづいて、良人の顏を見あげた。が、瀧山の表情にはたゞ、醫者としての深い關心があるばかりで、良人として妻を疑ひ、耐へがたい嫉妬や、不快などの煩はしい陰は、針の先ほどもないのだつた。

「久滋君の耳の後の傷は大した事もないが、腹部が單なる打撲傷ぢやないらしいんだよ。內部に

傷害を受けてゐるらしいから、今夜の內にでも、帝大へ連れて行つて、內臟の手術をしなければいけないらしい。」

「內部傷害なんて、危險なんでせう。」

「うむ。餘病が起ればね。しかし久原君に頼むから、大抵大丈夫だよ。お前起きられたら、あの人の傍へ行つて見て御覽！　お前が、死にでもしないかと思つて心配してゐるらしいから。」

全く瀧山の心の良さは、際限がなかつた。美禰子は、良人の善良さにじり〳〵壓しつぶされて、物がいへなくなつた。

しかし、久滋の傷は、案外重いらしい。もしかしたら、瀧山は、自分と久滋とを不貞な妻と、その相手として、睨んでゐながら、表面は冷靜を裝つて、じり〳〵と、いぢめようとしてゐるのではなからうかと、もう一度支那人のやうな、茫漠とした良人の顏を、涙の眼で見あげた。すると、瀧山は、

「何です、涙なんか溢して。何も心配することはないよ。お前の方は、打撲傷は輕いし、もう起きてもいゝ位だよ。それ？」と、近寄つて來て、脇に手を入れて、半身を抱き起してくれた。

美禰子は、シュミーズだけになつて、胸に濕布が卷かれてゐるのを見て、あわてゝ、

「これ、貴君がして下さつたの？」と、訊いた。
「いや、こゝの病院から、電話がかゝつて來て、驚いて駈けつけた時にもう、すつかり二人とも、十分手當がしてあつたよ。こゝの外科部長が、一昨年まで、久原外科の助手をしてゐたし、萬事、都合がいゝんだよ。お前の傷は、何でもないので、安心はしてゐたが、お前が氣がつくまで、待つてゐるのは、長くてつらかつたよ。自分が、醫者だといふ事を忘れて、不安になるものだよ。」
「すみません。御免なさい！」
美禰子は、後から良人に抱へられた姿勢で、ほろ／＼泣きだした。
洋服を着て、靴下をはいて、靴下に血が二三點乾いてゐるのを見ると、久滋の血かも知れないと思ふと、動悸が烈しくなり、胸の痛みと共に心も痛んでくるのだつた。
美禰子は、良人に援けられながら、すぐ隣の久滋の病室へ入つて行つた。
美禰子が見たものは、白い枕の上に、痛々しい繃帶を周圍に卷つけた青褪めた顏だつた。
これが、つい先刻まで、あんなにも樂しく語り合つた久滋だらうか。美禰子は、恐ろしさに手足を震はしながら、彼のベッドの方へ近づいて行つた。
久滋は眼をあけて、美禰子を見ると、微笑んで見せようとしたが、その試みは、悲しさうな澁

面に變つてゐた。
美禰子が、久滋のベッドの傍の椅子に、腰をかけると、瀧山は、
「部長と打ち合せをして來るから。」と、無雜作にいつて部屋を出て行つた。良人が出て行くのを待つて、美禰子は、
「お痛みになりますの？」と、訊ねた。
「なに、大した事はありませんが。」と、久滋は首を動かさず、極めてかすかに、美禰子の不安と恐怖とを鎭めるやうにいつた。
美禰子は、久滋を愛してゐたから、樣變りのした久滋を見ると、その刹那良人のやさしさを忘れたやうな、大きな悲哀に打たれて、その頰には、涙の絲が、ズル／＼と引かれた。
「貴女の御主人が、親切にして下さるので——とても辛い。」と、久滋は兩眼を閉じて、しかし、可なり明るい調子で呟いた。その言葉から、美禰子は、久滋の確な神經と、いつもながらの素直な心の呼吸を感じて、心が鎭まつて行つた。
部長と瀧山が、入つて來た。
「帝大で、今夜中に久原さんに、手術が必要なれば手術をして頂くやうに、お願ひして、病室も

準備させたから、これから久滋君を寢臺車で連れて行くことにする。僕は、久滋君と一緒に行くから、お前はこゝで朝まで靜かに寢ていらつしやい。そして、夜が明けてから、家へお歸りなさい。今、家の女中に來るやうに電話をかけて置いたから。」と、瀧山は美禰子にいひきかせた。

久原博士といへば、內臟外科では、並びなき名手として、海外にまで、その名を知られてゐる國手である。

美禰子は、平素はぼんやりしてゐながら、いざとなると、萬全の心づかひをしてくれる良人を、ありがたく思つた。

瀧山は、また部長と、ドイツ語まじりで、低聲で話し始めた。この眞夜中に、久滋を送るについて、手當に關しての相談らしかつた。

久滋は、瀧山から美禰子に、眼を轉じて、もろ〳〵の思ひの涌き上つてゐる自分の心底を、恥かしげな微笑に託して、傳へようとするのであつた。

美禰子も、(どうぞ。安心していらつしやい。萬事大丈夫!)と、そんな微笑を返せるほど、平靜をとり返して來た。

良人と久滋とを送りだした後で美禰子は、一人病室のベッドに、横たはつた。

腕時計を見ると、いつの間にか針が止まつてゐたが、もう一時を囘つてゐるであらう。今日一日の事が、怖ろしい夢のやうに思はれて來た。

先刻、横濱にゐた頃など、久滋の寢臺車に同乘して行く良人の姿など、誰が想像したであらう。そんな光景を、見なければならぬ、苦しい立場に置かれようなどと、夢にも、思はなかつたことである。すべて、神が自分を罰したのだと、考へる外はなかつた。この出來ごと、良人がどんなに善良で邪心がなく、まるで十か十一の子供のやうに素直で、しかも醫者としては親切で、重傷者たる久滋に、萬全を盡してやらうといふ、氣持しか動いてない事が分ると、美禰子は、いよいよ恐ろしくなつた。

自分の退屈から來る氣紛れとわがまゝとで、この良人を欺かうとした罪が、こんなにも速かに罰せられたのだ、としか思へなかつた。しかもそれが自分に比すれば、ずーつと罪の輕い筈の久滋の上に、痛ましく及んでゐる。

(いけない。いけない! こんな事であの人が死んだら、私は一生寢覺がわるい。どうぞ、無事で、萬一の事のありませんやうに!)

國道を徐行してゐる寢臺車を、幻の中で追ひながら、美禰子は祈つた。

それにしても、良人のあの態度は、どうだらう。見なれたわが良人ながら、騒がずあわてず、おだやかで慎重で、いつもの物臭に似ず、注意深くて、一緒に同乗して行つてくれるなど、久滋さんを何と思つてゐるのだらう。私と久滋さんが今日何うしてゐたと、思つてゐるのだらうか。子供のやうに何にも知らないのかしら。また神さまのやうに、みんな知つてゐて、しかも總てを宥してゐるのかしら。いづれにしても、あんな呆けたやうな顔をしてゐて、しかも、何といふよい良人だらう。

（私が、悪かつたのだ。これから慎しみます。もう、決して〳〵）美禰子は、心の中で幾度も呟いた。

二時頃に、女中のあさが、本郷から駈けつけて來たので、美禰子は心が、大分安らかになつた。しかし、朝までどうしても眠れなかつた。

夜が明けると、病院に居ることが、何となく極りが悪く、落着けなかつた。身體を動かしてゐると、肩から胸にかけてかすかに鈍痛を感ずるだけだつたので、昨夜のお醫者などに、顔を見られないうちに、歸りたくなつた。自動車を呼んでもらつて、逃げだすやうに病院を出た。

一町ばかり來ると、道の傍に、見覺えのある自動車が、ラヂエーターが一尺もへこみ、窓硝子

を滅茶々々に碎かれたまゝ放りだされてあつた。美禰子は、チラとそれを見ると怖ろしさに顔をそむけた。

美禰子は、本郷の家へ歸つて來て、またすぐ床にはいつたが、不眠の頭の中は、綾のやうに亂れてゐて、神經はたかぶり、涙もろくなつてゐた。

瀧山は、まだ病院から歸つてゐなかつた。もしや、久滋の結果が、悪くなつてゐるのではあるまいか。病院へ電話をかけて見ようかと思つたが、それも何だか空恐ろしい氣がして出來なかつた。

女中が、朝刊を持つて來て、枕元に置き、

「お食事は？」と訊いたが、物悲しく頭を振つたばかりだつた。

十分ばかりしてから、何氣なく枕元の新聞を取り、開けて見ると、美禰子は、

（アツ！）と叫び聲が出るほど驚いた。

三面に四段抜きで、『瀧山博士夫人の奇禍』といふ見出しで、昨夜の事故が報ぜられ、しかも脇見出しには、運轉手は即死と書かれ、T劇文藝部長久滋氏は重傷と報ぜられてゐる。

美禰子は、蒼白になつてしまつた。

自分と久滋との密會の事が、醜聞として報ぜられてゐるのではないかと、息を詰らせて、一氣に讀んだが、さうした疑惑を受ける文句はなく、おしまひに瀧山博士は語るとして、

（妻が横濱へ買物に出かけるので、一人ではと思ひ、自分の患者であつた久滋君に同行をお願ひしたところ、こんな事になりまして、久滋君にはまことにお氣の毒です）とあるではないか。

良人は、その數行の談話の中に、妻と妻の男友達の上に、いまはしい世間の疑惑のかゝるのを、巧に外らしてあるのだつた。美禰子は、前に瀧山がゐるのでもないのに、恥かしさに顏が眞赤になつた。

つね日頃、鈍感であると思つた良人。その鈍感さに、こつちがいらだたしくなつて鞭打てば、その鞭の下にさへ、どつかと尻を据ゑてゐるやうな良人の鈍さを腹立たしくさへ思つてゐたのに、いざ鎌倉といふ時になると、神の如く凡てを知りつくして、しかも神の如く計らつてゐるやうな良人の處置は、層雲を破る太陽の光のやうに、燦として冴返つてゐるではないか。

「まあ、何といふ人であらう。あの人は、あの人は……」

感激と感謝と讃歎の涙が、ゴツチヤになつて、美禰子は枕の上に顏を伏せて、滿々と泣き出してしまつた。

「ありがたう！　ありがたう！　御免なさい！　御免なさい！」

美禰子は瀧山が前にゐるかのやう、口に出していつた。

轉心

美禰子は運轉手が死んだ事を知ると、昨夜の事件の恐ろしさが、しみ〴〵と分つた。久滋や自分の生命も、名譽もあの瞬間に、重大な危機に面してゐたことが分つた。

それを危く逃れたことは、幸運でもあるし、良人の細い心遣ひの賜でもあつた。

やがて、家の中に上げてある芝犬とコリーとが、玄關へ飛び出して行つた。

良人の足音をきゝつけたのであらう。美禰子も寢床から起き上ると、寢衣の儘で續けて駈出した。

毛穴のぶつ〳〵と開いてしまつた、青ぶくれのした顏をして、良人が歸つて來た。表情は疲れ切つてはゐるが、暗くはないのを知ると、美禰子は外套を脱がせてやりながら、

「御苦勞さま、どうでしたの？」と訊いた。

「大丈夫だ。あの分ぢや、餘病の方も心配ないよ。お前はいつ歸つて來た？」
「一時間位前に。」
「よく眠れた？」
「いえあまり……」
「俺はすぐ寢る。」
それ以上は何にも訊かず、洋服を例の調子で、無雜作に脱いで、寢衣に着替ると、ベッドの置いてある自分の部屋へずん〳〵入つて行かうとする良人に、昨夜の事や新聞の事を詫びようとして、
「あなた！」と、小さく呼び止めて、訴へるやうに良人を見ると、
「とても、眠い。あれから、附きりだつたものだから、安心すると、急に眠くなつた。眠くつて、眠くつて！」と、片眼をつむつて、
「あゝ。あーあ」と、色氣もない大欠伸して、部屋の中へ入つてしまつた。
美禰子は、後から追ひかけて行つて、ベッドの毛布などをキチンと直しながら、
「お腹お空きぢやございませんの？」と、訊くと、

「うん。空いてゐるが、眠い方が先きだ。」と、毛布を頭から被つたが、
「久滋君も、僕が歸る頃には、寢てゐたよ。夕方にでも見舞に行つて上げなさい！」と、眠さうにいふと、クルリと向うをむいた。
わざ〳〵そんなことまでいふ、瀧山の親切に氣を打たれて、立ち去りかねてそこのソファに腰かけながら、ぼんやり良人の寢姿を見守つてゐると、早くもスヤ〳〵といふ良人の寢息が、聞え始めて來た。
美禰子は、ぼんやりと自分の部屋へ歸つて來たが、自分の氣持がいつの間にか、すつかり變つてゐるのに氣がついた。
久滋はもう大丈夫だと瀧山にいはれた刹那、美禰子は昨日までの久滋と自分との關係まで、スツカリ清算されたやうな氣がした。瀧山が、久滋のことなど、ちつとも氣にしてゐないやうに、自分も、もう久滋のことなど、氣にしなくつてもいゝやうにさへ思つた。見舞ひに行つて上げなさい！　といはれたとき、もう行つても行かなくつても、久滋に會つても會はなくても、どちらでもいゝやうな氣がした。
昨夜の事件で、夢が覺めたやうに、ケロリとしてしまつてゐる自分を考へると、淺間しくさへ

思ふのだつた。

美禰子は、何かで讀んだことがある。心中をしそこなつた男女は、それを機會に氣まづくなる場合が多い。芝居の『尾上伊太八』のやうに。

人生の危機に接すると、今まで眠つてゐた心が、――良心や、認識や、理性が目を覺すのであらうか。

しかし、このまゝ久滋の所へ行かないのも薄情である。とにかく、久滋に會つて、向うの氣持も知り、自分の氣持も傳へた方がいゝ。さう思つて、美禰子は正午過ぎから、外出の支度を始めた。

身體を動かすと、肩から胸にかけて、かすかな鈍痛を感ずるだけで、起居は平常の通りになつてゐた。

「旦那さまは、そつとして置いて、お休みの邪魔をしないやうに。」

と、女中達にいつた。帝大まで歩いて行つた。外科の病棟に入ると、顔見知りの看護婦がゐて、病室へ案内しながら久滋の容子を話してくれた。容態は、ごく良好で、今眼を覺ましてゐるといふのであつた。

病室へ入ると、久滋はすぐ美禰子の方を見た。

美禰子が豫期してゐたほど、驚きも、あわてもしなかつた。

頭に繃帶をした久滋の顏色は昨日のやうに、蒼白くなく、ほんのりした明るさが、いかにも病人らしく思はれるのだつた。

彼が、美禰子を迎へた瞳の色は、水のやうに、底冷たく澄み切つてゐて、靜かに落着いてゐた。

美禰子は、その瞳にぶつゝかると、不安が一掃されて、自分の心ばかりが、一變したのではないことを知つた。

久滋もまた、その心境に、變化を來してゐることが、すぐ分つた。

嘗て覺えたことのない氣まづさだつた。互ひに、相手の心をさぐるやうな態度で、

「手術なすつたの？」と、美禰子が訊くと、

「うゝん。」と、かすかに首をふりながら、

「瀧山さんは？」と、久滋が訊き返した。

久滋に、何よりも先に、良人の事を訊かれたのも意外だつた。

「朝から、グツスリ寢てゐますわ。」と、答へた。

「ぢや、貴女がこゝへ來られたのは御存じないのですか。」
「いゝえ、瀧山から貴君をお見舞に行つて來いと、いはれましたの。」美禰子は苦笑しながらいつた。
「瀧山さんには負けるね。なるほど、あれぢや、うんとも、すんとも云はないだらう。」と、久滋も苦笑しながら、獨言のやうに云ひつゞけた。
「あの人は神樣だ！　美禰子さん、貴女は神樣につかへる神聖な巫女なんだ。貴女が、何かすれば罰があたりますよ。」
久滋が考へてゐることも、美禰子が考へてゐる事も同じだつた。全然人を疑ふことのない瀧山を鈍感といへば、どこまでも限りが知れないやうな鈍感さだし、豪いといへば、まさに神さまに近いやうな豪さだともいへるし……。
昨夜のやうな出來ごとがなかつたら、二人とも瀧山の鈍感さをいゝ事にして、行くところまで、行つてしまつたに違ひないのだが、あんな事件があつて、九死に一生といつたやうな危險を、瀧山の盡力で、切りぬけて見ると、瀧山に對する後めたさは、瀧山の豪さを耀り上げて、久滋は全く、これほど豪い男が、世の中に又とあるかと思ふのだつた。

でも先刻までは、まだ未練があつて、美禰子と一刻も早く會ひたいと思つてゐた。
しかし、かうして會つて見ると、自分の妻を、十分その間柄を疑つていゝ男を見舞によこして置きながら、悠々と眠つてゐる瀧山の立派さが、限りなく感ぜられ、自分達が、棄てがたい戀情で、いぢ〳〵と會ひたがつたり、ロマンチツクな氣分に陶醉してゐる事などが、ケチくさくて、まるでお釋迦さまの掌の中で走り廻つてゐる孫悟空のやうに馬鹿々々しくなり、美禰子との關係が、むしろ腹立たしくさへ感ぜられるのだつた。
と、にはかに美禰子が、啜泣きを始めた。
「どうしたんです。看護婦が入つて來ますから、お止めなさい！」と、いつたが、心の中では美禰子が、何のために泣いてゐるかゞ分るやうな氣がした。
瀧山のために、二人とも完全にノツクアウトされた悲しみの涙でもあり、欣びの涙でもあらう。
美禰子も、すぐ泣きやんだとき、
「神さまと、喧嘩しても始まらないから、僕は貴女と會ふことはよさう。」久滋は、苦笑しながらいつた。
「僕も、危く生命拾ひをしたんだから、これを轉機にして、穩健明朗なる結婚でもします。」と、

久滋はつゞけていつた。

「さうお。」と、美禰子も、諦めてしまつた氣安さで答へた。

お互に胸襟を開いて、物をいつてしまふと、久滋と美禰子との會話は、長くは續かなかつた。

久滋は、冥想にでも耽るやうに、眼を瞑つてしまつた。

間のわるい壓迫をお互に、感じ始めたのである。その時に、扉の外に誰か判然とは分らないながら、どく親しい誰かゞ入つてくるやうな氣配がした。

扉がノックされて開いたので、美禰子が顏を上げると、看護婦の肩の上に、惠美子のひどく思ひ入つた眞劍な、顏が覗いてゐた。

「まあ。惠美子！」彼女は、神妙に足音を忍ばせて、叔母の傍に寄つて來た。

「やあ！」と、久滋がかすかに微笑みかけても、不安さうな表情のまゝ、あるか無きかの低い聲で、

「大丈夫なの。酷くわるいんぢやないの。」と、訊ねるのだつた。久滋は、

「有難う。たいした事はないんですよ。」と、惠美子を安心させるやうに答へて、惠美子の顏の中の大袈裟な不安を、悅びとも驚きともつかぬ氣持で、眺めてゐた。久滋にさういはれると、今度

は叔母に、

「厭だわ、隨分びつくりさせるのね。私、今日の試驗滅茶々々にされちやつたわ。でもよかつたのねえ。」そして、一寸滲み出さうになつた涙を、指先で押へながら、笑ひ始めた。そして、涙を、きまり惡げに、また久滋の方へ顏を向けると、

「その繃帶の下、ひどい傷になつてゐるのぢやないの。」

「うん。そんな事はない。癒れば痕はつかないでせう。」

「叔母さまは？」

「私は、肩から胸を打つたの。」

「叔母さんと久滋さんとが、一緒に死んぢやつたら、私もきつと死にたくなつたわねえ。」と、惠美子は無邪氣にいひながら、安心してベッドに近い椅子に腰を降すと、

「久滋さんのお見舞は、私が引き受けちやふわ。內科ぢやないんだから、毎日來て御本か何か讀んでゐればいゝんでせう。」と、久滋の顏を覗き込んだ。

狼狽へて落した涙の雫が、まだ睫毛でキラ〳〵してゐる。

久滋は、惠美子の視線を受けながら、何か新鮮なほの〴〵とした幸福を感じた。

婚約者

世間は、バタ〳〵とはたき落されるやうに、忙しくなつて、年の暮になつた。柱暦が、薄平たくなつてしまひ、街には大賣出しの赤や青の大旗小旗が閃き、街を行く女に、島田髷や日本髪が殖えて行く。

買物に出かける女連の姿が多くなり、年の瀬の感じが、新鮮に遽だしく感じられる。

澁谷道玄坂の通を抜けて、大分上つた電車通を、少し横へ折れると、こんな所にと思はれるが、しかし口の贅澤な連中に、相當知られてゐるフランス料理店がある。

どことなく明治初年風の感じで、裝飾といへば、いくつもの柱に、それ〴〵競走馬のすつきりした頭のブロンズが、取りつけられて、店主の馬好きを現してゐる。

入口の突き當りのクロークで、洋裝の久美子が、

「青山の三六三五に電話かけてね、和田といふ家だから、隆一さんといふ人、呼びだしてね。向うで、こつちの名前をいつたら、二葉といふ學校の友達だといつて頂戴！　貴方上手にやつてね。」

いつもながら、術策に長じたる彼女、ボーイに外聞の悪い用事を頼みながら、ボーイが思はずニヤリと出かゝるのを、グッと堪へたほど、さりげなくすましたものである。

控室に入つて待つてゐると、すぐボーイが、

「お出になりました。」といつて來た。

「ありがたう。」と受話器を受取り、微笑も浮べない大眞面目な表情で、

「もし、もし、隆一さん――？　私お分りになつた。道玄坂の上の二葉亭に來てゐますのよ。直ぐいらつしやいません？　えゝ、ぢや直ぐね。」話は、ごく短かつた。

控室に落着くといきなり、した双眸を輝かせて、ルージュとコムパクトを出して、粧ひ直し始めた。

隆一は、十二月半過ぎから、學校も休みになつてをり、宮川は土曜日曜以外にも、暮の退引ならぬ用事のために、「今日は行かれない。」と斷つてくる日が多くなつた。

暮の遽だしさに、取殘されてゐるやうな二人だつた。先刻二階から、隣の庭をブラ〳〵してゐる隆一を見つけて、ウインクすると、隆一も赤くなりながら、手を振つて見せたので、久美子は、

そゝくさと洋服に着換へ、こゝへ出て來たのである。

（直ぐ行きます）といふ隆一の有頂天に近い興奮した返事、嬉しさうに駆けつけてくるだらう。

そしたら、私はケロリとしてゐてやらう、その方がよつぽど效果的である。こゝで、御飯をたべて、どつかへドライヴでもしようか。などと、スケヂュールを立てゝゐた。

十分、十五分。二十分とは待たせなかつた。學生服に、鼠色のオーバ、同じ色の中折を被つた隆一が、久美子の輕い微笑に迎へられて、妙な表情で、その部屋の戸口に立つてゐた。

食堂へ入つて、差し向ひの食卓に着くと、久美子は更に晴やかな眸を上げて、

「何だつて、そんなに私を見ていらつしやるの。」と、隆一を脅かした。隆一は、赤くなりながら、

「不思議だから……」

「何が……」

「貴女に、誘はれても、もう交際ないつもりでゐたが、いざとなると萬事御意のまゝになりさうで——そんな自分が不思議だから。」

「そんなに、私のいふ通りになりさう。いゝ子だ。いゝ子だ。」と、後はケロリとして、パンをちぎりながら、

「今日のスケヂュールは、村山貯水池か多摩川邊りへドライヴしようと思つてゐるの。いかゞ……」

東京で、遊んでゐたら、宮川にぶつかりさうなので、ついこの間も見つけられたし、郊外へ行きたかつた。十二月の末とはいへ、麗かな天氣が續いてゐた。

「ドライヴは、眞平ですよ。」と、隆一は一言で、却けてしまつた。

「まあ！　なぜ……」

隆一は、それに答へず、ボーイを呼んで、朝刊を持つて來て貰ふと、三面を出すやうに、折り疊んで、

「ほら、御覽なさい。これ、僕の叔母です。」久美子は忙しく記事に目を通して、

「まあ、ほんとね。いつか音樂會で逢つた方でせう。相手の男の方も、あの時の方ぢやない？」

「さうかも知れん。惠美子は、見舞ひに行つてゐるんですよ。」

「でも、こんなこと、一々氣にしてゐたら、自動車に乘れなくなつちまふぢやない？」

「だつて、こんな社會記事に取り扱はれちや。」

「大丈夫よ。私は、博士夫人ぢやないもの。」

「だつて、貴女と一緒の自動車で怪我したなんていふことを、僕の家へ分つちゃ嫌だ。」
「臆病者ね。ぢやいゝわ。小田急で、どつかへ行かない？　電車の中だけ、連でないやうな顔をしてゐてあげるわ。ねえ、私久しぶりで、貴君と郊外へ行つて、清々しい空氣を吸ひたいのよ。」
久美子は、自分達以外の世間には、どんなことが起らうが、おかまひなしといつたやうに、新聞を片附けながら、甘い眼付で、ぢつと隆一を覗き込みながら、しきりに誘つた。
「今何時ですか。」
「一時廻つたばかりよ。七時頃までには、歸してあげるわ。」
「……」
「ね、行きませうよ。」と、忽ち、優しく絡つくやうに、フオークを休めて、隆一を近々と見た。
隆一の心臓も、躍り出すばかり、彈んでゐた。
隆一も、到頭半日を久美子と一緒に遊ぶことになつた。
デザートになつて、久美子が、鯉が麩を食ふやうな恰好で、唇を圓く開けて、バ・ロア・クリームをスプーンから吸はうとした時だつた。直ぐ身近で、
「マヽ！　クミチヤン、クミチヤンが居るウ。」といふ、嬉しげに鼻にかゝる甲高い男の兒の聲を

聞いて、久美子は、ひよいと眼を上げるなり――輕くあいた唇の間に、息の通ひが止まつたと思ばれるほど、表情が硬く凍りついてしまつた。
久美子が宮川家にゐた頃から――その後しげ〳〵と宮川の家に出入してゐた時分、陽氣な彼女に一番よくなついて、耶奈子が生れてからは、なほの事、一にも二にもクミチヤンでなければ、承知しなかつた洋一である。思ひがけない所で、長いこと會はなかつた人を、逸早く見出した洋一は、久美子の硬張つた表情を、不思議がりながら、子供らしいニタ〳〵笑ひをつゞけて、房子夫人の手を、
「ねえ。マヽ、クミチヤンが！」と、搖つてゐた。
「暫く――」と、房子夫人から、先に挨拶されて、久美子は、死物狂ひに平靜さを、取りつくろうて、朗かな笑顔を作つて、
「まあ奥さま。しばらくでございました。御無沙汰致しまして相すみません。洋ちやん、大きくなつたのねえ。耶奈子さんは！」
巧に、子供の方へ中心をうつして、洋一を綾に使つて、うまくこの場を切り拔けん、心がまへをした。だが、房子夫人は、二三歩近寄つて來て、

「まあ、ほんとに久しぶりね。貴女、一體どこに居るの。私、貴女の住居、この間中から探してゐたのよ。」

同じ卓子の隆一の存在など、ほとんど無視するばかりの房子夫人の態度には、目下の者に對する無遠慮と針を含んだ厳しさがあつた。

母子を案内して來たボーイは、房子夫人と久美子とをかなり懇意な間柄と見て、

「御一緒になさいますか。」と、房子夫人に訊ねた。

久美子は、すつかり腹を据ゑ、死中に生を求める覚悟で、

「奥さま。おかまひなければ、どうぞ。こちらは、私のお友達で、差支ない方ですから。」と、圓轉滑脱に、同座をすゝめた。

房子夫人は、初めて隆一に目禮してから、悪く落着いてゐる久美子の様子に、きつと蒼白んで、

「いゝえ。もう、貴方はお濟みのやうですし……」と、洋一の手を引いて別の席へ行かうとする

と、

「マヽ、いやア。僕、クミチヤンと一緒に食べるの。」と、洋一は久美子の椅子の背に手をかけたまゝ、離れようとはしないのだつた。

「いけません！　お邪魔になりますよ。」と、夫人は邪慳に、洋一の手をとつて引き離し、ボーイのこさへた別の卓子へ、連れて行かうとすると、

「いやだい！　いやだい！」と、忽ち、ベソを掻きさうになる洋一を、久美子は椅子から立ち上つて、

「ぢや、クミチヤンが、洋ちやんの横に坐りますわねえ。」と、肩を抱へるやうにして、別のテーブルにボーイが置いた子供用の椅子に洋一を腰掛けさせ、

「久し振で、クミチヤンと、一緒に食べませうね。」と、たとひその場限りだけでも、房子夫人の機嫌を取繕はむとの必死の働きぶりを、房子夫人は苦々しげに見やりながら、

「久美子さん。私、貴女に少しお話があるのよ。」とねつとりと重みのある言葉つきに、驚破身の上の大事と思ひながら、

「えゝ。二三日の内に、お話承りに伺ひますわ。暮には、是非一度お伺ひしたいと思つてゐたところなんですの。」と、快活に一寸のがれの返事をすると、

「でも、貴女の二三日なんて、當にならないんですものね。來ないとなると、一年でも二年でも平氣でいらつしやらないんでせう。今日、一寸お話したいのよ。もし貴女お暇なら、これから私

の家へ一緒に來て下さらない？」

麻布の家へ、引張つて行かれて、宮川と對決でもさせられると、どんな苦しいみじめな眼に合はされることになるかも知れないと思ふと、今は久美子も四苦八苦の思ひで、

「でも、奥さま。今日は、あの連の學生を無理に誘つて、これから郊外へ遊びに行かうとするところなんですの。だから、あの方をお斷りすること出來ませんわ。急ぎの御用でしたら、今こゝで承りますわ。」

こゝで聽いた方が、洋一もゐるし、ボーイもゐるし、隆一も二間向うの卓子にゐるし、樓端にとつちめられることもあるまいとの久美子の肚だつた。

「さうね。私二人ぎりで、ゆつくりお話したいんですけれど——ぢや仕方がないわ。でも、お連の方は、控室で待つて頂くことにしたらどう？」

「はあ。さう致しますわ。」久美子は、立つて隆一のところへ行つた。

「ねえ、あの坊ちやんが、私と一緒でなければ、御飯食べないといふの。貴君すまないけれど、控室で二十分ばかり待つてゐてくれない！」

「いゝとも。」隆一は、素直に立ち上つて、食堂を出て行つた。

久美子は、ピンチに起用された投手のやうな悲壯な覺悟で、洋一の横の椅子へ歸つて行つた。

洋一にナフキンをかけさせてやり、ポタージュをスプーンに半分位づゝすくひ、それを口で吹いて冷しながら、食べさせてやる間も夫人の攻撃が、まづどの方面を突いてくるかと、心もそゞろである。

「ねえ、久美さん。私、一番に聞きたいの。貴女、今何してゐるの？」隆一が、別室に行つたため、今は洩れ聞く人なしと見て、昔通りの目下に對する物言ひになつてしまつた。

「私……」といつたが、この問ひが、一番苦手である。ショップガール、女事務員といつて承知するわけでなし、ダンサー、女給といふのは、自分で口惜しいし、——思ひ切つて、

「……何も致してをりませんの。」と、言つてしまつた。

「さうお……」と、夫人は頷いて、先刻から久美子が、スプーンを持ちながら氣にしてゐる、右の手の指の一粒ダイヤの小さいけれども素姓よき石を、ぢつと見つめながら、

「何もしないで、隨分立派な御衣裝ね。その指環だつて千圓近くするんでせう。」

親子で、四五年も厄介になつてゐた義理があるだけに、何といはれても、口答へ一つ出來ぬ口

惜しさを、ぢつと堪へてゐた。

「ねー、何をしてゐるの。以前は何處かの食堂に勤めてゐたんでせう。」

「えゝ。あすこは辭しました。」

三十やそこらの若い身空で、度胸よく奔放自在な久美子も、今は自分でも感ずるほどだらしがなかつた。

「ぢや、何で生活してゐるの？」

「父が……」と、いつたが、後が續かなかつた。

「お父さんが働いてゐるの？　あの年で、可怪いですわね。」

久美子は咀嚼に考へついて、

「でも、奥さま、父が去年相場で當てましたのよ。」と、苦しければ、どんな嘘でもつく。

「相場だつて、資本がなければ出來ないことよ。その資本誰が出したの？」夫人の言葉は霜よりも鋭どかつた。

「私、食堂で働いて、三百圓ばかり貯金が出來ましたの。それを父にやりましたので……」

夫人は、冷たい顔に、嘲りに近い笑ひを浮べながら、

「ねー、久美さん。貴女も知つてゐる通り、宮川も相場をするから、私だつて、その方面のことは知つてゐるのよ。この頃は、證據金が高くなつてゐるし、殊に貴女のお父さんは昔からの相場下手で、財產をなくした方ぢやないの。三百圓位の資本なんか、何の足しにもなるもんですか。そんな嘘よりも、貴女が往來でお金を拾つたのだといつてくれた方が、まだ氣持がいゝわ。」久美子はもう全くグロツキーだつた。

洋一は、母と久美子との間に、どんな險しい空氣が漂つてゐるかなどは、おかまひなしに、久美子に小さく切つてもらつた魚を食べるので夢中である。

宮川夫人は、運ばれる皿を、どれも一口二口食べるだけで、ボーイに下げさせてゐるほど、興奮し切つてゐる。

「私、何も貴女の生活が、どうのかうのつて、訊く權利はないの。貴女方親子を世話したからといつて、今更貴女の生活に干渉しようといふ譯ではないの、たゞ私氣になることがあるのよ。」

夫人の舌鋒は、いよ〳〵ヒステリツクに冴えかへつて、まさに久美子の急所を抉り始めた。

久美子は、神妙に默つてゐる外はなかつた。

「貴女、宮川と會つてゐるのぢやない？」到頭、夫人は本問題に觸れて來た。久美子も、今は默

つてをれず、
「いゝえ、奥さま。」と、ハツキリ打ち消した。
「さうお。でも私には、貴女は宮川の世話になつてゐるやうに思へて仕方がないの。」
「いゝえ。奥さま、私だつてそんな大それた事を……」久美子は、赤くなつて辯解した。
「さうお。だつて、十一月の下旬だつたかしら、貴女宮川を送つて、私の家の門の前まで來やしなかつた？」
「いゝえ。奥さま、それは大變な人違ひですわ。」
「私は、人違ひだとは思へないんですよ。」
夫人は、ヂツと、久美子を睨み据ゑて、
「四五年も、同じ屋根の下にゐた貴女を見損ふわけはないんですよ。」
「でも、奥さま、私、旦那さまとも、いつか食堂にゐました時に、一、二度お目にかゝつただけで、この半年ばかり一度もお目にかゝつたことなんかございませんのよ。」久美子は、しどろもどろになつてゐた。
夫人のいふこと、總てが事實であるのだから、口ではいろ〳〵抗辯してゐるものゝ、穴あらば

入りたい氣持、眞面に夫人の顏を見上げることなど、どうしても出來なくなつた。
口で、何と言はうとも、その眼に、その唇に、隱し切れない眞實が、ピク〳〵痙攣してゐるやうで、久美子は脇の下に、滲む冷汗もいとはしく、どうにかして夫人の氣持を柔げ、この場を切り拔けようと、必死の智慧を絞つてゐた。
だが、こゝで逢うたが百年目といつた感じの房子夫人の眸には、やはか許すものかといつた決心の色が、烈しく浮かんでゐるのだつた。
ボーイが、皿を替へる時だけは默つてゐるが、ボーイが三、四尺離れると、忽ち言葉を續けて、
「先刻からの貴女の話を聞いてゐると、辻褄の合はない事ばかりぢやないの。第一、貴女のお父さんが、よくなつてゐるといふのなら、貴女でもお父さんでも、手土産の一つでも持つて、私の所へ早速報告に來るのが本當ぢやないの。」まさにその通りである。厚顏な久美子も、もう顏が上げられなくなつた。
「貴女は十四、五の時から、私の家にゐたんでせう。慰に被せるわけぢやないけれども、私なんか妹のやうに、親身に世話をしてあげたつもりよ。貴女が、三百圓でも資本を出して、お父さんが相場で當てた。それが本當なら、こんな結構な話ないぢやないの。そんな嬉しい話を——私

だつて欣んであげたいわ。――なぜ、もつと早く知らしてくれないの。どうして今迄默つてゐるの。貴女のお父さんが、相場で當てたなんて、私今聞くのが初耳よ。」

「すみません。伺はう、伺はうと思つてゐるうちに、伺ひそびれて、だん〳〵敷居が高くなりましたの――」と、やつと口籠ながらいふと、

「それは、貴女が私に疚しい事があるからでせう。」とピタリと止めを刺してから、

「私、貴女も知つてゐる通り、宮川の女道樂では、隨分いやな思ひをさせられたのよ。しかし、相手が見も知らぬ藝者とか女給とかなら、向うは商賣だし、宮川は人並すぐれた浮氣者だし、諦める外はないと思つて辛抱して來たのよ。でも、もし相手が貴女だとすると、私辛抱出來ないことよ。人もあらうに、貴女から宮川を盗られるほど、私、貴女に何か悪い事をした？」

久美子は、泣き出しさうになつて、

「私、そんな事夢にも、覺えのないことですわ。」と、いひ切つて見たが、何となく空な響しかない。

「いゝえ。貴女が、どんなに上手に辯解しても、私、信じられないわ。私の眼で、眼のあたり見た事ですもの。それに、食堂で給仕さんをしてゐて、わづかの間に三百圓貯まるといふのも可笑

しいし、第一貴女の身裝だつて、暫く見ない内に久美ちやんなんて呼んだら、此方でてれくさいほど、まるで實業家の若奥様といつたやうな恰好をしてゐるぢやないの。」もう房子夫人は、自分自身の品位をも忘れて、久美子に食つてかゝつて來た。

「でも、これまでの事は、いくら言つても仕方がないわ。實は私、四谷を引越してからの貴女の行先を探してゐたの。こんな所でこんな話するのは、いやだけれども、ねえ久美さん。貴方宮川とだけは、別れてくれない？」

かうまで、やつつけられてしまつた以上、「宮川とは別れてくれ！」などといはれなくつても、久美子の性質として此方から（そんなに大事な旦那さまなら早速お返し致しますよ）と、逆襲したいところであるが、さう言つてしまへば、今までの宮川との關係を肯定することになり、それを肯定して平謝りに謝ることなど如何にも口惜しいことなので、ムカ〳〵する氣持を抑へて、夫人の荒ぶるまゝに任せておくほかはなかつた。

「久美さん。貴女も、人妻になつて見ると、こんな思ひをすることが、どんなに厭なものか、今によく分るわよ。……それに、私にとつては、宮川は、たつた一人の男でせう。亭主にどんなに浮氣されたつて、女房が外で浮氣をすることなんか、今の日本では許されてないことなんでせう。

どんな浮氣者の亭主でも、たつた一人の男として、守つて行く外はないんですものね。ところが貴女なんか、さうぢやないんだもの。若くて綺麗なんだもの、何にも義理のわるい人に、ついてゐなくつても、今の學生さんのやうな若いお友達だつて、あるんでせう！」と、隆一のことに觸れた刹那、久美子は、フラ〳〵として、

「奥さま。私、先刻から申し遲れてゐましたが、ほんたうは、あの學生さんと、婚約してをりますの。來年あの方が、學校を出たら結婚することになつてをりますの。だから、お邸の旦那樣と會つてゐるの、お世話になつてゐるなんてことはあり得ないことでございますわ。」

窮餘の一策、隆一を婚約者だと嘘をついてしまふと、久美子はさすがに、眞赤になつた。

藪から棒の久美子の話に、夫人は半信半疑！　といふよりも、疑ひの方が、ずーつと多いながら、流石に女の、もしやさうかといふ氣も起つて、

「本當ですか。」と、大分語勢がやはらいだ。

「本當でございますとも。」久美子は、少し立ち直つて朗かにいつた。

「ぢや、貴女は、あの學生さんからでも、多少の補助をして貰つてゐるといふわけなの？」と、追及の手はゆるめない。

「そんなこと、ハツキリとは申し上げられませんわ。」と、恥しげな思はせぶりは、さう取つて欲しいとの謎であらう。

「一體、あの學生さんのお家といふのは、何をしていらつしやるの？」

「お父さまは工學博士、お母さまは女流教育家でいらつしやいますの。」と、久美子がわがことのやうに威張つていふと、夫人は心當りがあるかのやうに、小首をかたげながら、

「ぢや、お名前は……」

「和田さんと、おつしやいますの。」と、何氣なく答へると、

「和田さん！　ぢや、私のお友達の美禰子さんのお姉さんぢやないの！」と、房子夫人が、驚き叫べば、久美子もなるほどさうだつたかと思ひ當つて、一難去つてまた一難の思ひである。

轉向聲明

夫人にいはれて見れば、久美子も夫人の友達の美禰子には、二三度會つたことがあり、またその姉に女流教育家があるといつたやうな話も、聽いたことがあるやうであつたが、まさか隆一が、

さうした續き柄の人であらうとは、今の今まで夢にも思つてゐなかつた。

よろづ、その日暮し、目先以外の事はどうでもいゝといつたやうな現在主義の久美子なので、そんな事の詮索はしてもゐなければ、しようとも思はない性質であつた。

「不思議ねえ。和田伊佐子女史の息子さんと貴女が婚約してゐるなんて。でも來年卒業したら、結婚するといふ位話が纏つてゐるのなら、無論親御さんも御存じなんでせう？」

苦しいながら、仕方なく久美子は、

「えゝ。」と、曖昧に返事をした。

「それにしても美禰子さんが、何にも知らないといふのも、をかしいし——また、あんなに嚴格でむづかしい和田さんのお家ですもの、貴女の身許調べをするとすれば、當然私の家へ訊き合はせがある筈だし……」

尻尾だけは、無理に隱してゐても、頭の上に載せてゐる笹の葉は、アリ〳〵と見現はされてゐる形の久美子を、夫人はヂロリと見据ゑてゐたが、急に思案が變つたらしく、

「まあ、それならそれでいゝわ。さうとして置きませうね。貴女に、こゝでお訊きしなくつても、さうと定つてゐるものなら、美禰子さんにでも訊けば、すぐ分ることでせう。ね、さうぢやあり

ません？」

「はあ。」破れかぶれである。

「それだと本當に、結構ですわ。和田さんのお家なら、あれで御夫婦共稼ぎで、お金も隨分出來ていらつしやるといふし、隆一さんは眞面目な秀才だといふし、貴女も本當に立派な若奥樣になれるわけだわ。」夫人の前にかしこまつてゐる一分が、一日にも思はれるほどの苦しさである。

「結婚式には、ぜひ私達夫婦も、招待して頂きたいわ。」

「はあ。」と、返事したが、久美子も我ながら、あまりの空々しさに、（何がはあだい！）と自らを嘲つた。

「もし、さうだとすれば、私の貴女に對する疑ひがすつかり晴れることになり、今日私、隨分失禮なことをいつたことになるわねえ。そのお詫に、結婚のお祝は、宮川とも相談して、出來るだけのことしてあげるわ。ねえ、それで勘辨して下さいね。」

こつちの嘘を巧く逆用され、この仕合終始久美子に、いゝところは少しもなかつた。後暗いことをしてゐれば、かうまで滅茶苦茶に、やつゝけられてしまふものかと思ふと、流石の久美子も、いろ〳〵理窟はつけてゐても、結局不合理な關係であることの悲しさ、口惜しさが骨身の髓まで、

染み透つてくるのだつた。

房子夫人の食事はやつと、デザートに入つてゐた。夫人は、この一月あまりの鬱憤を、みんな晴らしてしまつたし、久美子から、退引ならぬ言質を取上げたので、やゝ機嫌を直したらしく、バ・ロア・クリームだけは、かげも殘さず食べてしまつてから、

「ねえ、久美さん。あの方、貴女と婚約してゐるし、美禰子さんの親類なら、私ちやんと紹介して貰はうかしら。」と、いつた。そんなことになると、またどんな樓が出るかもわからないので、

「でも、奥さん。あの方、とても恥かしがりやで、私と婚約してゐるなんていふことは、お友達にも祕してゐるんですもの。」と、逃げると、

「無論、貴女の婚約者としてゞなく、美禰子さんの親類として、紹介すればいゝぢやないの。」

「でも、奥さんが、叔母さんのお友達だなんていふと、きつと恥かしがりますわ。」

「さう。ぢや、またこの次ぎ紹介して頂くとして……ぢや、隨分お待たせしたから久美さん、先へお歸りになつてもいゝことよ。——ねえ、洋ちやん、クミチヤンは、お友達が待つていらつしやるから。」と、洋一にいへば、洋一はきゝわけよく頷いた。久美子は、またもや御意の變らぬ内と、

「ぢや、奥さまお先へ失禮いたします。洋ちやん、サヨナラ。クミチヤン、きつと遊びに行きますねえ。」と、子供騙し、親騙しの空世辭を殘して、全身に傷痕を受けながらも、とにかく虎の口を逃れる心地で、サツサと控室の方へ來た。

「すみません。出ませう。」と、隆一を促して、行先を定める相談はおろか、自動車を呼んで貰ふ餘裕など更になく、遽だしく、クロークに立つと、外套とショールを出して貰つた。

今にも宮川夫人が、食堂から此方へ移りはしないかと思ふと、ボーイがさし出す、宮川にやいのやいのとせがんで、やつと買つてもらつた銀狐のショールが、狐まがひの犬で作るといふ、このごろ猫も杓子も肩にかけてゐる貧弱な赤狐に變つてゐてくれゝばよいと、この時ばかりは、うすら寒い思ひで願ふのだつた。

やつとの思ひで、そこを出ると、久美子は兩手の中に、キツドの手袋をもみしだき、隆一に向けた、ふくれた横顔を、まだ身についてゐる苦い思ひを、振り落すやうに、激しく振つて、

「あゝ、あゝ、いや……私、斷然轉向するわ！」と、つく息さへ、あやしく震へながら、叫んだ。天を仰いで慨然たる久美子の容子に、いつになく眞劍なところがあるので隆一も、

「いつたい、どうしたんです。」と、訊かずには居られなかつた。

「厭だわ。私がいつたい、どうしたといふのかしら……もう、もう厭だわ。奥さんのある人の世話になつてゐるなんて……あゝよした、よした。今迄の生活を解消しちやふわ。」

最後の一句に、やゝ平生の明るい彼女が、顔を出してゐた。

隆一も、久美子の生活の内容は、よく知つてゐたし、先刻の夫人との問答もいくらか推察出來たので、久美子の氣持を變へてやるつもりで、

「大分遅くなつたし、もうドライヴは出來ないでせう。」と、いふと、

「どこか靜かな所へ行きたいわ。貴君にいろ〳〵な事聞いて頂きたいの。」と、いひさして、不意に兩手で顔をかくして、

「もう、何から何まで、厭になつたわ。もう我慢が出來ないわ。」心から悲しさうに、肩をすくめた。久美子が、身も世もなく悲しげな容子をしてゐると、隆一はどんなにでも、慰めて、つねの晴やかさを取り戻してやりたいといふ、優しい感情が湧き上つて來るのだつた。

「いまから、何處へ行きませう？　靜かで暢氣な所……動物園はどうですか。」

隆一は、こゝから近い郊外といつても、考へつかないので、少し巫山戯氣味でいつた。その呆けたところが、久美子に氣にいつたらしく、

「動物園はいゝわ。貴君は、やつぱりエラいわ。こんな時に、行くべき所を知つてゐるわ。河馬の顔でも見てゐると、屹度ムシヤクシヤが除れることよ。」と、俄に、いき〳〵とあげた瞳に、涙がうるんでゐて、べんに子供つぽく見えた。

つねに、憂ひも悲しみも知らぬげに、花やかに、笑ひ巫山戯散らし、隆一など子供扱ひにしてしまふ久美子が、急に悄氣返つて涙など浮べて、狼狽へてゐると、却つて心を打たれ、それを慰めてやることが樂しかつた。

「本當に動物園へ行きますか。」

圓タクを止めてから、隆一はもう一度久美子にたしかめた。久美子は、快く頷いて、親しい微笑を浮べた。

自動車に乘ると久美子はまたしても、悲しげな調子で、

「私、隨分間違つた事をしちやつたわ。貴君だつて、私が今のやうな生活をしてなかつたら、もつともつと愛して下さつたでせう。」と、彼女はずるさうな調子でいつた。

「現在だつて、僕は隨分貴女を好いてゐますよ。僕は、それを隱さうなんて思はない……」

「さうお……」と、仔細らしく頷くと、眼を澄ませて默つてしまつた。

直ぐ眼の前に、運轉手の背中がある。かうした所で、愛の話をすることなどは、初心な隆一には何となく面映いので、默りこんでしまつた久美子に、動物園論を始めた。

人間が少し利口になると、世の中が馬鹿らしさ、忌しさのほこりであるやうに見える。眼も口も開いてはゐられないといふ、厭世厭人的な氣持になつたら動物園に行くに限る。そこには、珍しい獸が、無心な眼と、心なき戯れと、盛んな食慾としか見せてゐない——戀人連で行つたなら、キヤラメルを食べながら來た幼時の思ひ出などが、數限りもなく話も湧かう。動物園は子供許りの樂天地ではない。入場料の安い、大人のための心の遊歩場でもあるぢやありませんか、と頻りに話しかけるのを、久美子は、耳を傾けもせず、

「私が、もつと眞面目な職業婦人だつたら、隆一さんは、結婚して下さるでせうね。」と、妙に熱心に話を、元へ戻してしまふ。

「今だつて、結婚といふことを考へてゐますよ。……たゞ、お母さんが難物でね。」と、相手の眞劍さに、釣りこまれて、思はず調子を合せて返事をすれば、

「貴君が、本當に、私と結婚する氣になつて下されば、私、貴君のお母さんだつて誰だつて、世の中に恐い者はなくなつてしまふと思ふわ。私、今あの奥さんに、大變なことをいつてしまつた

の。貴君と婚約してゐるつて！　ところが、あの奥さんは、貴君の本郷の叔母さんの御親友なのよ。」

隆一も、急に自分の身上の事になつたので、せき込んで、

「何故、そんな事いつたんですか。」と、少し靑くなつた。

「だつて……」と、口惜し涙を、今更のやうに頰を傳はらして、口籠りながら、

「みんな私が、惡いんですの。私あの奥さんの旦那さまのお世話になつてゐるんですの。ところが、あの奥さん、それをすつかり感附いてゐて、いろ／＼詰問するんですもの。私苦しくなつて、そんな筈はありません。私はあの學生さんと婚約してゐますと、出鱈目をいつたの。つまり、あなたを當座の楯にしたのよ。ところが、嘘はつけないもので、貴君の名前を訊かれたからいふと、それぢや美禰子さんの甥ぢやないかといはれて、ギヨツとしちやつたの。」

「まづかつたなあ！」

隆一も、もう久美子を慰めるどころの騒ではなくなつた。

隆一は、年が若いし、かうした事件は初めてゞあるし、俄かに事の重大さを感じて、一時に緊張した。もう、久美子の横顔を見やる氣力もなく、

「弱つたなア。大變な事になつた！」と窓外に眼をやつたまゝ、悄氣てゐた。
自動車は、廣小路の雜沓を抜けて、上野公園の、樹の下道を走つてゐた。
「隆一さん、貴君が考へ込んだら、いよ〳〵困るわ。」
久美子は、さういつて車から降りると、サツサと入場券を買つた。小砂利の道を歩きながら、
「貴君、私と遊ばなければよかつたとお思ひになつてるの。」隆一は、かむりを振つた。
「わたし、本當に出發を間違つてゐたと思ふの。貴君が、結婚してもいゝと、ほんとに思つていらつしやるのなら、わたし、生れ變つた氣で、眞面目に、やり直したいわ。そして、善良な女性になるわ。」
「貴女は、僕の家庭が、どんなんだか知つてゐるでせう。僕の家さへ許せば……結婚してもいゝんだがなあ。」隆一の最後の言葉には眞實が、こもつてゐた。
「貴君の氣持が、ハツキリしてゐて下されば、わたし、貴君のお母樣に申し上げるわ。」
「そんなこと。貴女と母と會つたら、おしまひですよ。」
「大丈夫よ。私だつて、考へがあるわ。今までの私の生活は、貴君のお母さんから見れば、眼にあまるものだつたでせうが、これから更生しようといふんですもの、クリスチヤンで教育家である

る貴君のお母さんが、私の願ひを聽かないといふことはないと思ふわ。」
「どうかと思ふな。」
「だつて――とにかく、お母さんに、ぶつゝかる外ないわ。先刻の奥さん、貴君と私との結婚が本當なら、夫婦で結婚式に出席するといふんですもの。私、斷然招待してやりたいの。とにかく、成否は別として、緣談だけはあることにしなければ、私の立場がないわ。」
二人は、ジラフ夫妻の檻の前に來てゐた。彼等の胴體は、熱帶の夢を疊んだ、美しい黃褐色の縞模樣である。黑い硝子玉のやうな眼、長閑に長く〳〵延びた頸、夫妻は仲よくぼんやりしてゐる。
「私達も、結婚したら、家庭といふ檻の中で、ジラフさん達のやうに、ぼんやりしてゐませうね。さうすれば、夫婦間の惱みなんていふことは、何もなくなるわ。」と、久美子はやつと明るく微笑しながらいつた。隆一もやゝ元氣になり、
「しかし、このジラフなんか、三角關係を作るにも、他に相手がないんだもの。人間は、さうは行かないですよ。」と、言つた。

笑中の針

壁の内は、押し迫つた大暮の、片附てしまひたい書類もあつて、豆腐屋の喇叭の通る時分まで、宮川はグヅ〳〵と家にゐた。

書類の整理が、一段落つくと、さてと、これから倶樂部へでも行かうと思つたが、晝頃から青山の墓地へ歳暮のお墓參りに行つた妻と、可愛い長男の歸るのを待つて、顏を見せてから家を出た方が、よいだらうと、妙な義理心もあつて、時を移す裡に、夕陽の影も消えて、いつか蒼茫と暮れかけて來た。怨ぎばのフフアに、朝からのパジヤマに、褞袍を羽織つたまゝ、宮川は、ぼんやりしてゐた。

その時、扉にノツクが聞えて、宮川が答へるよりも早く、顏を出したのは、細君の房子だつた。

「あら……ほんとに、お出かけにならなかつたの……？」

「うん。」

「電氣をつけてもいゝんでせう。」

「うん。」

ピチツと、壁のスヰツチを押すと、外出着のまゝで、そこに立つてゐる房子夫人が、ひどく上機嫌なのを、宮川は心の内で、自分が家にゐたからだなと、推察して、

「遲かつたね。お寺から、他所へ廻つたのかい？」と、優しく問ひかけると、

「えゝ。洋ちやんと、フタバで御飯をいたゞいて、銀座へ廻つたんですの。」と、いひながら、房子夫人は、宮川の顏を、チツと見つめたまゝ、何かまた言ひ出しさうにしながら、ニヤリ〳〵と笑ひ出した。

「何だい！　何がをかしいんだい。」と、宮川もつい吊り込まれた微笑を浮べて、極く穩かに、さう訊ねた。

「今日ね、フタバで、とても珍らしい人に逢つたの。誰だか當てゝ御覽なさいませ。貴方も、よく知つてゐる人だから……」

澁谷のフタバ、澁谷といへば鬼門である——眞先きに、チラと久美子のことが、胸裡に浮んだが久美子に逢つてこんなに機嫌のよい筈はない、といつてニヤ〳〵笑ひは、曲者である。ひよつとしたら、これから風向きが悪くなるかも知れんと、そんな時の警戒にいつも使ふ、殊更子供つ

ぽい表情で、
「見當がつかないね。」と、夫人の顏を見返した。
「堀田の久美ちやんに逢つたのよ。」見つめ合つたまゝ雜作なく言はれて、宮川はギョッとしながら、
「へえ――」と、意外の感を示して、返事をした。
「わたし、貴方に久美ちやんのことを、あんなに疑つてゐて、悪かつたわ。御免なさい！」と、薄ら笑ひを浮べて、房子夫人はいきなりソファの横に來て、腰をかけた。
「あたりまへさア。久美子など、俺がどうするものか。」と、さりげなく言ひながら、宮川は、つと細君から顏をそむけたものゝ、妻が何をいひだすか、心配で堪らなくなつた。
久美子が、妻の前で慎しく振舞つてゐてくれゝばよいがなあと、祈らずにはゐられなかつた。
「えゝ、本當に、すまなかつたと思つたわ。貴方も、隨分お會ひにならないんですつてね。」
「さうさ。」と、宮川はポツとした。
「でも、久美ちやんが食堂に出てゐたとき、二三度お會ひになつたんですつて！」
「うん、あの頃、二三度會つた！」

（愛い奴！　久美子、才人だけあつて、巧くいひぬけたな！　感心、感心）と、思つてゐると、
「でも久美ちやん、とても素晴らしい恰好をしてゐるのよ。小さいけれど、性のいゝダイヤなんか嵌めてゐて！」
「さうかね。」と、また一憂。
「あの娘、感心ですわね。自分で働いて貯めた金を、お父さんにやつて、それで堀田が相場の資本にして、とても當てたんですつて！」
「ほう！」と、宮川は蔭ながら、久美子の出鱈目に感心してゐると、
「でも私言つてやつたのよ。其麼によくなつてゐるのなら、なぜ家へ報告に來ないかつて――あんなに世話を燒せてゐて、よくなつたら、てんで寄附かないなんて、非道いといつてやつたのよ。」と、少し雲行が不穩となつたので、
「しかし、よくなつてゐて、來ない方が助かるよ。しげ〳〵來るやうになれば、どうせ無心に來るんだからな。」と、よそながら久美子のために辯解すると、
「それもさうね。」と房子夫人は、巧に長閑な表情をしながら、「でも、まるきり來ないなんて、少しをかしかない？」

「うん、しかし堀田は他人の世話になりながらも、横着者だし、久美子はあれで、モダンガールだから、義理とかお務などは出來ないんだらうな。」と、宮川は、しきりに取り繕ふのを、房子はチラと皮肉な微笑を見せかけたが、急に朗かに笑ひだすと、

「でも、とても可笑しいことがあるのよ。想像も出來ないほど、可笑しいことなのよ。」と、房子夫人は宮川の顏を惡戯つぽく、眺めながらくつ〳〵と笑ひつゞけた。

宮川にとつては、とても氣持の惡い笑ひである。騙されたと見せて、その癖、腹に一物も二物もある笑ひ方である。宮川は、妻が何をいひだすか、心配で堪らなくなつた。

「可笑しいことつたら、何だい。」待ち切れなくなつて、此方から訊いた。

「久美ちやんが、許嫁だといふ學生を、連れて來てゐたのよ。」

宮川は、ハツとしながら、直ぐに（それも、久美子が夫人を欺く手段の一つではないか）と、考へながら、一向無關心な樣子を裝つて、

「ちつとも、可笑しい話ぢやないぢやないか。」と、いひ返すと、

「それが、とても可笑しいの。その學生さんが、――どうして知合になつたのでせうね、一寸驚くぢやないの？　美爾子さんの甥なのよ。和田伊佐子女史の息子さんなのよ。あんな嚴格な家の

息子さんが久美ちやんと、婚約するなんて、一寸考へられないけれど、久美ちゃん、とても大眞面目だから、本當なんでせうね。だから、私、結婚式には貴方と一緒に出席するつて約束して來たの。」

そこまで言はれて、始めて宮川は夫人の皮肉な笑ひの意味が、はつきりしたと思つた。夫人の心の中では、久美子に對する疑ひは、ちつとも晴れてゐないが、久美子が若い學生と一緒にゐたこと、またその學生と婚約だといつたのを、奇貨措くべしとなし、舞臺をそのまゝグルリと廻して、巧に良人にそれを報告して、嫌がらせ竊らせて、日頃の腹癒をなし、併せて良人と久美子の間に水を差さうといふ深謀遠慮、一石二鳥の戰術なのである。

宮川は（こ奴！）と、腹の中で思ひながら痛し痒しで手も出せない。

「そいつあ、本當だとすれば、結構な話ぢやないか。」と、白つぱくれて言つたが、さう言つてすましてゐられるほど、久美子を信用してゐないから、腹の中には早くも不安と嫉妬とが湧いてくる。すましてゐても表情に暗い影がさす。

それは、夫人の思ふ壺に入つたわけであるから、夫人はます〳〵朗かに、

「えゝ。本當に、結構だわ。でも、久美ちやんて、相當なもんね。あんないゝ家の息子さんを巧

く自分のものにするなんて……」と、笠にかゝつて話し續けようとするのを、宮川はもう流石に、合槌を打つ心の餘裕もなく、

「おい！　もう夕刊來てゐるだらう。」と、そんな話はどうでもいゝといふ顏をすると、

「えゝ、來てゐますでせう。久美ちやんが、旦那さまにくれ〳〵も宜しくと申してゐましたよ。」と、夫人もさりげなく言つて、階下へ夕刊を取りに降りて行く。

夕刊を取りに行く夫人の後姿を、さりげなく見送りながら、宮川の心はひどく動搖してゐた。澁谷の隱家の隣人が、人もあらうに、和田工學博士か。いつか行きずりに挨拶したとき、何か見覺えのある連中だと思つたのも、當然である。惡い所へ引越して行つたものである。

氣紛れで蓮葉で、油斷のならぬ久美子ではあるが、あんな反感を抱いてゐた隣家の青年と婚約するなど考へられないが、しかし、フタバで一緒に食事をしてゐるなど、怪しからぬことである。

婚約云々は、久美子の出鱈目にしろ、隣が和田伊佐子女史の家だとすると、妻と美禰子さんとの關係から、自分が久美子の家に通つてゐることなど、遠からず女房に知られてしまふ。困つた！　その方の手當をするのが急務である。これから、直ぐにでも久美子の家へ行つて、事の次

第をはつきりと訊き、女房への善後策を、取らねばならぬと思つた。

房子夫人は、夕刊を持つて上つて來たが、直ぐには立ち去らず、何がなしに、宮川の身の廻りを取り片附けてゐた。宮川は、新聞でまるつきり顏をかくしながら、これから家を出かけて行く、自然な口實を考へてゐた。

「今夜は、家で御飯召し上るの？」と、夫人の方から切りだした。

「さうだな。一日中家にゐると、欠伸一つ景氣よく出ないほどボンヤリしてしまふ。」と、それとなく呼吸をはかると、夫人は機嫌よく、

「どうぞ、お出掛けなさいませな。御遠慮なく。」

「あつさりしてゐるんだねえ。」と、揶揄氣味に、宮川は大柄な夫人が、小腰を蹋めて、机の下に落ちてゐるパイプを拾ふのを、眼で追ひながら言つた。

「だつて、どつちみち、お出掛けになるんですもの。お止めしたつて、無駄ですもの。」と、夫人は笑ひながら言つた。宮川も苦笑しながら、

「もう洋服は、面倒だ。着物にしてくれ。」と、いふと、夫人はバタ〳〵と階下へ降りて行つた。

いつもと、違つた素直さが、氣持が惡く、萬事知られてゐるのなら、またその覺悟もあると、

度胸を決めて、階下へ降りて行つたが、夫人は足袋、長襦袢に、結城の着物に下着をキチンと揃へて、ニヤ〳〵微笑しながら、良人を迎へた。その微笑は、これから久美子の家へ驅けつけて、一騒ぎをする良人を見透してゐるやうに、皮肉なものに取れるのだつた。

江戸の敵

家にゐさへすれば、忽ち驅け出して來て、（あら……）とか、（いらつしやいませ……）とか、持前の甘つたるさで、粘りついて來る女であるのに……敷臺に飛び出したのは女中だけで、ゐないのかと目顔で訊くと、

「いゝえ。お二階にいらつしやいます。」と言ふので、其のまゝ二階へ上らうとすると、階段の上に立ち塞がつて、

「階下のお座敷で——一寸待つてゝ下さい。いま、すぐ參りますから。」と、言つた。久美子の覬面な他人行儀に、宮川はちよつと身内が引きしまつた。

暫く待つてゐると、いつになくキチンと帶を締めて降りて來たが、朱塗の胴丸火鉢の向う側に

兩手をピタリと揃へて、伏目に坐つた樣子が、只事ならず、眉一つ動かさない澄し方だつた。

「どうしたのさ……」と、宮川が、わざと事もなげに冗談めかして口を切つて、お行儀よく並んでゐる久美子の手を、輕く打つた。打たれると同時に久美子はその手先を、いかにも汚はしいといつたやうに、すぐ引込めて、今度は膝の上にキチンと重ねてしまつた。

「どうしたんだい！」と、まじ〳〵顔を見詰めると、

「奥樣から、萬事お聞きになつて、いらしたのでせう！」と、切口上だつた。

「聽いたよ。聽いたから、取るものも取り敢ず、驅けつけて來たんだが……」

「それなら、いゝぢやありませんの。」と、ニコリともしない。

かういふ情景になつてしまつては、宮川が久美子の出鱈目を叱る立場に發展させるには、大變である。最初はある程度まで、久美子の不機嫌をあやしてゐなければならない。

「女房に、何を言はれたのだい……」

「それは、色々とね。でも、どんなことを言はれても、仕方がないんですけれど……奥さま、どんなことを言つていらしつて……」

「君が、お隣りの學生さんと一緒に、食事をしてゐたといふ……」

「さう。」
何處を風が吹くといつたやうな返事の仕方で、そのまゝ伏目になつてしまつた。
「僕が、一寸來ないと、すぐ羽目をはづすんだな。だが、その人と結婚するなんていゝ加減な出鱈目をいふから、お隣りの人達が美禰子さんの親類なんていふことが分つて、今までのことが、すつかり女房に暴露てしまひさうぢやないか。早速家を越すにしても困るぢやないか。」
「御迷惑をかけて、すみませんですから……」と、言ひかけて、またしんと靜まり返つてしまつた。
久美子に、靜まり返られると、宮川は不安になつて來た。この間から、少し態度が、をかしいし、本當に隣りの學生が好きになつて、本氣に結婚でもする氣になつてゐるのではあるまいかと、氣持が急に複雜に動いて來た。
「ですから——どうしたといふのさ?」と、あやし嫉すやうに、宮川は久美子に問ひかけた。
「ですから——私もう、お暇を頂きたいんです。」
その言葉は、宮川にとつて、全く寢耳に水だつた。彼も流石に、青白んで、
「僕と別れて呉ろといふのか。」と、氣色ばんだ。
「えゝ。貴君には、いろ〳〵御迷惑を掛けますし、奥様からは人間でないやうに、やつゝけられ

ますし——私、つく〴〵こんなことしてゐるのが、嫌になりましたの。」
晝間房子夫人に、苛められた腹立たしさが、宮川を前にして、新しく胸にグツとこみ上げて來たのか、ホロリ〳〵と涙が頰を傳はつてゐた。宮川は、やゝ暫く默つてゐたが、
「別れるといふなら、別れてやつてもいゝが、君が藝妓か何かで、僕が金で落籍て此方の氣の向いた時だけに通つてゐるといふ關係なら、君のいふ筋も通るが——少しはお互ひに愛情があつて、始めた生活ぢやないのか。そんなに簡單に片をつけちや、俺に惡いとは思はないか。もう少し落着いて考へて見たらどうかな。」と、宥るやうにいふと、
「そんなこと同じことですわ。女がこんな生活をしてゐると、矢張道具扱ひにされてゐるやうな氣がしますわ。私が、子供で考へが足りなかつたんです。奥さまから、今日あんなに、酷くやられない前から、うす〳〵考へてゐたんです。本當に別れて戴きたいわ。」
相手は自分と十八も年の違つてゐる子供だ。愚圖々々いつたところで、落ちる所は知れてゐると、心のどこかで、タカをくゝつてゐたのが、頗る怪しくなり、こんなにもスカリといはれて見ると、宮川は愛情とも未練とも執着とも、何ともつかない愛慾の心が、猛然と湧き上つて來て、放しともなさで、一杯である。

「俺が、いつ君を道具扱ひにした。君なんかより女房が、さういへば、俺は一言半句もないよ。もう二三年、まるで夫婦らしいこともなく、暮してゐるんだもの。しかし、君の方は、合法的な關係でないだけに、出來るだけ愛してやつてゐるつもりなんだ。かういふ關係は、お互の愛情だけが、頼りなんだ。君も、僕がいつでも別れられるやうに、好きでも嫌ひでもないのなら、僕を今まで、せい〳〵通はせることもないぢやないか。さん〳〵無心をして置いて、今更間違つてゐたのなんのつて、妙な理窟をいひだすのは止してくれ。」

「……」

久美子が、うなだれたので、少しはこつちの言分を聽いたと思ふと、宮川も、やうやく腰を据ゑて、聲もいら〳〵しく、

「僕が仕事が忙しくつて、ちよつと來られないと、學生などを連れて食事に行く。だから女房なんぞに、見つかつて、言はでものことを言つたり、言はれなくつていゝ事を言はれたりするんだ。些つとは僕がしてやつたことを考へたら、女らしくありがたい、すまないと思つたらどうだい。僕が偶に來られない時くらゐ、慎しく家に居られさうなものぢやないか。」といひ進むと、久美子はキツと顔を上げて、眼と眼を見合せ、躊躇はずいひ返して來た。

「女らしければこそ、こんな事になつたんですわ。貴君は、私にして下さつたことを、一々恩に被せていらつしやるけれど、今日なんか、嵌てゐるダイヤまでが硝子玉か何かであれば、奥さまの前で、かうまで小さくならなくつても濟むのにと思つたわ。結局、こんなもので縛られてゐる生活といふものが、どんな慘なものかといふことが分つたんですの。貴君とお別れするのだつたら、買つて頂いたものは、みんなお返しするつもりだわ。」

いふことが、ます〳〵不穩である。宮川は、常からかう思つてゐる。お金や物質で女の心を繋ぐといつて非難する人があるが、男性の女性に對する愛情は、一番はつきりと物質に換算されるものだ。千圓の物を買つてやれる女は、五百圓の物しか買つてやれない女よりも、遙に愛してゐるのだと。そのことは、久美子へも幾度も話して聞かしてあるのに、女の心を繋ぐと、宮川の信じてゐる物質的榮華を、久美子に否定されては、彼の自信は忽ちに、ぐらついてしまふのだつた。

久美子の心が、かうまで變つたとすれば、彼女は本當の戀愛に、目醒めたとでもいふのであらうかと思つて、

「ぢや、何かい。女房に言はれない先から、その學生が好きになつて、僕と別れて、結婚しようとでも想つてゐたのかい。」と、やゝ器量の悪い問ひ方をした。

「いゝえ。さうぢやないわ。奥さまが、私と貴君との間を、テツキリそれと睨んでゐたゝまれないやうな皮肉を仰言るんですもの。私苦し紛れに、隆一さんと許嫁だと言つちやつたの。でも、後で隆一さんに話したら、結婚してもいゝと言つて下さるから、私も奥さんのおこぼれを頂戴して、奥さんに何といはれても、グウともいはれないやうな生活をしたいと、本氣で考へ出したの。」

話を聽いて見れば、久美子らしい氣紛れであるが、しかし、それを裏づけてゐる感情は、いつもよりは、ずーつと深いものだし、それにいきなり隆一さんと、相手の名が、久美子の唇から愛稱で呼ばれると、宮川の眼の前が、くら〳〵と怪しくなつた。

宮川は、流石に默つてしまふ外なかつた。久美子の今までの生活は、兎もあれ、今考へてゐることだけは、女としては本筋で、それを突きつめて、考へてゐるとしたら、いゝ加減な氣安めや誤魔化しでは、どうにもならない事である。

「それに、奥さまつたら、私風情に、結婚なんか出來るかつてやうに、あんまりな事ばかり、仰言るんですもの。私だつて意地がありますわ。石に齧りついても、結婚する氣にならうぢやありませんか。」

師直ではないが、ハツキリ先刻の喧嘩に苛められた、意趣返しである。宮川も、平生の冷靜さを半失つて、

「ぢや、己はどうなるんだ。己をどうして呉れようといふんだ。己が、平生甘やかして、お前を束縛しなかつたのを、いゝ事にして、別れるの、結婚するのなんて……」と、やゝしどろもどろに、食つてかゝると、

「貴君は、どうにもならないわ。私が結婚をすれば、奥さまだつて、およろこびになるし、お寂しかつたら、その方なら辛抱すると、奥さまがおつしやる藝妓でも、女給でも、お世話なさるといゝわ！」

「默れ！」怒鳴れば、負けであるが仕方がない。

「でも、さうぢや御座いませんか。」

「うるさい。そんな憎まれ口をきく奴があるか。」

思はず、火桶を掻きのけて、久美子の頬に手が、飛びさうになつたが、女性に對して今迄、手荒い事をした覺えのない平生の自慢を思ひだして、ヂツと眼を据ゑて、危く堪へた。

人は、理想なしには生きがたいものか。樂天的で、現實萬能のやうに見えた久美子でも、やは

り何かしら變つた生甲斐のある生活に、憧憬を持つてゐるのか。その憧憬に、女房に對する意地が、伴つたとでもいふのか。この女なら、向うも此方を愛してゐると思ひ、こちらも相當本氣に愛してもいゝと思ひ、やゝ有頂天になつて通つてゐたのも、一人相撲に終つたのか。

年齢の相違、不自然な關係、昔、自分の家にゐて、女房と一緒に暮してゐた事など、いろ〳〵無理があつたのだと諦めようとしたが、寂しさの底にひきずり込まれるやうな嫌な氣持は、自分ながら情ない位だつた。だが、哀願したり、嚇しつけたりする事は、宮川の趣味でない。

「よし分つた。君の心が、こんなに淺墓だとは思つてゐなかつた。ぢや、今日限り會はないことにしようね。君にやつたものは、みんな上げる事にしよう。女に一旦やつたものを、取返すほど、己は下品ぢやないんだよ。君の今後の幸福も祈らないし、また不幸も祈らないよ。ぢや、さよなら。」と、潔く立ち上つた。

久美子は、項低れて流石に言葉がなかつた。

女、女たらずとも、男、男たれといふ、女性關係における騎士道、それは平生宮川の信奉するところである。

宮川を送りだすと、久美子は玄關の柱に、ぐつたりと背を寄せたまゝ、女中が座敷の茶道具を、

片附て下つて行く物音を、ぢつと聞きすましてゐた。

手足の先が冷たく、身體の心が、カーツと熱くなり、ひとたまりもなく、涙が頬へ筋を引いた。

緣談

次の朝も、久美子はいつもながらの寢坊だつたが、眼覺めの時の氣持が、いはん方なく、悲しかつた。

彼女は、宮川を綺麗さつぱりあしらつてしまつたが、宮川がなほ忠犬のやうに、自分につきまとつてくれることを、望んでゐないでもなかつた。

奥さんに對する鬱憤、常日頃園はれ者の不滿や、結婚して見たいなあといつた出來心が、かち合つて、氣持が自分も豫期しなかつたほど昂揚してしまつて、自分の興奮に、我とわが身を委せてしまつた形である。

（今日降れば、お正月は好いお天氣ですね）

誰の聲か分らない、出入りの商人が女中と立話をしてゐるのが、妙にはつきりと二階に響き上

つて來る。

久美子は、床から辷り出して、窓掛を開いて見た。

翩翻と雪が飛んでゐる。空を罩めて、夥だしい大粒のぼたん雪が……久美子は、またベッドの中にもぐり込んだ。

（この家も、少しづつ解散の準備をしなければならぬが、雪だもの、もう少し寢てゐよう！）

久美子は、女中を呼んで、朝刊を持つて來るやうに命じた。

社會面を開けて、ぼんやりと、社會の出來事を漁りながら、時々何を讀んでゐるか分らないほど宮川のこと、隆一のことを考へてゐた。宮川のことを考へると悲しく、隆一のことを考へると、頼りなかつた。

房子夫人の笑顔だけは、はつきりと口惜しかつた。宮川のことは、あまりに男らしくサバ〳〵と出られたので、氣の毒だつた。

さて、隆一との緣談のことだが、自分で安請合に、何とかするといつたが、考へて見ると容易なことではない。工夫も策も浮んで來ない。こんな時、相談相手になつて呉れるよいお友達でもあればいゝんだが。久美子は、社會面から婦人欄に眼を移した。ふと、そこにある相談欄に眼が

ふれた。擔當者は、隆一のお母さんである和田伊佐子女史である。

女性相談

同棲後、人間の變つてしまつた内緣の夫と別れたい。

といふ問の見出しに、

貴女の努力に依つて家庭愛を醸成して、正當な結婚へ！

といふ答の見出しである。

久美子は、和田夫人がしたり顔で、もつともらしい返事をしてゐるのを讀むと、可笑しかつた。そのうち、急に、（これだわ！）と、獨り語をいふと、ニヤ〳〵笑ひ出した。彼女は、自分の場合を和田夫人に相談しようと考へついたのである。そして、和田夫人の問答に凡その想像をつけると、すつかり樂くなつてしまつた。

×

緣談

久滋の經過は、その後も引きつゞいて、良好であつた。

健康で働いてゐると、仕事と友達の交際と、遊びとのために寧日なく、自分のしてゐることを、顧みて批判する暇もないが、かうして病院にゐると、全く世間と隔絶されて、いろ〳〵なことを

考へるのだつた。殊に、劇場關係の見舞人などの中には、久滋と美禰子との關係を、瀧山博士のやうに、素直に取つてくれる人など、極めて少く、久滋が生命に別條がないと知ると、冗談まじりの皮肉をいつたり、揶揄たりする人がゐた。

「久滋先生、あんまりドライヴが過ぎたんぢやありませんか。」

新進賣り出しの澤村何之助といふ役者など、平生の遊び友達だけに、入つて來ると、いきなり看護婦の前も憚らざる雜言だつた。

そんなことを考へると、久滋も今までの結婚回避を清算して、早く誰かと結婚して、君子人瀧山氏の暗々裡に傷つけられてゐるかも知れない名譽を、回復してやりたかつた。

美禰子も、陰に立つ噂を恐れてか、あまり顏を見せなかつた。瀧山氏が、二日に一度は訪ねて來、二十分位は時々モヤ〳〵笑ふだけで、話しもなく坐つてゐてくれた。

午後三時頃になると、惠美子が毎日缺かさず、春の風のやうにやつて來る。

「今頃、こゝへ來る口實が、とてもむづかしいの。叔母さんのお見舞といふのも、もう利かないでせう。だから、お友達と手藝をしてゐることになつてゐるの。」といつて、膝の上に、クッションを擴げて、黃や桃色や綠の絲を針につけて、小鳥の型を刺しながら話しかけてくれる。そして、

久滋が話すことを重みのある晴やかな眼付きで、ぢつと聞き込んでくれる。

久滋は、靜かにベッドにゐて、紫に光る惠美子の髮を見、こまかな息づかひを聞いてゐると、病院にゐるのではなくホテルにでもゐるやうな氣がする。

「明日から、御本を持つて來て、讀みませうか。」

「いゝですな。」

「面白くなくても、文章の綺麗な本を、持つて來るわ。さうすると、私の朗讀が、上手にきこえるから。」

「どんなものを讀んで下さる。」

「オネーギンか、卽興詩人か、レルモントフの現代の英雄か何か……」

「惠美子さんは、叔母さんに似て、文學愛好者だな。」

「さうでもないわ。叔母さんと比較しちやいや。私にとつて不利益だわ。だつて、私は小ちやいんですもの。」

久滋は、惠美子が、またとなく愛しく思へた。

「いや、貴女はとても悧巧で、優しくて可愛いし……第一、美禰子さんのやうに狡くないや……」

と思ひがけなく、最後の一句は、美禰子に對する今までの不滿を言つてしまつたので、久滋はハツとして、まだ回復し切らない青白い頰が、眞赤になつた。

惠美子は、久滋のいつた狡いといふ意味が分らなかつたので、説明を待つやうな思ひを、眼の中に漂はせて、ぢつと久滋の眼を追つてゐた。

久滋は、その惠美子の無心と言つてもよいほど、子供らしい若い眼に迫はれると、彼も急に二十一、二の無心な心に返るやうな氣がして、

「僕は、ほんたうに貴女が好きだ。ピアノをわけもなく彈いて呉れたときから、好きだつたんだな……」といつた。

惠美子の頰が、少し赤くなつたが、黑い瞳は、不思議さうに、まだぢつと、久滋の眼をみつめてゐた。

「實に、綺麗ないゝ眼だ。貴女の眼は……」と、言つてしまつた。

「久滋さんの眼も、綺麗よ。」惠美子は、生々と大膽に、さういふと、赤くなつて、刺繍に針を入れた。

「明日も來て下さる？」

「えゝ。貴君が退院なさるまで。でも日曜は駄目よ。お母さんが、家にゐるんですもの。お父さ

んだけなら、巧く行くのよ。」

女らしい優しい、そのくせ美禰子の娘時代と比べると、センチメンタリズムの少い物いひが、魅力であつた。

美禰子と一緒にゐることが、冷い清い樹蔭にゐる好もしさなら、惠美子と一緒にゐることは、陽に輝く花園にゐる朗かさであつた。

久滋は默つた。窓からさし込む仄かな、夕陽の縞の光の中で、「刺繍をする女」といつたやうな美しいポーズの惠美子を、見つめてゐた。

無言で居れば、無言で居られるほど、信じ切つたやうなお互の隔てなさが、現はれ始めた。

×

惠美子は、病院の歸りに小説を借りるつもりで、叔母の家に寄つた。

美禰子は、あの事件以來、目に見えて惠美子が、久滋に接近して行くのを知つて、初めは自分の心を亂しはせぬかと心配したが、しかし結果はまるで反對だつた。

自分でも思ひがけなく、それ故に氣が紛れるといふ風だつた。

眞實に、久滋が惠美子を愛してくれるのなら、自分が仲に立つて、二人を結びつけようと思つ

でゐた。

彼女もまた、「町内で知らぬは亭主云々」といふ通り、悪意に充ちた世間が、あの事件を瀧山氏のやうに、素直に取つてくれるとは思はなかつた。さうしたゴシップを未然に防ぐために、久滋と恵美子との間をまとめて、彼女を知る人達に、(なんだ。さういふ譯だつたのか)と、手を拍たせ、それと同時に、瀧山氏が、心の奥のまたその奥で、萬一疑つてゐたとしたら、その疑ひをも、晴したかつた。

それに、コリーの耳を弄りながら、書庫へ小説を捜しに行つた恵美子の樣子が、思ひなしか、いつもよりずーつと、大人びて物靜かなのが、氣になつた。久滋との間に、もう何かあるのかしらとさへ思つた。

「さよなら。」と、二、三冊本を抱へて、早くも歸らうとする恵美子の傍へ立つて行くと、美禰子は、

「どうしたの。何を持ち出して來たの?」と言つて訊いた。

「レルモントフに、プーシキン、これ一寸借りるの。」

「それはいゝけれど……」と、美禰子は肩に右手をかけ左の手で、恵美子の顎をもち上げて、

を見ながら、

「元氣がないぢやないの。久滋さんと喧嘩でもしたの。」と、訊いた。

「いゝえ。」恵美子は、靜かに叔母の手から、顎を引いた。

「まあ、何て鹿爪らしい返事をするの? まあ、恵美ちやん。貴女もつとお洒落をしなさいよ。そんな可愛い顔をしてゐる癖に、生際の生毛を剃らないなんで。どれ一寸剃つてあげるわ。」

恵美子は、驚いたやうに、美禰子を見上げてゐた。

恵美子を三面鏡の前に坐らせると、西洋剃刀で、生毛にかくれて男の子のやうな感じのする恵美子の富士額を、綺麗に描き始めた。

「今日は、久滋さんと、どんなお話をしたの?」

「私の眼が、綺麗だと賞めて下さつたわ。」と、言つてすぐ恥かしくなつたか、赤くなつた。

「恵美ちやん。久滋さんが、貴女を好きだとしたら、どうするの?」美禰子は、鏡の中の恵美子の顔を眺めながら、いきなり言つた。

恵美子は、その言葉を、久滋からでも聞いたやうに、眞赤になつて鏡の中の叔母の口元を、ちつと瞶めた。

「貴女、お嫁に行つてもいゝと思つてゐるの？」
「いや。叔母さんは、餘計なことをいふから。いや、いや。」と、身を跪きながら、ふり返つて叔母に武者振つくやうにすると、その胸に顔を埋めて了つた。
「まあ！　惠美ちやん、吃驚するぢやないの。いきなり飛びついてなんか來て……」と、優しく肩に手を置きながら、なほも耳元へ、
「御免なさいね。こんな事をいひ出して。でも惠美ちゃんが、そんな積だつたら、私が、お母さんに、話して上げようと思つて……」
惠美子は、さう囁かれると、吃驚したやうに顔をあげ、叔母の顔をちらと見たが、今度また顔を伏せると、柔かにクス〳〵と鼻を鳴らして啜泣きを始めた。
それが、甘えたテレ臭さを紛らせる、嬉し泣きであることが、美禰子には、感ぜられた。
姉に話す前に、自分の氣持を、――惠美子の氣持を久滋に話して、彼の氣持を確めたいと、翌日美禰子は、晝少し前に久滋の病室を訪れた。
衝立の蔭から、美禰子が現はれると、久滋は思ひがけない思ひがしたと見え、
「あゝ、貴女でしたか……」と、やゝ狼狽へた表情で、美禰子を迎へるのであつた。

「如何ですの？」
「有難う。もう、大分痛みを感ずることが、少くなりました。貴女は……？」
「私は、もうすつかり元通りよ。何から何まで、元の軌道に戻つたといふ譯ですの。」と、言つて美禰子は、一種特別な微笑を浮べた。
「さうですか。」久滋も、同じやうな笑ひで答へた。美禰子は、話の繼穂が絶えない中にと、
「そして、私、今度新しい役割を務めようと思つてゐますの。」
「新しい役割、どんな役割です？」明かに、久滋は怪訝な表情で訊き返した。
「叔母の役割。貴君には、よきお友達の役割。實はね、惠美子が、とても純な氣持で、貴君を好いてゐますから――貴君だつて、御存じでございませう――。だから貴君のお氣持を訊かうと思つて。」
と、いふ意味ありげな物いひに久滋はすべてを悟り、美禰子が、相變らず彼女らしく忽ち悧巧に立ち廻つてゐるのに、ある忌々しさを覺えたので、一寸一言、皮肉な征矢を報いたかつた。しかし、その瞬間、彼の心は一歩後に下つてゐた。彼自身も、考へて見れば、惠美子のやうな素直な年若い少女と結婚した方が、幸福であるし、それに自分達に立つかも知れないゴシツプを防ぐ

ことだつて出來るし、……

（僕も、結局自由主義氣取のよき良人にならうか）と、少し自嘲の氣持を交へながら、次なる美禰子の言葉を、無言で待つのであつた。

美禰子は、しかし敏感に、久滋の苦い薄笑ひの、あらゆる意味を見て取つて、少し話の續きをかへて、

「過去の事を考へる奴は鬼になれつていふ諺がないかしら。だから、新しく考へ直す方が、いいんぢやない？」

「全く。僕達は、現實と過去との間を、さ迷ひすぎましたよ。現實に飛込む勇氣もなくて過去だけで我慢することも出來ず……」

「その話は打ち切り。ねえ、久滋さん、私惠美子を貴君のお嫁さんに、仲人したいの。」

「して頂きませうか。」

久滋は、言葉だけは不敵に、しかし、多少忌々しげにいつた。

他の緣談

暮の二十九日に、房子夫人から美禰子のところへ電話がかゝつて來た。

「美禰子さん。わたし——房子。御無沙汰してゐますわ。この間は吃驚したわ。でもお怪我がなくつて、結構でしたわ。お正月になつたら、御年始かたゝ遊びに行くわ。」

電話でも、一人でお喋りを續けるので、美禰子はやつと間を計つて、

「貴女も、お變りないの？」と訊き返すと、

「いろ〳〵あるけれど、今度行つたとき、ゆつくりお話するわ。それよりも、私一寸訊きたいことがあるの。」

「えゝ。」

「ねえ。貴女の澁谷のお姉さまね、あの方の御總領ね？」

「隆一ですか。」

「隆一さんと、おつしやるの？　あの方最近に、何か御緣談があるのぢやない？」美禰子には、

全く寢耳に水なので、
「へえ！　私、ちつとも知らないわ。」
「貴女が、知らなければ、ないんでせうね。」
「といふ譯もないでせうが、まだ學校へ行つてゐるんですものね。」
「でも、來年の四月卒業ぢやないの？　卒業したら、直ぐ……なんて言ふことになつてゐるのぢやない？」
「かも知れないわ。」
「ぢや、つまり貴女は、何にも知らないのね。」
「さう。」
「貴女最近に、澁谷へいらつしやる？」
「えゝ、行かなきやならない用事がありますの。年が明ければ行かうと思つてゐますの。」
「ぢや、その時一寸その事確めて下さらない？」
「畏まりました。でも、貴女隆一の結婚に、何か御關係でもあるの？」
「えゝ、一寸ね。それは、いづれ來年話すわ。ぢや、いゝ年をお取り遊ばせ、さよなら。」

「貴女も。さよなら、失禮。」
遽だしい房子との應對に、どうした緣談か訊き質す暇もなかつたが、隆一にもし緣談がありとすれば、それは耳よりな話である。花嫁さんが、和田家に來るとすれば、惠美子は鬼千匹の小姑になる。もつとも、和田の姉は、相當むつかしい姑だらうが、人なつこい惠美子は、忽ち兄嫁を誘つて活動のお伴でもさせさうな、朗らかな小姑ではあらうが、しかし隆一が結婚する前に、惠美子を先に片づけてはと、久滋の緣談を持ち出すよいキツカケになることは、たしかである。
房子からの電話の、事實なれと祈りながら、美禰子は靜かな篤學者の家庭にも、流石は忙がしい年の暮の、心づかひにかまけてゐた。
正月の三日に、美禰子は、電話をかけて姉の都合をきゝ合はせてから、澁谷の家を訪ねて行つた。
いろ〳〵な仕事に關係して、年中忙しがつてゐる姉も、流石にお正月は、暇なのだと思つて行つて見ると、年末年始休みであつた新聞が、四日から常態に復するのだが『女性相談欄』の原稿がないので、至急書いてくれといふ使が來たとかで、二三回分書くから、一寸待つてくれといふので美禰子は姉の居間で、ぼんやり待たされた。

惠美子は、病院へ行つて留守、和田氏も隆一も留守だつた。

久滋と惠美子とには、少し安請合に引き受けて來たが、頑固な姉の事だし、久滋の職業が姉の氣に入るかどうかなどと思ふと、手輕に（うん）と言ひさうもない氣がして、少し早まつたやうな後悔で、美爾子は妙な微苦笑が、獨りでに涌いてくるのだつた。

姉の伊佐子女史は、やつと二階の書齋から降りて來た。仕事を片づけた後は、誰しも愉快らしく、眼鏡をハンケチで拭きながら、上機嫌で美爾子と火桶をはさんで對坐した。

「貴女も、何時迄も子供がないからといつて、娘のやうに出鱈目をするのね。」

いきなり、さう言はれて、

「えゝ……」と、顏を上げると、伊佐子女史はニコ〳〵しながら、

「瀧山さんに、よつぽど監督不行屆だつて、手紙を出さうと思つてゐたのよ。新聞になんか出ると、この頃のやうに有閑夫人の問題が、喧ましい時は、何でもなくつても、不體裁よ。ドライヴなんていふことはお止しなさいよ。」

眞向から、きめつけられても、流石は姉妹、久滋との事など、些つとも疑つてゐないので、美爾子はホツとして、

「へい。へい。畏まりました。でも、一緒に乘つてゐた久滋さんて方、瀧山のところへよく來る患者で、瀧山とはお友達になつてゐる方なの。惠美ちやんなんかも、よく知つてる方なのよ。橫濱に用事があつて、一緒に行つて頂いたばかりに、あんな事になつて、お氣の毒な事をしてしまつたんですの。」と、圓轉滑脫に自分の立場を分明にすると、

「勿論、さうでせうけれど、世間といふものは、五月蠅ものですからね。」と、伊佐子夫人は、姉らしく慰めかつ戒めた。

「今日實はね、今の久滋さんの事で伺つたんだけれど、——若しかしたら、お姉樣に叱られさうだけれど——一寸お話があるのよ。」

「どんな話ですか。」

「その久滋さんといふ方が、私の家で惠美ちやんを二三度見て、是非お嫁に欲しいといふんですけれど。」

「お嫁に！」

話が思はぬ方に、逸れたので、伊佐子夫人は一寸吃驚したらしく、眼鏡の奥で、疑り深さうに小さい眼を、キラリと光らせて、妹をぢつと見つめた。

「え丶。」と、相手の驚くのを輕く受けて、
「だつて、お姉さんは、何時か惠美子は、學問の方は、あまり思はしくはないから、塾へは、入れておくもの丶、良緣さへあれば、塾の方は何時でも止させるなんて、仰言つてゐたぢやありませんの。」
「そりやまあ、そんな事、言つてゐた事もありますがね……」
「塾は、あと、まる三年か丶るんでせう。早くお嫁にやつた方が、い丶と思ふわ。」
「だつて、いきなり藪から棒ぢや、吃驚しますよ。一體、久滋さんといふのは、劇場の、何かですか？」
「文藝部長ですの。」
「文藝部長！　ほう、ぢや脚本か何かを書くのですか。」
「あまり、自分では書かないやうですが、脚本の選擇や、演出のことを、いろ〳〵やつてゐるんですよ。」
「ぢや、つまり文士ですな。」
「さあ……」と、いつたが、平生から、姉の文士嫌ひ、小說嫌ひを思ひ出して、少しタヂ〳〵と

なりながら、
「さういふ事になりますかね。」と、言葉を濁した。
「やつぱり文士ですよ。文士なんていふものは、信用が置けませんからね。一般に品行が惡くて、碌な事をしないぢやありませんか。」と、すつかり教育家口調になつてしまつた。
「でも、お姉さん。久滋さんは財產が、おありなのですよ。」
「ほう、どうしてゞす。」
「お姉さん。日本橋に、丸久つて有名な木綿問屋があるの御存じ？」
「え丶知つてゐますよ。あすこは四五百萬圓あるといふ話ですね。」
「當主は久滋吉兵衞といふんでせう。久滋さんは、その人の　弟　ですよ。」
「そりや、普通の文士ではありませんね。それぢや、問題が違ひますね。」姉は、膝をのり出さんばかりに、乘り氣になつてゐた。
美禰子は、敎育家の癖に、蓄財の念が强く、名聞利慾には、人一倍敏感な姉を、心で輕蔑しながら、しかしこんな場合には、さうした弱點につけ込むほかはないので、
「男の兄弟は、久滋さんと二人ぎりよ。だから、久滋さんが分家するとなると、二十萬や三十萬

の財産は、默つてゐても分けてくれるんでせう。兄さんと久滋さんとの間には、女の姉妹ばかりで、一番上のお姉さんは、銀座の鶴屋商店へお嫁に行つていらつしやるのよ。」

「あすこも、たいした財産家ださうですね。」

伊佐子夫人は、ダラシなく話に乘つて來た。美爾子も、やゝ脂が乘つて來た形で、

「その次のお姉さんは、三井物産のどつかの支店長をしていらつしやる、林田さんとか何とか、仰言る方の奥さんよ。」

「その次のお姉さんは、これは山上さんといふ貧乏華族へ行つてるの。持參金を澤山持つていらしつたといふ噂よ。」

「ほゝう。それは、男爵ですか、子爵ですか。」

「公家華族だから、貧乏でも子爵位ぢやないかしら。」

「子爵夫人、わるくありませんね。ぢや惠美子をさし上げても、ちつとも恥かしくはありませんね。みんな名門揃ですね。」姉は、美爾子の方で、少し厭になるほど、感に堪へたといふ顏をしてゐた。

「その方、年はいくつですか。」

「私より、二つ上だから、明けて三十でせう。」

「ぢや惠美子と十一違ひですか、恰度いゝですね。その位、年が違つてゐないと良人として賴もしくありませんからね。」

「當人は、帝大の佛文科を出てゐます。」

「ほう。學歷もある方ですね。それぢや、一概に文士として、貶すわけには行きませんね。操行が惡いやうなことはありませんか。」

「少しは、お遊びになつた方なの。しかし、利口な人ですから、羽目をはづしたり、溺れたりするやうなことは絶對にありませんわ。頭のいゝ、ちやんとした方ですわ。殊に惠美ちやんは、かなり氣に入つていらつしやるやうよ。」

「しかし、度を越えた交際などはしてゐないでせうね。」

「それは、大丈夫ですわ。私が監督してゐるんですもの。」と、言つたが、毎日惠美子が、病院通ひをしてゐることを、姉が知つたら、どんな顏をするだらうかと思ふと、つい可笑しくなつて、笑ひたくなるのを、ぢつと堪へた。

「それぢや、和田ともよく相談して、お返事をしますよ。」

「どうぞ。」と、言つたがその時、房子から頼まれてゐたことを思ひ出し、
「お姉さん。隆ちやんにも、縁談があるんぢやないんですか。」
「隆一に、そんな馬鹿なことはありませんよ。そんな事いひました？」と、忽ち鹿爪らしい平生の姉に歸つた。
「一寸、外から聽いたのよ。」
「誰からです。」
「いゝえ。その方も、あるとは言はないんですよ。私に、本當かどうか訊いたんですもの。」
「斷然ありませんよ。隆一などは、學校を出て、自分で妻が養ふことが出來るまでは、結婚させない方針ですよ。とかく、早婚は弊害がありますからね。」と、言つたが、惠美子が、まだ二十前であつたのに氣がついたらしく、
「しかし、非常に良緣の場合は別ですがね。」と、つけ足した。
財産などよりは、人物本位などと口癖のやうに、言つてゐる姉が、久滋が財産家の二男だと知ると、忽ち、乘り氣になつたのを見ると、案じたよりも産むが安く、その緣談は、九分通りまとまるものとの安心で、歸つて行く美禰子の心は、却つて寂しいものだつた。

美禰子を送り出してしまふと、伊佐子女史は、すつかり惠美子の緣談で夢中になり、良人博士の歸りが待ちわびられた。
惠美子も、今年は十九、結婚させて早過ぎるといふ年ではない。自分の信ずる理想的教育法で、瑕瑾もなく育てゝ來たものゝ、しかし母親の身としては、心配がないでもない。もし萬一失策でもあると、教育家たる自分の立場にも關することになるので、人一倍神經過敏になりがちである。
といつて見る眼、嗅ぐ鼻の取締りは出來ず、去年の暮から、手藝を始めたとかで、學校の歸りが何時も遲いらしいが、元來少し浮ついて落着のない子なので、女らしい手藝など始めるのは、性格の矯正にもなるので、止せともいへず、今日はお友達との新年の集りとかで、出掛けたまゝまだ歸つて來ないが、お正月なれば叱るわけにも行かず、氣を廻せば、心配はなか〳〵絶えない譯であるから、いつそ美禰子のいふ通り、早く結婚させた方が、母親として、氣輕になるといふ譯である。
美禰子の話が本當だとすれば、なか〳〵の良緣である。しつかりした姻戚があれば、學校の經營にも、いざといふときは、後援して呉れるだらうし、子爵夫人などいふものも、何かの時には利用できるし……伊佐子には、今までにはなかつた樂しい想像が、湧いて來るのだつた。

八時半過ぎ、九時一寸前に、惠美子が歸つて來た。
「只今！」と、手をついて挨拶をすると、すぐ立ち上つて行きさうにするので、
「今まで、お友達の處にゐたのですか。」と、訊いた。
「はい。」
「女の方ばかり？」
「えゝ、面白かつたわ。」
「いくら面白くても、お晝から今までは、少し長すぎますよ。貴女も一つ、年をとつたのですから、もつと氣をつけなさい。」と、やはり舍監めいた口調ながら、何時になく穩かな物いひである。
惠美子は、莞爾と頷いて、二階へ上つた。
三十分ばかりして、良人の博士が珍らしい新年の屠蘇の醉で、眼元や頰をいつになく輝かせて、戻つて來た。いつもキチンとしてゐる人が、身も懶さうに、仙臺平の袴を踏みぬぐのを、流石に妻らしく、何かと世話しながら、伊佐子女史は良人が外出先の話を、きり出さぬうちにと、
「今日、美禰子が年賀に參りましてね、その序に……」と、樂しい話をきり出した。

言行不一致

あの日以來、宮川は、ベツタリ來なくなつた。
暮に、（俺の通つてゐた間の支拂は、俺がしてやる）といふ簡單な手紙を添へて、三百圓の小切手が屆けられた。いつもながら、金離れのよい男らしさに、ホロリとなつたが、流石に自分から、縒りを戻さうといふ氣にもなれず、かういふ親切が、男が女を義理責にするといふ古い技巧の一つだと思つて、それに拘泥らうとする氣持を清算し、隆一とどうにでもして、一緒になるつもりだつた。
隆一とは二日に一度、三日に一度會つてゐたが、實際問題の話は、此方もしたくなく、向うも氣がなささうなので、結局暮の巷を、今は宮川に見つかる心配もなく、飛び歩いてゐただけだつた。
久美子の希望は、いつか投書した女性相談の自分の問に、隆一の母親がする答にかゝつてゐた。事の成否は問はず、相手を漫畫的存在にするだけでも、無性に嬉しく、その新聞を懷に入れて、

隣家に行く自分の姿を想像するだけでも、一つの樂しみだつた。大晦日の晩は、隆一と遊んだが、一日二日は、誰も來ず退屈した。そんなときは宮川が戀しかつた。三日は、また何日ぞやのやうに、お友達を呼んで、隆一もこつそり招き、生々と馬鹿騒をした。

その翌朝、何氣なく新聞を開けると、待ちかねてゐた時は、容易に出なかつた自分の問が、思ひがけなく婦人欄のトップに掲載されてゐた。

向うで、附けてくれた見出しは、隣家の眞面目なる青年に愛され、日陰者の生活を清算したい、といふのである。

伊佐子女史の回答の見出しは、青年の兩親に事情を打ち明け、誤れる過去を清算し、正しき女の道に入れ！　といふのであつた。

ニヤ〳〵しながら、伊佐子女史が、鹿爪らしく、もつともらしく答へてゐる本文を讀んで行く裡に、微笑が擽つたく、頬にのぼり、軈てはクツクと身をもんで、笑ひ出した。九分通りは、思ふ壺の回答である。

（貴女の事情も、先方の御兩親の事情もよく分りませんが、貴女が過去の生活を後悔し、純粋な愛情に目ざめ、女性として正しき生活に入らうといふのは、まことに結構なことです。相手の青

年も貴女のお手紙の樣子では、大變眞面目らしい方ですから、凡てを先方の御兩親に打ち明けて、誠心誠意お願したら、相手が非常に頑冥不靈な方でない限り、貴女の心を理解してくれるのではないかと思ひます）

お正月のせゐか、いつもコチ〳〵の伊佐子女史が、物分りのいゝ自由主義的な回答をしたのこそ、運の盡であると、久美子は躍り上つて欣んだ。

カラ〳〵と雨戸を開け拂つて、和田家の庭を見下しながら、これから訪ねて行つたら、どんなに隣の奥さんが、狼狽へ騒ぐことだらう。つねに人を見下したやうな嵩にかゝつた表情が、忽ち度を失ひ、眼鏡の奥の眼が、どんなに醜く動くかなどと考へると、それを見るだけでも成功のやうな氣がして、人の惡い微笑が、間斷なく久美子の唇邊に、浮ぶのだつた。

アツサリとお化粧をすると、年齢よりは、ずーつと地味な縞のお召に、紋附の、黑い無地の羽織を着て、新聞の婦人欄だけを、懷に入れて、久美子は初舞臺に現はれる役者のやうに、緊張して、巫山戯た表情は、跡方もなく取り去つて、澄し返つて、自分の家を出て行つた。

和田邸の玄關に立つて、呼鈴を押したが、誰も出て來ないので、構はず硝子戸をあけて、中にはいると、年賀の客に備へて、黑塗の名刺受の立派な臺が、ひそやかに置かれてゐる。

二度ほど呼ぶと、顔見知りの女中が、遽だしく駈け出して來たが、意外な訪客なので、ひたりと手をついたまゝ、呆氣に取られたやうな顔をしてゐる。

「お隣りの堀田ですが、奥さまおいでゝせうか。」と、訊くと、女中は古い雛のやうに、平たくて、艶のある顔を上げて、

「おいでゝすけれど……」と、生意氣にも、怪訝な表情が、あからさまに顔に浮ぶ。

「おいでならば、是非お目に掛りたいんですが。」と、下手に淑かに頼んだ。

「はア、暫くお待ち下さいまし。」と、無愛想に奥へ退つてしまつて、なか〳〵出て來ない。伊佐子夫人が會ひ澁つてゐることが、手に取るやうであつた。三四分も待たせて、やつと女中が引き返して來ると、

「あの、申し兼ねますが、御用件を私が承はることは出來ませんでせうか。」と、口調だけは馬鹿に丁寧だつた。

「是非、お目に掛つて、申し上げたい事なんですの。お手間はとらせませんから、五分間でも宜しいんですの。」久美子も腰を据ゑてゐた。

女中は、再び奥へ入つたが、今度は伊佐子夫人も、觀念したと見え、すぐ引き返して來て、

「生憎今出掛けますところですが、一寸で宜しかつたら、どうぞ。」と、言つた。

招じ入れられて、猫でも滑るほど、よく磨かれた廊下を通つて、間もなく部屋に通された。

女史專用の客間であらうか、十疊の床の間を後に机が置かれ、机の上には書籍が整然と重ねられ、女史は机を前に端然として坐り、眼鏡越しに、ジロ〳〵と、襖をあけて、入つて來る足音の主を待ち構へてゐたが、久美子を見ると、流石に禮儀正しく、

「これは、まあどうぞ。私の方から一度伺はなければいけないんですのに、明けましておめでとう。さあどうぞ！」と、火鉢の前に置いた座布團をさし示した。

「突然上りまして、お邪魔いたします。」と、久美子も怯びれず膝を進めて、座布團を敷き、さて身近な伊佐子女史を見ると、永い年月修練した、眼下のものに對する、隙のない堂々たる態度は、驚異に價するほど、相手を威壓して、流石の久美子も、少し鼻白むで、どう切り出してよいか、戸惑ふほどだつた。

しかし、彼女もまた、これ天成の驕兒で、盲蛇に怯ぢずの、恐いもの知らずであるから、女中が茶菓を運んで、退いてしまふと、

「實は、私の一身上のことで、御相談に上つたのですが……」と、自分の方から切出して、巧ま

ぬ恥しげな、謙遜な微笑を顔一杯に浮べながら、
「私の思ひ餘りましたことは、今朝ほど、新聞で、奥様から御親切な回答を戴きましたので、大體の決心がついたのですが、私が問の方に書きませんでした、細い事情を、聞いて戴きたいと思つて伺つたのですの。」といふと、女史は――意外な面持でまんじりともせず、久美子の瞳をみつめてゐたが、
「今朝の女性相談欄へ何かお出しに？」と、いつたまゝ、憤りとも不安とも名狀しがたい、一種の表情で、驚いて訊き返すのを、久美子は默つてうなづいた。伊佐子女史もさてはと思ひ當つたらしく、默つてしまつた。
その後につゞいた二人の無言ほど、複雜な感情や事實を傳へ合ふ無言は、あまりないであらう。
伊佐子夫人は、氣の毒にもだん〳〵顏色が蒼ざめ、身體がそは〳〵と動き始め、火鉢の緣に置いた手が、火箸を取つて灰を弄るとすぐ、それを止め、一寸久美子を見直したが、その眼には、先刻までの落着いた眼色は、跡かたもなくなつてゐた。それに反して久美子は、ゆつくりと落着き拂つてしまつた。
遠くで、ほのかに聞えてゐた萬歲の音が、にはかに小路のあたりで、朗かに、のどかに、きこ

えてゐる。外は、お正月氣分であるが、室内には肅殺の氣が漂つてゐる。
「貴女は、私をお抑揺にいらつしたんですか……」と、伊佐子夫人が、口元を歪めていふのに、久美子はおひ被ぶせて、
「いゝえ、滅相もない。眞劍に御相談を申し上げに伺つたんですわ。」
「その隣家の青年つて、一體誰ですか。」
「お恥しいんですけれども、お宅様の隆一さんですの。」
伊佐子夫人は、半ば覺悟してゐたらしいが、ハツキリさう言はれると、のけぞるばかりに、動揺しながら、
「嘘おつしやい！　そんな筈はありません！」と、力一杯彈き返して來た。
「あら、そんなこと仰言つたつて、隆一さんは、昨夜も遲くまで、私の家へ遊びに來ていらしつたし、五日から赤倉へスキイに行くお約束をしてゐますし……」
さういはれると、伊佐子夫人も、いやな事實を認めずにはゐられなかつた。隆一が、お友達と、赤倉へスキイに行く許可を求めてゐるのは、昨年の暮からで（二、三日なら行つていらつしやい！）と、昨日朝いつたばかりである。恐しい破局に面したやうに、伊佐子夫人の顏は、土のや

うになつた。

「本當に、隆一さんは、お優しく、眞面目にいつて下さいますの。僕は、君のどんな過去でも許す。兩親さへ納得してくれゝば結婚してもいゝつて。私、本當に感激してしまひましたの。そして、今迄の自分の生活が、間違つてゐたといふ事が、しみ〴〵分りましたの。だから、私、誓つて今までの事を清算いたしますわ。そして、誠心誠意奥さまにお願ひいたしますわ。奥さまは、女性相談なんか受け持つていらつしやるし、私の間に、あんな御同情のあるいゝ答をして下さるんですもの。私、あのお答へを見て、嬉しくなりましたの。あのお答で、力を得ましたものですから、隆一さんにも御相談しないで、思ひ切つて直接お伺ひいたしましたの。私、本當に心を改めますわ。そして、奥さまの御指導のもとに、正しい本當の生活に入りたいと思ひますの。」

突飛な遣方ではあるが、いふ事の筋は、ハツキリ通つてゐる。學校で、赤くなつた學生などを相手に、度々いひ合つた事もあるが、これは事件が最愛の息子に關することであり、相手が突飛で無教養であるだけに、始末におへない。伊佐子夫人は、カメレオンのやうに赤くなり青くなつた。

家庭では善良にして、從順なる良人をお尻に敷き、學校では女には稀な政治的手腕を揮つて、

校主以上の權力を、ほしいまゝにして、我思ふこと成らざるなき伊佐子夫人としては、これは正に、一生の大難といふべきである。

無教養な妾風情と輕蔑してゐても、肝腎の隆一を人質に取られた上、妙なトリツクに、まんまと自分の言質をも、盜まれてゐる以上、恐ろしい大敵であり、人を人とも思はぬ辯舌は、相當なものである。

「隆一が、そんなこと本當に貴女にいつたでせうか。」と、今は最初の擬勢も、やゝ崩れて、おづおづ訊くと、

「仰言いましたわ。嘘だと思召すなら、隆一さんをこゝへお呼びになつたら、如何です。」

久美子は、まじろぎもしない。隆一は、二階に居る筈である。しかし、迂濶にこゝへ呼んで、もしもこの女と對決させ、隆一が自分の面前で、この女と夫婦にしてくれなどといひ出したら、それこそ始末におへないことになつてしまふ。隆一など呼ばないで、別個に擊退するほかはないと覺悟をきめて、伊佐子夫人は、平生の修養はこゝとばかりに、度胸をきめ、出來るだけ落着きを示しながら、

「私には、隆一がそんなことを言つたとは信じられないのです。みんな貴女が、私を揶揄つてゐ

るとしか考へられないんです。また、たとひ隆一が、そんなことを言つたとしても、あれはまだ親がかりの學生です。結婚すべき資格なんか斷然ありません。」

「だから、私むろん、隆一さんが卒業なさるまで、お待ちするんです。」

「卒業しても、自分で妻を養ふだけの收入を得るまでは、斷じて結婚させません。」

伊佐子夫人の唇が、ぶる〳〵震へてゐるのに、久美子のそれは、微笑さへ、洩しながら、

「だから、私、二年でも三年でも、お待ち致しますわ。その間、奥さまに御相談してどつかの學校へでも入つてゐようかと思ひますわ。私だつて、女學校をちやんと出てゐるんですもの。」

久美子の、あゝいへばかういふ綽々たる應對に、伊佐子夫人は、いよ〳〵業をにやしながら、

「貴女なんか、何年待つて下さつても駄目です。隆一が、どんなお約束をしてゐるとしても、母たる私が、改めてお斷りいたします。あれと、今後絶對に交際して頂きたくありません。」と、いひ放つた。

「まあ！　新聞での御回答とは、隨分違つてゐますのね。」久美子は、ます〳〵落着くばかりだつた。

「さうですとも。理論と實際とはいつも違ひますよ。」夫人の内心は知らず、言葉だけは、嚴然と

してゐた。

「へえ。そんなもんですか。」と、久美子が呆氣にとられた顔をして見せると、伊佐子女史は、グツと語氣を強めながら、

「物には、原則と例外とがありますよ。あの回答は、原則を示したのです。相手の青年が普通の家庭の息子であり、相談してゐる當人が、普通の女性であれば、あれで宜しいのです。ところが、隆一は教育家の息子ですよ。父も母も、大切な人樣のお子さん達を預つてゐる教育家です。それに第一、貴女が普通の女性ではありませんよ。」

「何故でせうか。」

「貴女は、今女學校を出たといはれたでせう。女學校を出て、人の妾になつてゐるなどといふことは、貴女に少しも人格のない證據ですよ。」苦しい女史のいひ拔けに、久美子は、いつか冷やかな笑みを浮べて、

「では、教育家の息子さんなんて、本當の戀愛も出來なければ、また女性に對して、實行出來ない嘘の約束ばかりしてゐると、いふことになるんですか。」

「いゝえ、隆一の場合など、もし何か約束でもしたといふなら、それは、貴女に騙されたのです。」

「おほゝゝ。」と、久美子は可笑くなつて笑ひながら、
「ぢや、なぜ私のやうな人格のない女に騙されるやうな方に、お育てになつたのです。」
「それは……」と、一寸詰つたが、
「あの子は、純に〳〵と育てたものですから、つい貴女なんかに誘惑されたのです。みんな貴女の責任です。」
「……でも、奥さんも、勝手な議論ばかりなさる方ですわね。」と、正面からいふと、
「いゝえ、勝手な議論ではありません。たゞ、貴女の悪巫山戯に、乗らないだけですよ。今後とも、隆一とは、一切交際して戴きたくありませんよ。」と、高壓的にいひ切ると、久美子も負けてはゐなかつた。
「それは隆一さんに仰言ればいゝことぢやありませんの。私は、私の決心がございますわ。奥さまは、私の悪巫山戯としてお取り上げにならないとしても、私は、とても眞劍なんですの。私は、どんなことがあつても隆一さんと一緒になつて見せますわ。奥さまは教育家としてのお力で、隆一さんを、せい〳〵御監督遊ばすといゝわ。私は、隆一さんとなら、心中でも何でも、しようと思つてゐますの。隆一さんも、私のためになら、死んで下さると、私は信じてゐますの。では、

これでお暇いたします。たいへん、お騒せして、相濟みません。」
おどかしの嘘とは思ひながら、萬が一にも、そんなことでもされてはと思ふと、伊佐子夫人は、震へ上つた。
坐つたまゝで、部屋を出て行く久美子を見送りながらも、伊佐子夫人の兩手は、火桶の縁で、小刻みに震へてゐた。

立つ鳥

父と子とは、將棋のよい相手であつた。硝子障子から、よく日の當る二階の廣縁で、卓子の上に、足のない將棋盤を置き、椅子にかけて、父子仲よく將棋を指してゐる。お正月休みの簡素な一風景である。このごろは隆一が少し强くなつて來て、いつも和田博士が苦戰するのに、今日は隆一の旗色がわるく、ひどく窘められてゐる。
桂馬で追ひ出された隆一の王が、中央へ逃げ出してゐる。博士の持駒は、飛車に金と銀、もう一手で詰である。しかし、隆一の成角が利いてゐるので、うつかりすると詰めそこなふ。

父博士は、一心不亂に盤面を睨んでゐる。

その時に、子供達の上り下りにさへ、口やかましい伊佐子が、小娘のやうにパタ〳〵といふ足音をさせて、階段を駈け上つて來た。

「先生、ちよつと。」と、博士を呼んだ。伊佐子夫人は、ごく上機嫌のときか、ひどく理窟ばるときは、良人博士を、(先生)と呼ぶ癖を持つてゐる。

夕立前の空模樣みたいな、すさまじい氣配である。伊佐子夫人の聲が、ビリ〳〵震へてゐるのに、將棋に夢中な博士は、兎に角この勝負に勝つてからといふやうに自分の桂を飛んだ。敵の成角の筋を防いでから、金を打つて詰めようといふ算段である。

「一寸、お話が……」と、伊佐子夫人が、せき込むと、

「何だい！　お待ち。」と、盤の上に蹋み込まうとすると、伊佐子夫人の手が、いきなり盤の上に延びて、ひつかき廻してしまつた。

「將棋なんか後で。隆一は、下へ降りていらつしやい。」

いつもながらの暴君振であるが、博士も隆一も馴れてゐるから、別に驚かず、隆一は崩した駒を小箱に入れると、下へ降りて行つた。

伊佐子は、隆一の足音が、きこえなくなるのを待ちかねて、

「先生、大變な事が起りましたよ。」

「一體何だい。そんなに興奮して……」と、まだ中途でよした將棋に未練を殘しながらいふと、

「恥です。恥です。恐ろしい恥です。私達の一生涯の恥ですよ。」と、夫人は唇をふるはした。

博士も、流石に不安さうな顏になつて、

「まあ。さう興奮しないで、わけを話して御覽！」と、劬るやうにいつた。

「いゝえ、興奮しないではゐられないことですよ。人もあらうに、裏の女が隆一と一緒にさせてくれといつて、押しかけて參つたのですよ。」

「ほゝう。」流石に、鈍重な和田博士も眼を瞠つた。

「こんな事になるのも、先生、貴君があまり暢氣なからですよ。私が、一層あの家をこつちで買ひ取つて、あんな者を追ひ出してしまつた方がいゝと、この間もあんなに申したぢやありませんか。それに、隆一の監督も、もつと嚴重にと常々申してゐるのに、貴君が、あれは溫和しい性質だから大丈夫だなんて、仰言るもんですから、こんな大失敗をやるんです。あの女の話では、隆一はあれの家へ遊びに行つてゐるやうですよ。」

「ほゝう。それは意外な。」
「いゝえ。今更お驚きになつても始まりませんよ。みんな貴君が、もつとしつかりなさらないからですよ。」
平生女天下でありながら、いざ何事か起つたとなると、すべてその責任を良人の博士になすりつけてしまふことが、伊佐子夫人の流儀である。
暫くの間、久美子が訪ねて來た容子を、ヒステリツクに細々と話してから、
「折角、惠美子によい縁談が始まつてゐるのに、こんな話が世間樣に知られたら大變ではありませんか。さう〳〵、私、今思ひだしましたわ。昨日、美爾子が參りましたとき、(隆ちやんにも縁談があるのぢやないの)と申してをりましたが、もしかしたら、あの女が隆一と結婚するなどと申すことを、世間へ言ひふらしてゐるのかも知れません。もし、さうだとすると、これは一大事でございますね。」
「全く。」和田博士も少からず、面喰つてゐた。
「そんなに、合槍ばかり打つていらつしやらないで、善後策に就ての御意見を、聽かして下さいませんか。」

「うむ。」
「私は、隆一を責めたくありません。第一、隆一とこんな汚らはしい話をしたくはありません。あの子には何事もなかつたやうに、解決いたしたいのです。」
「それは、わしも同感ぢや。」
「それなら、貴君がこの際、一働きなさるべきではありませんか。」
「それは、どういふ風に。」
「どういふ風につて！　判つてゐるぢやありませんか。相手の女を始末するのです。どうせ、あいふ教養のない女ですもの、話次第で、どうにでもなるぢやありませんか。」
「うむ、しかし、話には誰が行く？」
「それは、もちろん貴君です。私は、あの女を窘めて歸した以上、體面上行かれませんよ。かういふことは、主人たる貴君のなさるべき事ですよ。」
(嫌な事には女房を出せ！)と、下世話にはいふが、伊佐子夫人のは(嫌な事には亭主を出せ！)であつた。
「話をつけるとしたら、金を出さなければならぬが……」と、博士が口籠ると、

「勿論、しかし、餘計な金は出す必要はありません。三百圓もやれば澤山でせう。」

物事に執着がなく、一つの觀念から他の觀念へ、ひらり〳〵と飛び歩いてゐるやうな久美子は、今度の事件は、もとより成功するとは思つてゐなかつた。たゞ宮川夫人への意地張りと、自分の考へついた名案に、陶醉して突發的にやつたゞけである。だから、相手を狂言に巧くひつかけ、相手にとつては氣持の惡い捨科白を、巧に殘して來たことに、十分滿足してゐた。

惣には、巧く隆一をひつぱりだし、二三日熱海か箱根かへでも連れて行つたら、あの夫婦がひつくり返るやうな大騒をするだらうと、思つてゐるだけだつた。

その案を實行するにしても近所にゐては拙いし、また宮川と別れた今、百圓近い家賃の家に長くゐる手もないので、二三日の内にアパートへでも引越するか、でなかつたら、日本橋の相場街に間借りしてゐる父の下に、一時同居するつもりで、その日から引越しの下準備にかゝつてゐた。

綺唱維從ふ溫厚な和田博士も、その日はさすがに出澁つて（相手も今日は興奮してゐるだらうから、今夜は一晩落着かせて、明日行つた方が話がし易い）といふ口實で、翌日まで、延ばしてしまつた。

明けて五日の午後、博士は外出先から歸つたまゝのフロックコートで、裏の女を訪ねることに

になつた。

腕を、シャンとそらせ、こはらしいほど、身樗へて、ガラリと格子戸を開けると、……うちから出て來た、集金人風の男と、危く鉢合せする所であつた。玄關の三和土で、小さい下駄箱が、百貨店の包裝紙に包まれ、麻繩が、十文字にかけられて、玄關の障子も、次ぎの間の襖も、あけ放たれてゐた。

「御免！」と、いふと、奥の間から、洋服でストッキングなしで、ウェーヴの美しい斷髪に、手拭を冠つた久美子が、ヒョイと顔をだして、

「あら、まあ！」と、他意のない驚きの聲を揚げて、手拭を、後にパッと拂ふと、

「まあ。どうぞお上り下さいまし！」と、ぴたりとそこに坐つて、愛想よく挨拶され、和田博士は、すつかり毒氣を拭かれた形で、靴を脱いで敷臺に上ると、

「どうぞ、こちらへ！　散かつてをりますけれど……」と、玄關の次ぎの客間に通された。

「一寸、お紅茶をいれてね。」と、勝手元の方へ叫んでから、久美子は和田博士と、テーブルをはさんで腰をかけた。

「昨日はお邪魔いたしました。」と、久美子は素直に挨拶した。

（女房の口にかゝると、滅茶苦茶だが、なか〳〵愛想のいゝ女だわい！）和田は、心中で感心した。

「いや、實は昨日のことで、伺つたのですが、お引越しになるのですか。」と、和田博士が、慇懃に訊くと、

「えゝ。二三日の内に、越さうかと思つてゐますの。あまり長くゐると、お邪魔だらうと思ひまして……」笑ひながら、皮肉ると、

「いやこれはどうも恐縮……」と、博士は久美子の心の内を、測るやうに言葉を途切らせたが、もしや隆一と示し合はせて、二人で姿をかくしたりするのではないかと思ふと、心から不安になつて、

「お引越しになることは、隆一も存じてゐるでせうか。」と、訊ねた。

「さあ、私は、まだお話しませんが……御存じかも知れません。」

久美子の妙に絡んだ言葉に、博士はギヨッとなつた。久美子は、緊張した博士の顏を面白さうに眺めた。

彼女は、今こそ、勝利者であつた。昨日は、こゝへ引越して以來、物貰ひのやうな鬱陶しさで、

權利もないのに自分の上に、おほひ冠さつて來てゐた、伊佐子夫人を思ひのまゝに、やつゝけたし、今日はその良人の朴念仁博士が、鞠躬如としてやつて來てゐる。恐らく妥協降參の使節であらう。向うから、こつちへやつてくるなど、よつぽど昨日の捨臺詞が、利いたのであらうと思ふと、久美子は、秋空の鷹の如く爽やかなる思ひである。

もし、和田博士が不愉快なる態度で臨むならば、更に隆一を巧に誘きだして、一さわがせ騒がしてやらうと、彼女の如才ない態度の中にも、キラリとした刀身が藏されてゐた。

しかし、博士は愛兒の身上に關することゝて、眞面目一方であつた。

博士は、實に言ひにくさうな口振りで、

「御存じの通り、家内も教育家、私も學校へ出てゐますので、とかく世間の人から、いろ〳〵言はれますので、謹慎の上にも謹慎しなければならないのでございます。今度のことでも、私が實業家か何かでございましたら、考へやうもあるのでございますが、何分職業柄どうにも考へやうがないのでございますが、隆一が何と申し上げましたか、家内が何と申し上げましたか存じませんが、今度のことは、どうぞ何にもなかつたとして、諦めて下さいませんでせうか。私に、頭をさげよとならば、どんなにでも謝罪致しますが……」

「……」

「家内も、貴方の前では、どんなに强がつたことを申したかも知れませんが、いやもう大弱りで、昨夜も、ろく〳〵休まないやうでございました。」

流石に博士は、久美子のやうな女の扱ひやうを知つてゐた。

久美子は、伊佐子女史の悶々たる胸中を察し、會心の微笑がニヤ〳〵浮び上るのを、やつと制し乍ら、

「でも、奥様は、昨日は大變な劍幕でいらつしやいましたのに、隨分勝手なことを、仰言つて威張つていらつしやいましたのに、そんなお弱りになるわけは、ないぢやございませんの。」と、靜に針を含んだいひ方をすると、博士は額際の汗を拭ひながら、

「いや、どうも。どうぞ、お手やはらかに。私達夫婦の立場を御諒察下さつて、何事もなかつたことにして頂いて、どうぞ一つ――はあ――何分よろしく。」といつて博士は、丁寧に頭を下げた。

夫人に比べると、どこかトボケてゐて、憎めない存在だつた。

諦めのいゝ久美子は、もうとつくに諦めてゐたし、また何人にも、執念深く惚れるといふ性格でもなかつた。

「貴君のやうに、仰言つて下さると、話が判りますのよ。奥さまのやうに、まるで此方を人間扱ひになさらないと、私カツとなつてしまふ性分なものですからねえ。」

「御尤もで。」博士は、また丁寧に頭を下げた。

「おほゝゝゝ。そんなになさると痛み入りますわ。私、本當は隆一さんを、ひつぱり出して、二三日姿を隱さうと思つてゐましたの。でも、貴君がそんなに仰言るのなら、よしますわ。それに、私隆一さんだつて、そんなに惚れてゐる譯でもないんですものね。」

「はあー」

博士は、愁眉を開いて、ホツとしながら、

「どうも、大變ありがたうございました。これは甚だ失禮なんですが、私達の寸志としてお納め頂きたいと思ひまして……」と、麗々しく寸志と書いた奉書の包み金を差し出した。手切金の意味かと思ふと、久美子は教育家夫婦の端的な物の考へ方に、惘れてしまつた。

「何でございますの。これ。」

「金です。實にわづかな……」博士は、正直だつた。

久美子は、屹度あの伊佐子夫人の高をくゝつた指金からだと思ふと、カツとしかけたが、あま

りに露骨なやり方が、少し馬鹿々々しくなつたので、
「どういふお積りなんでせう。立退料ですか、それとも手切金ですか。一萬圓も下さるのなら頂いてもいゝんですが……」と、笑ひながら言つた。
「いや、そんな大金ではございません。ごく僅な……それに手切金とかそんな意味では、決してございません……」と、博士は赤くなりながら、いひわけした。久美子は、得たりかしこしと、すまし返つて、
「まあ。どういふおつもりで、お金なんか下さるんでせう。私には、ちつとも分りませんわ。」と、言つた。
「いや、さう仰言られると、まことにどうも、恐縮なんですが、これだけは、どうかお納めねがひたい。」と、博士は慇懃にくり返した。
「お金で、何でも片がつくと、貴君方は考へていらつしやるのでせうか。奥さんは、兎も角そんなに考へていらつしやるんでせうね。教育家なんて、やつぱり俗人と同じなんですわね。どうぞ、これをお持ち歸りになつて、奥さんにおつしやつて下さいません？　私は、妾は致してをりますけれども、まだ自分の戀愛問題をお金なんかでは、解決致しませんて。お分りになりましたか？」

「はあ！　はあ！」博士は、眼をパチ〳〵やつてゐた。
「と、いつて、私もうこれ以上、貴君方に絡みつかうとは思つてゐませんの。私だつて、まだ若いんですもの。隆一さんなんかと一緒になつて、貴君の奥さんのやうな方と、年中顔を見合はせてゐなくつていゝんですものね。」
「御尤も、御尤も。」
「それから、奥さんに、あまり他人の事や隣近所の事なんか、ガツ〳〵言はないで、御自分の息子さんのことでも、しつかり御監督なさるやうに、おつしやつて下さいません？……」と、久美子がいゝ氣持ちになつて、何か言はうとしてゐると、女中がひよつくり顔を出して、
「奥さま、お手傳ひの方が、蓄音機に特別の荷造りをしなくつても、よろしいんですかつて？」
「むろん、するのよ。でも未だいゝわ。今晩レコードをかけないと寂しいから……」といひさして、和田博士の顔を見返しながら、
「お喧ましいでせうが、もう今日明日ぎりですから。」と、微笑した。
「どうぞ〳〵、御遠慮なく。ぢやこれで私は、お暇しますから。お言葉に從つて、これを持ち歸ることに致しますから。」

博士は、金包を懐に入れると、幾度もお辭儀をしながら歸り去つた。

久美子は、昨年來のこだはりが、皆な、きれいサツパリ無くなつたので、何だかサバ〳〵した氣持になつてゐた。彼女の心には、悲しみも怒りも口惜しさも、長くは尾を引かなかつた。

たゞ今度男を持つなら、宮川のやうにお金があつて、隆一のやうに若くて獨身で感じのいゝ人をと、慾の深いことを考へてゐた。人盛んに、色美しければ久美子に來る春も、必ずしも遠くはないであらう。

人妻憂絶えず

お正月も松が除れ、十日、十五日と天氣がつづき、雨も涙ほど、雪も化粧ほどしか降らず、空氣は乾燥し、寒さはゆるまず、風邪が流行して、誰もが雨を願つてゐた。

二十日過ぎ、今朝は珍らしく雨に明けて、氣溫も暖く、かそけく春の氣配をひいてゐる靜かな雨だつた。瀧山氏は、相變らず大學へ、廣い家の中は、美禰子と女中と犬達とだけである。

「あさやー」と、呼んだが、勝手元にまで聲が屆かなかつた。そのかはり、コリーが、バサ〳〵

と大きな尾を振りながら身を寄せて來て、手の甲に冷たい鼻面を押しつけた。

それさへ、邪慳に廊下の方へ押しやつて、部屋の隅のエレクトロラに、モツアルトのソナタをかけて、また元の位置に坐つた。先刻女中にいひつけようとした用事も忘れて、ゆるくやさしく戸外の雨と相和するソナタも、聞くともなく聞かぬともなく、紫檀の机に肱をもたせて、物思はしげな佳き人の眉のあたり、退屈にうすら淋しき午下りであつた。

玄關で、ベルが鳴つてゐる。誰かしら？　美禰子は、耳を傾けた。

（久滋さんは昨日來たばかりだし……）

美禰子が仲に入つた話は、思ひの外にする〳〵とまとまり、一月の半に、久滋が退院すると、正式に久滋家から結婚の申込があつて、昨日結納が美禰子の家に屆けられた。これを澁谷へ持つて行かうとすると、今日の雨で、美禰子は一日延ばすことにした。

久滋が、惠美子との緣談を、たとひ自分が切り出したことゝはいへ、いそ〳〵と纏めてしまつたことは、何かしら自分への輕い面當のやうにも取れて、美禰子は淋しかつた。

事件以後、もう一月にもなつて、生活が平坦な元の軌道に戻つてしまふと、あの時の殊勝の心も、日一日うすれて、白紙のやうな空々しさを、ともすれば感じるのであつた。

あの時の良人の態度は、さながら曼陀羅の中の佛様の如く――世にもありがたい姿に拜まれ、（我君に仕へて、心のどかに暮さん）と決心したが、しかし一月もすると、良人はやつぱり元の木阿彌、神經も感情もない木物、金佛のやうにしか思はれなくなり、我から纏めた緣談の結納の目錄などを見ても、何か氣拔したやうな淋しさを感ずるのだつた。

「お客様よ。」

美禰子は、立つてエレクトロラのスヰツチを切りながら、勝手の方に聲をかけた。

訪客は、新年になつて初めて、顏を見せる房子夫人だつた。

女中が茶菓を運んで來るまでは、つゝましい社交的な笑ひ聲を立てゝ、新年の挨拶や、互の無沙汰の詫やら、改まつたものだつた。

「いゝ雨ですわねえ。これで、風邪も下火になりますでせう。家ぢや全部やりましたのよ。とても、忙しかつたんですの。みんな四五日でよくなりましたけれど……隨分、溫かいお部屋ね。ストウヴなんか、よどざんすわ。外から入つてくると、まるで溫室のやうですわ。」と、火鉢をはさんで、ずつと膝を進めると、房子夫人は美禰子の顏を、しげ〳〵見ながら、

「あら、貴女、少しお痩になつたんぢやないかしら。」

「さう見えます？」

「えゝ。やつぱり、自動車で衝突なすつたのが、惡かつたんぢやございませんの？」

「いゝえ。あれは、ほんとに大した事ぢやなかつたんですの。」

「ぢや、何かお惡いところでも、おありになるんぢやないの？」

「いゝえ。」

「なら、いゝけれど、少し窶れて見えますわ。」と、いひながら、視線が床の間の美々しい結納の三寶に流れたらしく、

「まあ。御親類に、おめでたが、おありになるの？」と、話題が變つた。

「えゝ。姉の娘ですの。」

「惠美子さんとかいつた方――どなたと？」

「私と一緒に自動車で怪我した久滋さんといふ方――私達が仲人なんですの。」と、あけすけに、さも快濶らしく微笑んだ。

「まあ、さう。それですつかり疑ひが晴れたわ。私あの方、貴君の愛人か何かゝと、少しは疑つてゐたのよ。」

「とんでもない。」と、美禰子は、ハツキリいひながらも、流石に伏目になつた。房子は、その話で久美子のことを思ひだしたと見え、

「隆一さんに縁談があるといふ話は、嘘だつたんでせう。」

「えゝ。そんな話、ちつともないのよ。」

「私も、やつぱり嘘だと思つてゐたの。でも、念のためにお訊きしたの。實は、いつかお話した堀田の娘が……」と、房子夫人は、持前のお喋りにいり、久美子とめぐり逢つた顚末を、精しく話した。

「そんな譯で、苦し紛れの出鱈目とは思つてゐたの——けれど、ついお訊きしたの。ところが、私がその時、さん〳〵久美子をやつゝけたのが、利いたと見え、何だか久美子とは、もう手が切れたらしいの。」

「それは、おめでたう！　ぢや、貴女今一番幸福なんでせう！」

美禰子は、笑ひながら訊いた。すると、房子夫人は、意外にも首を横に大きく振り、

「ところが、さうは行かないのよ。」と、言つた。旦那樣には、隱れて吸ひ習つたといふ、兩切り煙草を片目にいれて、房子夫人は、眼をシバ〳〵させながら、言はねば腹膨ることのやうに、良

人の近況を話し始めた。

「本當に、宮川なんか、箸にも棒にもかゝらない男よ。全く恐るべき良人よ。女房や子供には、それほど邪慳でもなし、子供なんか、人一倍可愛がつてゐる癖に、家庭には、一刻も落着いてゐられない性質に出來上つてゐるのよ。久美子と、手が切れたらしい當座は、暮だしお正月だし、十日ばかり家にゐたんですけれども、その間の不機嫌さつたらないのよ。夜なんか家にゐると、へんに拗てしまつて、八時頃から寢てしまふんでせう。氣難かしく、我儘で機嫌が取りにくゝつて始末におへないの。外に、女がある時には、たま〳〵家にゐるときは、私達の御機嫌を取るために、とても優しいし、私に着物や、子供に玩具などもよく買つてくれるのよ。男なんていふものは、どうして家庭に安住出來ないんでせうね。もつとも、こちらの旦那さまなんか、家庭本位で、本當に羨ましいけれど……」

美禰子は房子の話を聞いてゐる内に、瀧山が研究室に閉ぢ籠るのも、結局、家庭に安住出來ない氣持において、善惡の區別こそあれ、宮川とどこか共通の所があるのではないかと思つた。ともかく妻たる身にとつては、家庭以外の溫柔鄉に憬れ、妻以外の女性の匂に慕ひ狂ふ宮川も、研學窮理の仕事にのみ生き甲斐を求めてゐる瀧山も、家庭に安住してくれない寂しさにおいては、

同じではあるまいかと思つた。

房子夫人は、美爾子の氣持などには、おかまひもなく、

「家にゐて、そんなに機嫌の悪い良人を見てゐると、いつそ外へ遊びに出てくれる方がいゝと、つく〳〵思ふことがあるのよ。もつとも久美子なんていふ相手は困るんだけれど……でも、この頃また歸りが、だん〳〵遅くなつてゐるから、今に何かきつと出來るかも知れないわ……だから、私の苦勞はいつが來ても絶えないわけね……」

しかし、房子の愚痴を時々、聽かされる美爾子の心の中の寂しさも、また絶えないであらう。

人生婦人の身となる勿れ、百年の苦樂他人によると、古人のいひけん言葉は、いづれの代にも、新たなるわけで、人妻なれば憂ひ絶えざるものか（君獨り暎く勿れ、憂きは互の身の上ぞ）と美爾子は、言はうと思つたが、そんな細い氣持の分つてくれる相手ではないと思ふと、そのまゝ寂しく口を噤んで、いつか暮れかけてゐた庭に眼をやつた。

緣に近い葉ばかりの山茶花に、雀が雨に濡れながら、チョン〳〵と、小枝を渡つてゐる。

三家庭

—大衆文學選—

鎌倉文庫

定價金拾五圓（稅込）

昭和二十一年五月　五　日初版印刷
昭和二十一年五月　十　日初版發行

著者　菊池寛

發行者　岡澤一夫　東京都日本橋區通一丁目九　白木屋内

印刷者　田代伯文　東京都板橋區板橋町三ノ六四

印刷製本　帝都印刷株式會社　東京都板橋區板橋町三ノ六四

發行所　株式會社　鎌倉文庫　會員番號A二〇六〇一一　東京都日本橋區通一丁目九　白木屋内　電　日本橋一三三一　一三四一　振替口座東京一九四九九二番

落丁・乱丁等に對しては責任を負ひます

配給元　日本出版配給統制株式會社

60.- 12月9日 50.-
12.9
219
11.26

新形式美麗本・各册約二五〇頁

青春の書

堀辰雄・燃ゆる頬　河盛好藏譯・ピエールとルユス（ロマン・ローラン）
山内義雄譯・窄き門　市原豐太譯・クララ・デレブウズ（アンドレ・ジイド）（フランシス・ジャム）
田中英光・オリンポスの果實　堀口大學・青柳瑞穗共譯・幸福の谷へ（ヴァレリー・ラルボー）
石川啄木・悲しき玩具　今日出海譯・地の糧（アンドレ・ジイド）
宮原晃一郎譯・日向丘の少女　山内義雄譯・ポールとヴィルジニー（ビヨルンソン）（サン・ピエール）
吹田順助譯・ヒユペーリオン（前後）　大山定一譯・若きウエルテルの惱み（ヘルデルリン）（ゲーテ）

東京日本橋　鎌倉　白木屋二階　庫

終